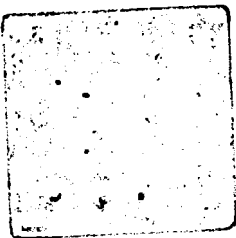


鹿兒島県史料

忠義公史料

第七卷



題  
字

鎌 鹿  
田 兒  
要 島  
人 県  
事

## 例言

一 本書は、東京大学史料編纂所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一九〇冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料忠義公史料」全七巻として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間である。第七巻は明治四年二月から明治五年九月の内容と補遺を収めて刊行した。

一 補遺として、忠義公日記・忠義公手記覚・忠義公年譜・忠義公年表・市来四郎自叙伝を収め、それぞれに解説を加えた。

一 底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。ただし、補遺については、その体裁を変えた。

一 明治五年正月から九月分は、底本が欠本になっている。欠本の部分については、東京大学史料編纂所蔵の忠義公史料の稿本によって補正し、補正箇所頭初に稿本の表紙を掲げて、表紙のわきに「稿本にて補正」と註記した。

一 編集の体裁は、原則として原編者の体裁によったが、一部記載の位置を変更したものもある。また、ほとんどの見出しは原編者が掲げてないので、校訂者が新しく掲げた。

一 原本などの現存するときは、努めてそれと対比して原本どおりに校訂し、文末に「〇〇所蔵本にて校訂」などと註記した。

一 刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。ただし、補遺については底本の体裁によった。

一 固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字のノ（しめ）は、そのまま用いた。

一 仮名は、原本または底本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが江だけはそのまま用いた。

- 一 平出・拾頭および闕字は、原本または底本の体裁によった。
- 一 日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。
- 一 地図および花押等は、写真等により原本または底本のとおりとした。
- 一 原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のものなどは底本の体裁によった。
- 一 新に註を附するときは、〔 〕を附して、原編者の註と区別した。
- 一 人名および地名については、国の内外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。
- 一 人名等については、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。
- 一 本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。
- 一 朱書は、その部分を「 」で示し、「朱」と傍註を附した。
- 一 頭註および付箋は、「 」で行間に示し、「〔頭註〕〔付箋〕と註記した。ただし、後筆のものは削除した。
- 一 欠所部および解説困難な箇所の原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□ で囲み、本マ、・虫喰または（○○カ）と傍註を附した。
- 一 文意の通じない字または箇所には、「ママ」または「〔衍カ〕・（○○カ）と傍註を附した。
- 一 原編者が目録等に掲げてある記・附記・参照・参考の文字は、第四巻に従って記・参照に統一した。
- 一 重複して掲げてある史料については、これを削除した。
- 一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。ただし、補遺には掲げなかった。
- 一 折込み附録として、島津忠義系図（故大妃殿下追悼号所収昭和十四年刊）を掲げた。
- 一 見返しに、国会図書館憲政資料室所蔵「島津久光書翰」と宇和島伊達事務所所蔵「島津忠義書翰」を掲げた。

# 忠義公史料 第七卷 目次

例言

明治四年(辛未)

一	島津忠義祇園洲砲台射撃ヲ臨檢ス	二月二日	一
二	西郷・大久保ノ一列着京ス	二月二日	一
三	前年出學ノ學生ヲ召還ス	二月	二
四	岩倉勅使鹿兒島・山口ニ藩使命ヲ復申ス	二月	三
五	諸技芸師家ノ私塾ヲ開クニハ地方官ノ准許ヲ要ス	二月八日	四
六	勅シテ島津久光・忠義ノ藩政改革兵賦整頓ノ功蹟ヲ賞ス	二月	四
七	藩庁教授ノ職級ヲ定メタルコトヲ達ス	二月十三日	五
八	鹿兒島・山口・高知三藩ノ兵ヲ徵シテ親兵トナシ兵部省ニ隸セシム	二月	五
九	鹿兒島藩ニ警司人員ヲ徵スルコトヲ令ス	二月十四日	六
一〇	府藩県ニ令シ皇族ノ陵墓ヲ檢査録上セシム		七
一一	華族ヲ以テ悉ク東京府ニ貫セラル		七
一二	九州路動揺ニ付鹿兒島・熊本・山口三藩ノ兵ヲ發シ鎮撫セララル		七
一三	西郷隆盛發途帰藩ス	二月十五日	七

- 一四 火防ニ付処罰ノ条項ヲ達ス 二月十九日 …………… 七
- 一五 軍務局ニテ影之流門弟野試合ヲ举行ス 二月二十二日 …………… 八
- 一六 西郷隆盛東京ヨリ帰着ス 二月二十四日 …………… 八
- 一七 故参議廣澤真臣襲撃ノ兇賊必獲ヲ詔ス 二月 …………… 九
- 一八 在村宅地変換区域ヲ定メルコトヲ達ス 二月晦日 …………… 一〇
- 一九 山口藩ノ逋逃ヲ隱匿シタル久留米藩ヲ巡察使四條隆謨ニ命シ檢按セシム …………… 一三
- 二〇 兵部省親兵ノ旅費手当支給ノコトヲ達ス 二月晦日 …………… 一三
- 二一 兵部省旧名古屋邸ヲ親兵ノ屯營ニ充ツ 二月 …………… 一三
- 二二 加藤弘藏時事ニ付建言ス 二月 …………… 一四
- 二三 士族等級廢止杯ニ付キ高知藩意見書 二月 …………… 一四
- 二四 桑名旧臣瀧安弘・馬場正武ノ意見書 二月二十二日 …………… 一五
- 二五 市來四郎廣貫島津久光へ建白書 二月 …………… 二〇
- 二六 官制官等表ノ案文…………… 二七
- 二七 島津久光病ニヨリ代リテ島津忠義上京スルコトヲ達ス 三月 …………… 三二
- 二八 藩庁廣澤参議刺殺者搜問ノ勅命ヲ伝達ス 三月十日 …………… 三三
- 二九 藩兵一隊親兵トシテ乗船東上ス 三月十一日 …………… 三三
- 三〇 藩庁吏員更遷期限延長ノコトヲ達ス 三月十一日 …………… 三四
- 三一 藩庁心付金給与ヲ停メ褒賞ヲ行フヲ達ス 三月十二日 …………… 三五

目次

三二	諸郷兵員ノ紀律ヲ振肅シ兵氣ヲ奨舞スヘキヲ達ス	三月十四日	三五
三三	藩庁会計局藩吏俸禄受取方手続ヲ告示ス	三月十五日	三六
三四	藩庁諸郷地頭居所指定ヲ停メ宜ニ任ス	三月十八日	三六
三五	藩庁区内郷校ヲ設置シタルコトヲ達ス	三月十九日	三六
三六	藩庁島津忠義本学校外二校試業臨閲ノコトヲ達ス	三月十九日	三七
三七	藩庁城下警備ニ外城兵隊更番衛戍ヲ達ス	三月二十日	三七
三八	藩庁諸吏ノ減俸ヲ二ケ年延期スルヲ達ス	三月二十二日	四二
三九	南校教師ヲ刃傷シタル本藩人肥後壮七外二名ヲ処刑ス	三月	四三
四〇	藩庁忠義上京ニ付神社参詣ノコトヲ達ス	三月二十二日	四四
四一	藩庁大山綱良日田県出張ノコトヲ達ス	三月二十三日	四五
四二	久留米藩騷擾ニ付藩兵ヲ派遣セラル	三月	四六
四三	藩庁島津忠義上京発途ノ延期ヲ達ス	三月二十四日	四七
四四	朝集ノ知藩事ニテ満期ノ者ノ帰藩ヲ許ス	三月	四七
四五	各藩ニ贖札改所ヲ設ケ提理ヲ嚴ニセシム	三月二十七日	四七
四六	英人教師ヲ刃傷セシ者ノ処刑ヲ通達ス	三月	四八
四七	藩庁養料給与期限ヲ延長スルコトヲ達ス	三月二十七日	四八
四八	藩庁忠義上京ノ趣意並附従心得ヲ達ス	三月	四八
四九	藩庁家族養料下賜ノ制限ヲ達ス	三月	四九

- 五〇 藩庁産科医ヲ置キ求療ヲ聴スコトヲ達ス 三月…………… 四九
- 五一 外国人居留地等通行ノ節ハ管轄地方ノ印鑑ヲ持参スヘキヲ達ス 三月…………… 四九
- 五二 劍崎灯台建築ノコトヲ藩内ニ達ス 三月…………… 五〇
- 五三 藩庁南方神社祭式ヲ改正ス 四月…………… 五一
- 五四 工商ノ制限ヲ立テ新ニ税法ヲ設ル等ハ稟候セシム…………… 五三
- 五五 藩庁軍人養俸ヲ従前通支給スルコトヲ達ス 四月二日…………… 五三
- 五六 藩庁会計局各局ノ定員給禄ヲ申供セシム 四月三日…………… 五三
- 五七 藩庁島津忠義名代上京願許可ノ旨ヲ訓達ス 四月三日…………… 五四
- 五八 私ニ紙幣ヲ製造スルヲ禁ス 四月四日…………… 五四
- 五九 藩庁忠義公上京発途ニ付送問アルヘシト達ス 四月…………… 五五
- 六〇 戸籍法ヲ改正シ其規則ヲ頒ツ…………… 五五
- 六一 社寺ノ毎歳埋葬人員・姓名ヲ録上セシム…………… 五六
- 六二 採礦ノ請負ヲ許シ其税ヲ課セラル…………… 五六
- 六三 藩庁飛脚差立期日ヲ定メ其手続ヲ達ス 四月七日…………… 五六
- 六四 府藩県ニ令シテ国典・珍書ヲ索求ス 四月八日…………… 五七
- 六五 藩庁島津忠義發途延引ヲ達ス 四月八日…………… 五七
- 六六 地方官ノ公罪遞減法知事・参事・属ヲ以テ三等ト定ム…………… 五七
- 六七 久留米藩逋逃一件鎮撫ノ為メ藩兵二小隊ヲ遣ス 四月…………… 五七



目次

六八	親兵四大隊上京発航ス……………	六〇
六九	地方貸付金穀ノ借用証書式ヲ定ム 四月十日 ……	六一
七〇	藩庁島津忠義発途上京ノ期日ヲ達ス 四月 ……	六二
七一	異宗徒取締ノ為外務権大丞ヲ遣サル 四月十二日 ……	六二
七二	城下附近十里内諸郷兵召集操練ス 四月十五日 ……	六四
七三	島津忠義発途上京ス 四月 ……	六五
七四	藩庁諸局附属長ノ軍役高ノ所有ヲ停メ城下居住附士ニ売付スルコトヲ達ス 四月十七日 ……	六七
七五	藩庁出米ハ旧制ニ基キ集成館火薬局ノ経費ニ充ツルコトヲ達ス 四月十九日 ……	六七
七六	藩庁兵学校ヲ廢シ軍務局寮ト改称ス 四月二十三日 ……	六八
七七	逃籍者ノ復籍規則ヲ改定ス 四月二十三日 ……	六九
七八	藩庁諸局不用ノ書冊類ヲ小学生徒習字用ニ供与スルコトヲ達ス 四月二十四日 ……	六九
七九	藩庁諏訪社祭神ノ更祭並社号改称ヲ達ス 四月二十五日 ……	七〇
八〇	藩庁死屍埋葬ノ手続ヲ達ス 四月二十七日 ……	七〇
八一	参議大久保利通ヲ山口藩ニ差遣ス 四月 ……	七一
八二	藩庁掌務延滞ヲ戒メ其処理ヲ達ス 四月 ……	七三
八三	藩庁漆木栽植免許果実売上ノ手続ヲ達ス 四月 ……	七三
八四	藩庁庁吏ノ定員ヲ定ム 四月 ……	七三
八五	工部省御雇外国人通行ノ節府藩県ヨリ護送人ヲ進致セシム 四月 ……	八〇

八六	附録	.....	八〇
八七	参議大久保利通山口藩ニ発途ス	五月.....	一〇三
八八	藩庁島津忠義ノ東京着ヲ報シ賀詞ヲ申フヘキコトヲ達ス	五月三日.....	一〇四
八九	岩倉具視訪問島津忠義対謁ス	五月.....	一〇四
九〇	藩庁紡績方ノ管轄ヲ生産方ニ移スコトヲ達ス	五月十日.....	一〇五
九一	藩庁長田神社ノ祭日ヲ定メタルヲ達ス	五月十日.....	一〇五
九二	大久保利通木戸孝允・井上馨ニ日田県事件ヲ説キ上京協力ノ事ヲ談ス	五月.....	一〇五
九三	神社ノ班位ヲ定メ祠官ノ世襲叙爵ヲ停ム	五月十四日.....	一〇六
九四	新痘種ヲ府藩県ニ頒タル	五月十四日.....	一〇七
九五	大久保利通山口藩知事ニ見ユ	五月十四日.....	一〇七
九六	島津忠義麝香間祗候ヲ命セラル	五月十七日.....	一〇七
九七	島津忠義参内ノ日時ヲ伺フ	五月十七日.....	一〇七
九八	藩庁砲台発射ノ際国旗ヲ揚ケテ船舶ノ通行ヲ停ムルコトヲ達ス	五月.....	一〇八
九九	島津忠義参内勅使下向ノ奉謝ヲ奏ス	五月十九日.....	一〇八
一〇〇	藩庁城下附近各村合併ノコトヲ達ス	五月二十二日.....	一〇九
一〇一	寺院地境内外ノ区域ヲ定メ其境外地ノ六ヶ年間ノ税額ヲ録上セシム	.....	一一〇
一〇二	漂尸ヲ埋葬セシメ其告ル者ニ銭ヲ与ラル	五月二十五日.....	一一〇
一〇三	鉾山所在採掘量申供ヲ督令セラル	.....	一一〇

目 次

一〇四	華・士族・卒逃亡者収録ノ制ヲ定ム	.....	一一一
一〇五	家禄下付方ノ手續ヲ令セラル	.....	一一一
一〇六	藩庁旅費定則ヲ改正スルコトヲ達ス	五月	一一一
一〇七	大久保利通山口藩ヨリ帰京出邸ス	.....	一一二
一〇八	当今街説	.....	一一二
一〇九	藩庁朝官ニ列スル者ノ履歴録上ノ令ヲ達ス	六月二日	一一八
一一〇	藩庁町名改称ノコトヲ達ス	六月三日	一一八
一一一	藩庁島津忠義麝香間祇候ヲ命セラレタルニヨリ諸士祝賀スヘキコトヲ達ス	六月五日	一一九
一二二	藩庁参政橋口與一郎ニ上京ヲ命ス	六月十日	一一九
一二三	藩庁照國神社ノ祭期改定ヲ達ス	六月十日	一二〇
一二四	藩庁生徒水泳場ヲ定ムルコトヲ達ス	六月十日	一二〇
一二五	島津忠義三條實美ヲ訪フ	六月十日	一二〇
一二六	藩庁諸郷士飛地所有交売手續ヲ達ス	六月十六日	一二一
一二七	寺院ノ御所・門跡等ノ旧称ヲ廃ス	六月十七日	一二一
一二八	藩庁伶人ノ役職ヲ置キ其給俸ヲ定ム	六月十七日	一二二
一二九	藩庁第七郷校直営ノコトヲ達ス	六月十八日	一二二
一三〇	華族ノ家令・扶従犯罪擬律ヲ定ム	六月十八日	一二三
一三一	大参事西郷隆盛参議ニ任セラル	六月二十五日	一二三

一一三	西郷隆盛参議任官ヲ達セラル	六月二十七日	.....	一一三〇
一一三	寺格ニ拘ラス寺院住職継目等地方官ヲシテ進退セシム	六月	.....	一一三一
一一四	藩庁給費諸生病疾アル者ノ申請ヲ達ス	六月	.....	一一三一
一一五	藩庁森岡清左衛門ニ會計奉行ヲ命ス	六月	.....	一一三二
一一六	寺師宗道日記	六月十日	.....	一一三二
一一七	舊邦秘録	六月	.....	一一三二
一一八	池端拙蔵附士ヲ士族ニ被召入度歎願書	六月十三日	.....	一一三四
一一九	勅シテ政教一致ノ要旨ヲ宣教使ニ諭シ諸藩宣教掛ヲ罷遣セラル	.....	.....	一一三九
一二〇	島津忠義国事諮詢ノ命ヲ奉セラル	七月四日	.....	一一四〇
一二一	藩庁村ノ分置廃合ノコトヲ達ス	七月五日	.....	一一四一
一二二	藩庁僧侶輩ノ藩内出入ヲ申禁スルヲ達ス	七月十三日	.....	一一四一
一二三	安井息軒黒田嘉右衛門へ書翰	七月十三日	.....	一一四一
一二四	島津忠義参内廃藩ノ詔勅ヲ奉承ス	七月十四日	.....	一一四二
一二五	詔シテ列藩ヲ廃シテ県ト為ス	七月十四日	.....	一一四三
一二六	弁官ヲ廃ス	七月	.....	一一四四
一二七	島津忠義知事ヲ免セラル	七月	.....	一一四五
一二八	藩庁開墾地処分ノコトヲ達ス	七月十五日	.....	一一五〇
一二九	藩庁定限外余地処分ノコトヲ達ス	七月	.....	一一五〇

目 次

一四〇	藩庁兵器方日記役ヲ廢シ筆者ヲ置キ其職級ヲ達ス	七月二十二日	一五一
一四一	島津忠義參内御苑内山里茶亭ニテ宴ヲ賜フ	七月二十三日	一五一
一四二	樞大參事伊集院兼寛出納權正ニ任セラル	七月二十九日	一五二
一四三	大原重徳華族頭辭退ヲ東京府ニ願フ	七月二十九日	一五二
一四四	藩庁役職ノ履歴ヲ申供スルコトヲ達ス	七月晦日	一五三
一四五	藩庁鹿兒島神社・枚聞神社社格ノ達令ヲ達ス		一五三
一四六	藩庁学館出席者ノ稽古扶持米引取ヲ達ス	七月	一五四
一四七	附録		一五五
一四八	廢藩置県ノ令ヲ示シ人民ヲ訓戒ス	八月五日	一五六
一四九	藩庁知政所ヲ鹿兒島県庁ト改称スルコトヲ達ス	八月	一六七
一五〇	旧藩内制札ヲ撤シ標木書改ノコトヲ達ス	八月五日	一六七
一五一	大原重徳華族觸頭ヲ辭ス	八月八日	一六七
一五二	池上四郎ヲ清国ヘ派遣スルコトヲ達ス	八月八日	一六八
一五三	皇国総人員並総高調	八月	一六八
一五四	人造硝石製造ノ儀ニ付申上候書付		一六九
一五五	池上四郎・木佐貫源助ヘ上京スヘキヲ達ス	八月二十三日	一六九
一五六	某辞令明治二年		一六九
一五七	大山綱良等琉球ニ至ル		一七〇

- 一五八 伊地知正治御用ニテ上京ス……………一七〇
- 一五九 地方官ヲシテ士族ノ輩ニ告諭シ武門ノ流弊ヲ除カシム 八月十七日 ……一七〇
- 一六〇 桂久武ヨリ西郷隆盛へ書翰 八月十七日 ……一七〇
- 一六一 親兵中解隊帰県ス……………一七二
- 一六二 四鎮台ヲ置キ管地ヲ定ム 八月二十日 ……一七三
- 一六三 庁下附近借地地租ノ納付ノコトヲ達ス 八月 ……一七五
- 一六四 旧藩紙幣製造ノ器械及ヒ料紙ヲ収メラル 八月十八日 ……一七五
- 一六五 諸願伺届書式ヲ定ム 八月十七日 ……一七五
- 一六六 会計局老分出銀上納方ヲ達ス 八月二十五日 ……一七六
- 一六七 県庁医学校ヲ本学校ニ移管シ其職員以下ヲ廃スルコトヲ達ス 八月二十八日 ……一七六
- 一六八 県庁元医学校職員ヲ本学校職員ニ移ス 八月二十八日 ……一七六
- 一六九 諸藩ノ使者等西郷宅へ多クノ来訪者アリ……………一七六
- 一七〇 海江田信義ヨリ大久保利通へ書翰 八月二十五日 (明治二年) ……一七七
- 一七一 西郷隆盛ヨリ黒田清綱へ書翰 八月二十七日 (明治四年) ……一七八
- 一七二 吉井友實・西郷従道兵制改革ノ為帰県ス 八月 ……一七八
- 一七三 三等伶人ヲ四人置クコトヲ達ス 八月 ……一七九
- 一七四 七月十四日ノ相場ヲ以テ紙幣引換ヲ達ス 八月 ……一七九
- 一七五 島津忠義天盃拜戴ヲ県庁ニ報ス 八月十八日 ……一七九

一七六	医学校生徒ニ學術勤勉スヘキヲ達ス	八月	一八〇
一七七	礼葬式ヲ上木シ其ノ販売方ヲ達ス	八月二十八日	一八〇
一七八	牛豚肉販売ニ付キ注意スヘキヲ達ス	八月	一八〇
一七九	穢多・非人等ノ称ヲ廢シ身分・職業共平民同様トス		一八一
一八〇	御使者之大略		一八一
一八一	宮内省用石高ほか覚	八月	一九一
一八二	市來四郎建言書草案	八月二十二日	一九二
一八三	軍務局海軍水火夫募集ヲ達ス	九月朔日	二一〇
一八四	県庁大山綱良参事任命ヲ達ス	九月二日	二一〇
一八五	県庁解隊及兵役免除ノ者旧勞ニ仍リ俸禄ヲ給与スルコトヲ達ス	九月三日	二一〇
一八六	東京警固卒至急上京スヘキニ付懇望者願出ツヘキコトヲ達ス	九月	二一一
一八七	県庁變革ノ趣旨ヲ示シ県内諸兵大操練ヲ举行スルコトヲ達ス	九月	二一一
一八八	県庁諸士無高少高ノ輩救助米給与ノ手續ヲ達ス	九月四日	二一一
一八九	県庁作硝土採取ノ事ヲ達ス	九月八日	二一三
一九〇	島津久光分家賞典五万石分賜ノ命ヲ拜ス	九月十日	二一三
一九一	大山格之助贈三好慎蔵書	九月十一日	二一四
一九二	県庁來十五日吉野原大操練ノ心得ヲ達ス	九月十二日	二一四
一九三	島津久光・忠義叙位宣下ノ命ヲ拜ス	九月十三日	二一五

一九四	県内常備後備兵吉野原ニ大操練ヲ挙行ス	九月十五日	二二六
一九五	県庁東京就学諸生三十名ヲ命ス	九月十七日	二二七
一九六	島津忠義天長節ニ付参内天機ヲ伺フ	九月二十一日	二二八
一九七	県庁招魂祭相撲馬寄せ挙行ノ事ヲ達ス	.....	二二八
一九八	県庁下士族所有地売却返高払下代減価上納ノ期ヲ達ス	九月	二二九
一九九	県庁散髪・磨刀ヲ許スノ令ヲ達ス	九月	二二九
二〇〇	県庁着服ノ令ヲ示シ其心得ヲ達ス	九月	二二〇
二〇一	県庁島津忠義ノ叙位ヲ達ス	九月二十八日	二二〇
二〇二	東京ノ諸県支庁ヲ廢シ県吏ヲ築地ニ寄寓セシム	九月二十八日	二二一
二〇三	文部省旧藩遊学生徒ノ現員ヲ録上セシメ其資費ヲ給ス	.....	二二一
二〇四	道島日記	.....	二二二
二〇五	舊邦秘録	.....	二二二
二〇六	阿部政一謹白書	九月	二二七
二〇七	市來四郎農耕并産業学校御建設有之度云々建言ニ付同志中内議之趣	九月	二二八
二〇八	県庁庁衛及伝事方移転ノ事ヲ達ス	十月二日	二三一
二〇九	県庁旧城郭図面調査ノ令ヲ達ス	十月三日	二三三
二一〇	県庁国学・漢学両校ヲ廢スルコトヲ達ス	十月三日	二三二
二一一	県庁元旦・天長節賀表上呈ノ令ヲ達ス	十月五日	二三三



目次

二二二	旧藩知事ノ解任ヲ口実トシ結党暴行スル者ヲ申戒ス	十月七日	二二三
二二三	県庁監察局ノ転局ヲ達ス	十月七日	二二三
二二四	県庁祖霊自祭又ハ産土神社司ニ託祭スルコトヲ達ス	十月七日	二三四
二二五	華族ニ輦轂ノ下ニ在テ勉励知見ヲ開キ衆表トナルヘキコトヲ令ス	十月八日	二三四
二二六	県庁奏任以上氏名上申ノ令ヲ達ス	十月	二三五
二二七	県庁民事局ノ転局ヲ達ス	十月十七日	二三五
二二八	県庁鹿兒島神社神幸道筋指定ノコトヲ達ス	十月	二三五
二二九	詔シテ華族ノ奮励勉学スヘキヲ諭サル	十月	二三六
二三〇	県庁奈良原繁・伊地知貞馨ニ伝事出仕ヲ命スルコトヲ達ス	十月二十二日	二三七
二三一	県庁時鐘ヲ定メ正午鐘ヲ報スルヲ達ス	十月二十二日	二三七
二三二	県庁重出米納付ヲ免除スルコトヲ達ス	十月二十二日	二三八
二三三	県庁糺明局ノ転局ヲ達ス	十月二十五日	二三八
二三四	県庁皇軍神社祭事執行ニ付通行止ヲ達ス	十月二十五日	二三八
二三五	県庁救助米給与ノ手続ヲ達ス	十月二十五日	二三九
二三六	県庁蔵版方ヲ本学校ニ管轄スルコトヲ達ス	十月	二四〇
二三七	県庁外城方転局ノコトヲ達ス	十月	二四〇
二三八	県庁各官衙番所挑灯菊章ニ改ムヘキヲ達ス	十月	二四〇
二二九	県庁尾畔山江立入ルコトヲ禁ス	十月	二四一

二三〇	道島日記……………	二四一
二三一	寺師宗道日記……………	二四一
二三二	姫路県管下平民動搖ニ付届書 十月……………	二四三
二三三	新聞雜抄……………	二四五
二三四	天野御民ノ学問議略……………	二六〇
二三五	女子学校興設ナト云々……………	二六二
二三六	勅諭ニ対スル某意見書……………	二六二
二三七	明治四年辛未十月雜誌……………	二六三
二三八	勅諭ニ基キ女子留學生ヲ派遣ス……………	二六五
二三九	勅書ニ対シ某建白書 十月……………	二六六
二四〇	県庁旧藩内農商ノ佩刀及給俸免役ノ類ヲ停ム 十一月三日……………	二六八
二四一	県庁刑死人屍体下付ノ令ヲ達ス 十一月五日……………	二六八
二四二	県庁六十六部ヲ禁ス 十一月五日……………	二六九
二四三	県庁城内取締向ノ心得ヲ達ス 十一月五日……………	二六九
二四四	県庁各郷校設置管轄ヲ達ス 十一月七日……………	二六九
二四五	県庁会計局ノ転局ヲ達ス 十一月七日……………	二七〇
二四六	県庁諸役所貸付金上納ノコトヲ達ス 十一月八日……………	二七〇
二四七	県庁旧藩士民情義報恩ノ為年初祝儀ヲ表スヘキコトヲ達ス 十一月……………	二七〇

目 次

二四八	県庁商漁船飯料米外積込ノ制限ヲ解キ拾石内積込ヲ許ス	十一月十三日	二七一
二四九	県庁始羅郡名ヲ始良ニ改称スルヲ達ス	十一月十四日	二七一
二五〇	県庁銃砲片付用トシテ諸局ヘ反古紙差出方ヲ達ス	十一月十四日	二七二
二五一	県庁権大参事橋口彦次ノ辞任ヲ達ス	十一月十四日	二七二
二五二	西海道ノ諸県ヲ廢シ十一県ヲ置カル	.....	二七二
二五三	島津忠義悠紀・主基兩國献物ヲ拜受ス	十一月	二七三
二五四	県庁紡績所ノ方法ヲ商社ニ改メ其取扱方ヲ達ス	十一月二十二日	二七三
二五五	旧藩内上下士民総代ヲ町田・山内ニ命ス	十一月二十二日	二七四
二五六	県庁諸郷自作高四町以上沽却ヲ了ヘサル分ハ旧所有ヲ許スコトヲ訓示ス	十一月	二七五
二五七	県庁和蘭人シケープル雇入ニ付県内ニ注意ヲ訓達ス	十一月二十五日	二七五
二五八	島津忠義奉勅ノ賀詞ヲ申フルコトヲ達ス	十一月二十八日	二七六
二五九	県庁本学校調役助ノ役職ヲ置キ其職級ヲ達ス	十一月二十九日	二七六
二六〇	県庁製茶販売方法ヲ改メ其手續ヲ達ス	十一月二十九日	二七六
二六一	県庁伊地知正治ノ任官ヲ達ス	十一月	二七七
二六二	県庁鹿兒島・枚聞両神社祭式参向ヲ達ス	十一月	二七八
二六三	県庁吉野地方郷校校舍建設ノコトヲ達ス	十一月	二七八
二六四	県庁管内拔荷取締ノ緩慢ヲ申戒注意ス	十一月	二七九
二六五	外国商民ヨリ私ニ器械買入・金銀借用等ノ嚴禁ヲ達ス	.....	二七九

二六六	當時米相場	十一月	二七九
二六七	道島日記	十一月五日	二八〇
二六八	寺師宗道日記	十二月十二日	二八〇
二六九	舊邦秘録		二八一
二七〇	県庁分県配置ノ郡名高頭ノ令ヲ達ス	十二月	二九〇
二七一	県庁大山綱良県参事叙任ノ命ヲ達ス	十二月二日	二九二
二七二	華族以下ノ家禄四時ニ分給ス	十二月四日	二九二
二七三	島津忠義国事諮詢ノ辞免ヲ許サレサル旨ヲ伝フ	十二月七日	二九二
二七四	県庁官民開墾事業ヲ勸ム	十二月十二日	二九三
二七五	県庁鎮台分営設置・城下兵解隊台場兵及諸郷兵県庁管轄ヲ達ス	十二月二十七日	二九三
二七六	県庁庁吏三等以下諸官役目申供スヘキコトヲ達ス	十二月	二九五
二七七	県庁蚕織方廃止ノコトヲ達ス	十二月二十二日	二九五
二七八	県庁養蚕販売ノ制限ヲ解キ其取扱手続ヲ達ス	十二月二十八日	二九五
二七九	県庁蚕業勸励教示巡回ニ及フヘキヲ達ス	十二月	二九六
二八〇	県庁年初賀詞ノ順序ヲ達ス	十二月	二九七
二八一	県庁米良邑民旧領主追恩問音ノタメ須木山路通行ノ特許ヲ達ス	十二月晦日	二九七
二八二	舊邦秘録		二九八
二八三	県庁上・下荘内ヲ都城・荘内ト改称スルコトヲ達ス	十二月	二九八

二八四	寺師宗道日記	十二月三十日	.....	二九八
二八五	西郷隆盛ヨリ椎原國幹へ書翰	十二月十一日	.....	二九九
二八六	舊邦秘録	.....	.....	三〇〇

明治五年(壬申)

二八七	年頭儀式之次第並朝廷へ対シ拝賀奉呈ノ次第	.....	.....	三〇四
二八八	岩倉具視全權大使ノ一行米國塩湖府ニ新年ヲ迎フ	.....	.....	三〇六
二八九	朝廷ニ於テハ始テ元始祭ヲ行フ	正月三日	.....	三〇六
二九〇	県庁島津圖書久治死亡ニ付其家令ニ弔詞ヲナスヘキヲ令ス	正月五日	.....	三〇八
二九一	町田久成ニ澳地利國博覽會御用掛ヲ命ス	正月五日	.....	三一〇
二九二	県庁福山清藏美々津県参事奉命ヲ令ス	正月八日	.....	三一〇
二九三	島津久光ノ位階拝受方猶予ヲ出願シ聽許セラル	正月十日	.....	三一一
二九四	三島通庸ヲ従六位ニ叙ス	正月十三日	.....	三一一
二九五	県庁県下檢地ニ付キ達ス	正月十四日	.....	三一二
二九六	田畑常秋ヲ以テ鹿兒島県典事ト為ス	正月十五日	.....	三一二
二九七	中議官西岡逾明・少議官小室信夫等ヲ派遣シ海外各國ヲ巡視セシム	正月二十日	.....	三一二
二九八	旧藩々辛未年貢米上納方ヲ申ネテ令ス	正月二十日	.....	三一三
二九九	岩倉全權大使ノ一行米國大統領ニ謁見ス	正月二十五日	.....	三一三

三〇〇	岩倉全權大使ノ一行米國議事院ニ抵ル	正月二十七日	三二五
三〇一	朝廷御諱名欠画ノ制ヲ廢ス	正月二十七日	三二七
三〇二	貴島國彦ニ東北鎮台大式ノ心得ニテ勤務スヘキヲ命ス	正月二十八日	三二七
三〇三	千田貞曉ヲ以テ東京府典事ト為ス	正月二十八日	三二七
三〇四	中井弘ヲ以テ中議生ト為ス	正月二十八日	三二八
三〇五	県庁鎮台分営ヨリ交付ノ管内出入概則ヲ令ス	正月	三二八
三〇六	朝廷旧藩藏屋敷及出張所ノ京坂ニ在ル者ヲ収ム	正月二十九日	三二八
三〇七	五節・大長節ヲ除クノ外朝賀ヲ廢ス	正月二十九日	三二九
三〇八	卒ノ世襲スル者ヲ以テ士族ト為ス	正月二十九日	三二九
三〇九	吉原重俊ヲ以テ三等書記官ト為ス	正月	三二〇
三一〇	軍務局ヲ廢シ兵學寮ヲ県庁内ニ置ク	正月	三二〇
三一〇	県庁豊民館ヲ豊民会社ト改称ス	正月	三二〇
三一一	県庁皇軍神社ノ神事済了マテ軍馬方下通ノ通行ヲ停止セシム	正月	三二〇
三一二	伊東祐磨ヲ以テ海軍大佐ト為ス	二月三日	三二一
三一三	鎮台分営調練ノ時通行ヲ許サ、ル旨ヲ令スルコトヲ県庁ニ申入ル	二月八日	三二一
三一四	伊地知正治ヲ以テ大議官ト為ス	二月八日	三二一
三一五	旧藩ノ禄券ヲ売買スルヲ申禁ス	二月十日	三二二
三二七	大蔵少輔吉田清成ヲ以テ理事官ト為シ米國ニ差遣ス	二月十二日	三二二

三三八	上野景範大藏少輔事務取扱ヲ命セラル	二月十二日	三三三
三三九	郷士ノ門望アル者ヲ撰ヒ士籍ニ編入セシム	二月十四日	三三四
三三〇	旧藩疆界ノ遷所ヲ撤ス	二月十四日	三三四
三三一	旧藩士族・卒ノ致仕者及子孫ノ廩俸ヲ停ム	二月十四日	三三四
三三二	華族旅行並請暇ノ節取計心得方ヲ令ス	二月十四日	三三五
三三三	士族・卒ノ犯罪者ハ之ヲ庶人ト為ス	二月二十四日	三三五
三三四	県庁移転・四課設置ノコトヲ令ス	二月二十七日	三三五
三三五	兵部省ヲ廢シ陸・海軍二省ヲ置キ河村純義ヲ海軍少輔ト為ス	二月二十七日	三三六
三三六	陸・海軍二省新設ニ付大山巖ニ沙汰アル迄従前ノ事務ヲ取扱ハシム	二月二十七日	三三七
三三七	西郷従道ヲ以テ陸軍少輔ト為ス	二月二十七日	三三七
三三八	陸・海軍二省新設ニ付仁禮景範ニ沙汰アル迄従前ノ事務ヲ取扱ハシム	二月二十七日	三三八
三三九	東京横濱間ノ鉄道成リ鉄道略則ヲ頒ツ	二月二十八日	三三八
三三〇	種田政明ヲ以テ陸軍少丞ト為ス	二月三十日	三三二
三三一	本営表・西兩門ノ通行並開閉規程ヲ定ム	二月	三三二
三三二	県庁常備・予備兵隊解隊等ノ達ヲ伝達ス	二月	三三二
三三三	旧兵部省庁ヲ陸軍省築地海軍所ヲ海軍省ト為ス	三月二日	三三四
三三四	大迫貞清ニ城取調トシテ出張ヲ命ス	三月四日	三三四
三三五	種子島時彦ノ開拓使五等出仕ヲ解ク	三月四日	三三五

三三六	調所廣文ヲ以テ開拓使七等出仕ト為ス	三月五日	.....	三三五
三三七	集成館ヲ大砲製造所火藥製造所ヲ火巧所ト改称シ造兵司管轄トス	三月八日	.....	三三六
三三八	田原陶猗ヲ以テ海軍省七等出仕ト為ス	三月八日	.....	三三七
三三九	仁禮景範ヲ以テ海軍省六等出仕ト為ス	三月八日	.....	三三七
三四〇	近衛兵ヲ置キ西郷從道ヲ陸軍少將近衛副都督トナシ陸軍少輔ヲ兼ネシム	三月九日	.....	三三七
三四一	林清康ニ大坂鎮台第二分營大式ノ心得ヲ命ス	三月九日	.....	三三八
三四二	樺山資紀ニ大式心得ヲ以テ鎮西鎮台第二分營へ出張ヲ命セララル	三月九日	.....	三三八
三四三	旧紙幣ヲ東京八代洲河岸旧紙幣寮跡ニ於テ燬焼ス	三月十日	.....	三三九
三四四	大蔵・陸軍省ノ官吏ニ城郭及ヒ官民貯蔵ノ古器・古書・兵器ヲ検査セシム	三月十八日	.....	三三九
三四五	中井弘ヲ以テ大議生ト為ス	三月十九日	.....	三三九
三四六	出寝・退午・入寝ノ三次ニ發砲スルコトヲ一般ニ伝達ス	三月二十二日	.....	三四〇
三四七	島津久光忠欽ヲシテ参朝セシメ父ニ代テ分家賜祿ノ恩ヲ拝謝セシム	三月	.....	三四〇
三四八	本田親雄ヲ以テ少議生ト為ス	三月二十三日	.....	三四〇
三四九	大久保利通米國ヨリ帰朝ス	三月二十四日	.....	三四一
三五〇	八田知紀へ俸祿引取ノ上期限中家族養俸米下方ヲ令ス	三月二十七日	.....	三四二
三五一	藩債証書中偽造詐欺アルヲ以テ之ヲ嚴飭ス	三月二十八日	.....	三四三
三五二	東京城ヲ皇居ト為シ官庁ヲ城東ニ設置ス	三月二十九日	.....	三四三
三五三	華・土族・卒在官ノ外農工商ノ職業ヲ許ス	三月	.....	三四三



三五四	陸軍大尉海老原穆ヲ以テ大録ヲ兼ネシム	三月	三四四
三五五	開拓使御用人夫募集ニ付一般ニ之ヲ命ス	三月	三四四
三五六	桐野利秋ニ鎮西鎮台出張ヲ命ス	三月	三四五
三五七	海軍少輔川村純義ニ艦隊諸港廻艦乗組ヲ命シタルモ十五日コレヲ解ク	四月二日	三四六
三五八	大御支配検地ニヨリ其高ノ計算法ハ单位ヲ合限ニ止ム	四月四日	三四六
三五九	諸借地ニ関シ本県一般ノ規程ヲ定ム	四月五日	三四七
三六〇	本県令シテ県内他郷ト雖モ掛持地四町以内ハ所有ヲ免ス	四月五日	三四七
三六一	橋口兼三ヲ以テ司法権少判事ト為ス	四月七日	三四七
三六二	自今願書等ハ毎月三・八ノ日ヲ期シテ当該所ニ提出スルコトヲ命ス	四月八日	三四八
三六三	外務大輔寺島宗則ニ条約改正ノ事ヲ掌ラシメ大弁務使トシテ英国在留ヲ命ス	四月	三四八
三六四	大蔵省三等出仕上野景範ニ条約改正ノ事ヲ掌ラシム	四月十二日	三四九
三六五	本県令シテ家来・下人ノ称ヲ廃止シ尔後従者トシテ稟申セシム	四月九日	三四九
三六六	博覽会事務局ニ命シ華族貯蔵ノ大器ヲ檢覈セシム	四月九日	三五〇
三六七	華・士族ノ子弟及厄介ヲ民籍ニ編入スルコトヲ許ス	四月九日	三五〇
三六八	莊屋・名主・年寄等ノ称ヲ廃シ戸長・副戸長ヲ置ク	四月九日	三五〇
三六九	少議生本田親雄ヲ以テ置賜県參事ト為ス	四月九日	三五一
三七〇	置賜県參事高崎友愛ヲ罷メ中議官ニ転シ教部省御用掛兼勤ヲ命セラレ	四月九日	三五一
三七一	滿二年勤続ノ者免職ノ節ノ賜方ヲ付令ス	四月十二日	三五二

三七二	旧藩士ノ緑外周給ヲ停ム	四月十二日	.....	三五二
三七三	伊藤祐磨ヲ正六位中并弘ヲ從六位樺山資紀及大迫貞清ヲ正七位ニ叙ス	四月十五日	.....	三五二
三七四	高木兼寛ヲ以テ九等出仕ト為ス	四月十五日	.....	三五三
三七五	八田知紀ヲ宮内省八等出仕ト為シ御歌懸ヲ命セラル	四月十七日	.....	三五四
三七六	製鉄助中村博愛ヲ以テ製鉄権頭ト為ス	四月十七日	.....	三五四
三七七	少弁務使森有禮ヲ以テ中弁務使ト為ス	四月十八日	.....	三五四
三七八	旧藩債ヲ大蔵省ニテ引受クルコトヲ達ス	四月十八日	.....	三五五
三七九	城郭及ヒ官民貯蔵ノ古器・古書・兵器ノ檢覈ノ令ヲ本県一般ニ伝達ス	四月二十三日	.....	三五五
三八〇	自今華族元服願ニ及ハサルヲ達ス	四月二十八日	.....	三五六
三八一	華族ノ申稟等悉ク其管轄庁ニ致サシム	四月二十九日	.....	三五六
三八二	諸郷並近在町等ヨリ召仕ノ者ノ俗生及親兄弟等ノ姓名ヲ肩書シテ進致セシム	四月	.....	三五六
三八三	大議官伊地知正治ヲ以テ副議長ト為ス	四月	.....	三五六
三八四	侍從高島鞆之助ヲ以テ侍從番長ト為ス	四月三十日	.....	三五七
三八五	諸郷士族ヲ鹿兒島県士族ト改称ス	四月	.....	三五七
三八六	運上所ヲ置キ大小船共嚴重ニ査覈セシム	四月	.....	三五七
三八七	本県一般ニ令シテ人員・戸数取調帳ヲ作成進致セシム	.....	.....	三五八
三八八	朝令ニ依リ新ニ戸長ヲ置キ転住生死出入等ヲ録上セシム	四月	.....	三五八
三八九	附屬長・足輕・船方附ヲ卒ト称シ附屬者ヲ平民籍ニ編入セシム	.....	.....	三五九

目 次

三九〇	県下六組ノ称ヲ廃シ県庁初官舎・私宅ノ別ナク標札ヲ掲ケシム	四月	三五九
三九一	戊辰之役戦死者ノ招魂塚ヲ大門口ヘ移転シ石塔ヲ建立シタルコトヲ一般ニ令ス	四月	三六一
三九二	自今旅行者ヘハ県印下附方ヲ稟申セシム	四月	三六二
三九三	少弁務使鮫島尚信ヲ中弁務使ト為シ佛国ニ駐劄セシム	五月	三六三
三九四	仮ニ品川横濱間ノ汽車ヲ開ク	五月七日	三六四
三九五	凡ソ人名其数称アル者一二従ハシム	五月七日	三六四
三九六	非役華族ノ毎月一・六ノ日天機伺ヲ止ム	五月十日	三六四
三九七	寧姫郭内ヲ去リ居ヲ磯邸ニ移サル	五月十一日	三六四
三九八	海軍大佐伊東祐磨ヲ中艦隊指揮官ト為シ西国巡幸供奉航海ヲ命セラル	五月	三六六
三九九	文部大丞町田久成ヘ社寺宝物検査トシテ出張ヲ命セラル	五月十五日	三六六
四〇〇	樺山資紀ヲ正七位ニ叙ス	五月十五日	三六六
四〇一	調所廣丈ヘ開拓使七等出仕ヲ以テ御雇教師取扱ヲ命セラル	五月十七日	三六七
四〇二	重野安繹ヲ以テ左院中議生ト為シ編纂掛ヲ命セラル	五月十七日	三六七
四〇三	特命全權副使大久保・伊藤再ヒ米國ヘ発航英國大弁務使寺島宗則モ共ニ発ス	五月	三六八
四〇四	得能通生ノ出納頭ヲ罷ム	五月二十二日	三七〇
四〇五	安藤則命ヲ以テ邏卒総長ト為ス	五月	三七〇
四〇六	東京府典事川路利良ヲ以テ邏卒総長ト為ス	五月二十四日	三七一
四〇七	伊地知正治ノ教部省御用掛ヲ解ク	五月二十四日	三七一

四〇八	東京府参事黒田清綱ヲ以テ教部少輔ト為ス	五月二十四日	三七一
四〇九	中議官高崎五六ノ教部省御用掛兼勤ヲ解ク	五月二十四日	三七二
四一〇	東京府権参事三島通庸ヲ以テ同府参事ニ任ス	五月二十五日	三七二
四一一	家督相続人等死亡ノ時ハ持高員数並勤務ノ有無等ヲ查覈稟申セシム	五月	三七二
四一二	千田貞曉ヲ以テ教部省七等出仕ト為ス	六月二日	三七四
四一三	平山季雄ヲ以テ美々津県七等出仕ト為ス	六月七日	三七四
四一四	旧藩札価格比較表ヲ頒布セラル	六月九日	三七四
四一五	大蔵省令シテ当七月渡賞典米ハ旧県所轄ノ新庁ヨリ交付セシム	六月十日	三七七
四一六	司法卿江藤新平欧米各国差遣ニ付岸良兼養ニ其隨行ヲ命セラル	六月十三日	三七七
四一七	黒田清綱ヲ正五位ニ叙ス	六月十五日	三七七
四一八	高崎五六ヲ從五位ニ叙ス	六月十五日	三七八
四一九	中村博愛・三島通庸兩名ヲ正六位ニ叙ス	六月十五日	三七八
四二〇	橋口兼三・川路利良・安藤則命三名ヲ正七位ニ叙ス	六月	三七九
四二一	重野安繹ヲ正七位ニ叙ス	六月十七日	三八〇
四二二	大久保利通・伊藤博文再ヒ華盛頓府ニ抵ル	六月十七日	三八〇
四二三	大蔵省各府県ニ令シテ旧藩札各種一ト通ヲ至急進致セシム	六月十七日	三八二
四二四	坂元純熙ヲ正七位ニ叙ス	六月十七日	三八二
四二五	大蔵省外国又ハ内国学校ニ入校ノ官費生生徒人員並其学費ヲ録上セシム	六月二十二日	三八二

四二六	九州巡幸中ノ諸史料載録……………	三八三
四二七	朝廷華・士族・平民ノ身代限規則ヲ定ム 六月二十三日 ……	四〇六
四二八	旧藩紙幣製造機械等ノ焼捨ヲ令ス 六月二十三日 ……	四〇八
四二九	旧藩紙幣ノ内物産方或ハ管内へ貸付分ヲ上納セシム 六月二十五日 ……	四〇九
四三〇	始羅・菱刈・桑原及ヒ諸縣郡ノ中ニ於ケル管轄移管方ヲ稟申ス 六月 ……	四一〇
四三一	椎原國幹ヲ鹿兒島県権参事ニ上村行徴ヲ都城県権参事ト為ス 六月 ……	四一一
四三二	寺島宗則龍動ニ抵リ女王ニ謁見ス 七月九日 ……	四一三
四三三	参議西郷隆盛ヲ以テ陸軍元帥・近衛都督ヲ兼ネシム 七月十九日 ……	四一三
四三四	吉原重俊ニ使節随行ノ心得ヲ以テ外政事務取調ヲ命ス 七月十九日 ……	四一四
四三五	藩札ヲ買集メルコトヲ嚴禁ス 七月二十三日 ……	四一五
四三六	伊東祐磨ノ龍驤艦艦長ヲ解ク 七月二十四日 ……	四一五
四三七	野崎貞澄ヲ以テ陸軍中佐ト為ス 七月二十七日 ……	四一六
四三八	鮫島尚信ノ英国弁務使兼勤ヲ解ク 七月二十七日 ……	四一六
四三九	井上良馨ニ龍驤艦副長ヲ命セラル 七月 ……	四一六
四四〇	家村住義ニ開拓使九等出仕・北海道詰電線建設掛ヲ命セラル 七月 ……	四一七
四四一	海軍大佐伊東祐磨ヲ同少将ト為シ從五位ニ叙ス 八月二日 ……	四一七
四四二	海軍大尉伊東祐亨ヲ同少佐ト為ス 八月二日 ……	四一八
四四三	学制ヲ頒布シ全国ヲ八大学区ニ分ツ 八月二日 ……	四一八

四四四	陸軍大尉黒木為楨ヲ同少佐ト為ス	八月二日	……	四二一
四四五	司法大丞樺山資綱ニ司法大検事ヲ兼シム	八月五日	……	四二一
四四六	司法権中判事岸良兼養ヲ司法少丞ト為シ併セテ司法権大検事ヲ兼シム	八月五日	……	四二二
四四七	司法権少判事橋口兼三ヲ以テ司法権中検事ト為ス	八月五日	……	四二二
四四八	池上四郎外二人ヲ清国牛莊ヘ差遣サル	八月八日	……	四二三
四四九	西郷従道ノ近衛副都督ヲ解ク	八月九日	……	四二六
四五〇	陸軍少佐野津道貫ヲ以テ同中佐ト為シ従六位ニ叙ス	八月九日	……	四二六
四五一	陸軍中佐野崎貞澄ヲ東京鎮台大弐ノ心得ヲ以テ勤仕セシム	八月十三日	……	四二六
四五二	旧薩藩士ヘノ戦功賞典方法ニ付椎原國幹ヨリノ稟申及ヒ大蔵省ノ指令	八月	……	四二七
四五三	伊集院兼寛ノ請ニヨリ検査権頭ヲ解キ東京滞在ヲ命ス	八月	……	四二八
四五四	伊地知貞馨ヲ以テ外務省七等出仕ト為ス	八月二十二日	……	四二九
四五五	私ニ姓名及鋪号ヲ改ムルヲ禁ス	八月二十四日	……	四二九
四五六	得能良介ヲ以テ司法省五等出仕ト為ス	八月二十四日	……	四二九
四五七	折田平内ヲ以テ開拓大主典ト為ス	八月二十五日	……	四三〇
四五八	湯地定基ヲ以テ大主典ト為ス	八月二十五日	……	四三〇
四五九	石川県参事内田政風ヲ同臬権令ト為ス	八月二十七日	……	四三一
四六〇	外務大丞花房義質ヲ朝鮮国ヘ差遣ニ付別府景長ニ其同行ヲ命ス	八月二十七日	……	四三一
四六一	邏卒総長安藤則命及ヒ坂本純熙ヲ警保助ト為ス	八月二十七日	……	四三四

四六二	邏卒總長國分友諒ヲ以テ大警視ト為ス	八月二十七日	四三五
四六三	邏卒總長川路利良ヲ警保助兼大警視トス	八月二十七日	四三五
四六四	海老原穆ヲ以テ愛知県七等出仕ト為ス	八月二十七日	四三五
四六五	陸軍大尉永山盛行ニ裁判大主理ヲ兼シム	八月二十八日	四三六
四六六	陸軍中佐林清康ニ帰京ヲ命セラル	八月晦日	四三六
四六七	大警視國分友諒ニ司法權中檢事ヲ兼シム	八月晦日	四三六
四六八	朝廷御用船第二丁卯艦鹿兒島港ヲ測量スルニ付県ヨリ布告	八月	四三六
四六九	都城・美々津両県へ所持ノ高査覈等ヲ県ヨリ一般ニ令ス	八月	四三七
四七〇	都城県内へ持高所有者ノ調査并新紙幣發行方ヲ県一般ニ傳達ス	八月	四三八
四七一	県一般ニ令シテ給地高等ニ関シ査覈稟申セシム	八月	四三九
四七二	篠原國幹及野津鎮雄ヲ陸軍少將ト為ス	九月二日	四四一
四七三	堀基ヲ以テ開拓少判官ト為ス	九月二日	四四二
四七四	永山盛行ニ開拓使八等出仕函館病院監督等ヲ命ス	九月二日	四四二
四七五	上野景範ヲ以テ外務省三等出仕ト為ス	九月四日	四四二
四七六	陸軍中佐林清康ヲ海軍中佐ト為ス	九月五日	四四三
四七七	家政改革ニ因リ膳所頭以下ノ任免及ヒ慰勞金給与方ヲ達ス	九月	四四三
四七八	江藤新平歐洲各国差遣ニ付川路利良ニ其ノ隨行ヲ命ス	九月八日	四四五
四七九	警保助安藤則命ヲ司法中檢事ト為シ同坂本純熙ニ大警視ヲ兼ネサシム	九月十日	四四五

目次

四八〇	車駕停車場ニ臨御シ鉄道開業式ヲ行フ	九月十二日	四五五
四八一	宮内省八等出仕八田知紀ヲ以テ同七等出仕ニ補ス	十月	四六五
四八二	琉球国朝賀ノ礼ヲ修メ国王尚泰ヲ琉球藩王ニ封シ華族ニ列ス	九月十四日	四六五
四八三	長崎県権参事森岡昌純ヲ以テ飾磨県参事ト為ス	九月十五日	四七七
四八四	賞典米ハ華族・士族・平民共旧府県地ニ於テ交付セシム	九月十九日	四七八
四八五	川崎祐名ヲ以テ諸鎮台掛ト為ス	九月二十七日	四七八
四八六	島津久光疾ニヨリ家扶法凡昌祥ヲ以テ上京ノ期猶予ヲ請ヒ聽許セラル	九月	四七九
四八七	郡長・里正等改称シ俸禄ハ旧ニ依ラシム	九月	四八〇
四八八	本県糧餉方ヲ諸財蔵ト改称ス	九月	四八〇
四八九	戊辰以来重創ノ者大蔵省へ廢人届ヲナシタル以外ハ取扱ハサルコトヲ令ス	九月	四八一
四九〇	本県給地高ヲ査覈セシメ私有ノ土地・家屋ノ売買及ヒ讓渡ノ自由ヲ許ス	九月	四八一
四九一	出水野間原及辺路番所ヲ撤去シ番人ヲ解ク	九月	四八二

## 補遺

忠義公日記	.....	四八三
忠義公手記覚	.....	五七九
忠義公年譜・年表	.....	六五一
市來四郎自叙伝	.....	九〇一



明治4年(1871)

〔表紙〕

忠義公史料

明治四年二月

一 島津忠義祇園洲砲台射撃ヲ臨檢ス

明治四年二月二日、忠義公祇園洲砲台射撃ヲ臨檢セララル、

(記)

舶来元込砲ノ試撃ヲ驗セリ、

二 西郷・大久保ノ一列着京ス

明治四年二月二日、西郷・大久保ノ一列着京セリ、

(記)

四年二月一日、横濱ニ着船、今二日馬車ニ駕シ、横濱ヲ發シ京ニ向ヒ、途ニ三條公邸ヲ訪ヒテ、復申ヲナシ帰宿セリ、

(按) 三年十二月十五日、岩倉勅使ニ随伴シ、鹿兒島ニ至リ勅意ヲ伝ヘ、当務ヲ論シ、遂ニ久光公父子ノ允諾ヲ得テ、西郷ト詢リ、本年一月三日、相携ヘテ勅使ニ随伴シテ山口ニ入り、木戸其他藩吏ト議リ、藩知事ノ同意ヲ収メ、俱ニ連レテ高知ニ入り、板垣其他藩吏ト議リ、又藩知事ノ允諾ヲ得テ、茲ニ薩・長・土三藩ノ連合ヲ約シ、将来ノ国政変革ノ基ヲ立ツルニ至レリ、

【参照】

大久保利通日記

二月

朔日

一 今朝五字頃横濱へ着船、同所肥前屋某亭へ泊ス、外国店見物ス、

二日

一 今朝大参事櫻田某へ参ル、八字馬車ニテ發途、信吾子（屋敷通他姓）及二子等同行、大平所へ二字頃至ル、岩下子・吉井子、村田・伊集院両士外別府氏等入来、四字頃辞、帰懸條

公へ参殿、御届申上候、今夕石原・松方・川南等入来、

三日

一今朝黒田子・佐々木子入来、吉井子入来、

四日

一吉井子・西郷子入来、其外段々有之、

五日

一今朝所劣不参、昼后岩倉卿御来駕、

六日

一同断不参、小西郷入来、岩下子入来、

七日

一不参、

### 三 前年出学ノ学生ヲ召還ス

明治四年二月二日、前年出学ノ学生ヲ召還セリ、

(記)

三年以降、藩費ヲ以テ漸次東京へ出学ノ諸生、数十名ニ及ビタリシカ、往々放慢ニ流レ、淫蕩横議恣行制度ナシ、且前年九月、南校教師英国人ヲ刺傷セシ者アリ、未タ其人ヲ得ス、政府ハ厳ニ諸生ノ取締ヲ厳ニシテ、

将来ヲ規スルニ至レリ、玆ニ於テ一時之ヲ藩ニ下セシナリ、

【参照一】

寺師宗道日記四年二月

同四日 朝雨后晴風

出席頼、谷山脇田森山二男冷水熊次郎と云者来ル、此内草道一郎右衛門發明ノ小弾丸製作之事、実は此者工夫之由ニテ、桂四郎殿家来ニテ、主人より手紙持参ニテ、形行売上之儀承ル、又四時比見本持参ス、至極甲置故也、一昨二日東京江出候初生、惣て引取相成り、追々下着相成候由、市來四郎ニは於東京洋行被仰付候由、伝言有之候、

【参照二】

道島正亮日記四年二月五日

(前文省略)

但新左衛門ニハ正月廿三日江戸出立、横濱へ一夜滞

舟、廿五日ニ大坂へ着、岩倉公モ西郷モ同日ニ大

坂出帆ノ由、川村與十郎モ同日兵庫へ着ニテ逢候

ヨシ、諸生共ニモ新左衛門三拾人計(連立つての姿)テナシ着イタ

シ候由、今組本ノマ、耆人前六百両計ツ、ノ他借ニテ候ヨ

シ、川村杯カ上ヲ謀リ、市中杯ヨリ過分借入候ヨ

シ、御物ヨリ段々引結被致候得共、イマタ過分ニ相滞候ヨシ、諸生モ今少シハ残り居候ヨシ、加治木ノ兵庫殿杯ハ、殊之外諸生共へ取替、漸ク西京迄被參候ヨシ、散々ナル評判ニテ候、

四 岩倉勅使鹿兒島・山口二藩使命ヲ復申ス

明治四年二月六日、岩倉勅使鹿兒島・山口二藩使命ヲ復申セラル、

(記)

岩倉勅使薩・長二藩ニ抵ルヤ、島津久光・毛利敬親両公皆朝旨ヲ奉ス、会マ久光公病アリ、上京スルヲ得ス、大參事西郷吉之助ヲシテ代リテ東上セシム、西郷等山口・高知ノ兩藩ニ説キ、乗船東上セリ、勅使ハ山口ヨリ分レテ乗船、神戸ヲ經テ数日遅レニ、五日陸路帰東セラル、此日参内復命アリタリ、

【参照一】

岩倉公ヨリ書牘参照ニ資ス、

(按) 岩倉公ト前後帰京ノ約アリシナラン、然ルニ大久保ノ一行ハ、朔日ニ着港アリシニ、公ハ沿途日ヲ費シ、

五日ニ着京アリシナリ、本書ハ三島駅ヨリ遲着ヲ謝セラレタルモノナラン、

封状

大久保參議殿

具視

平安

弥御安全珍重存候、本月朔日ニハ御一同横濱御着港之事と令賀候、天氣ハ快晴ニテ候得共、晦日午後随分風立候様相覺エ、如何と御察シ申居候事ニ候、扱小生帰京只様延引何共意外之次第、今更御断申様も無之、恐怖此事ニ存候、條公より御咄しも可有之候得共、万々帰京面上御断可申入候、夫迄之所西郷氏始江能々御伝へ置可給候、何分兵隊隨行足附人足等ニテ存外之事共ニ隙取、実ニ不得止義ニ候、休日ニハ候得共将六日十字比帰京と存候間、先直ニ復命於

禁中條公・兩大納言面会、一通り可申承存候、附てハ足下ニも早速御面会申度、六日夕方か七日朝か、乍御苦勞來臨被下度、尚帰宅即時御様子可伺候得とも、御心得迄一筆申入度候、早々以上、

二月三日

三嶋駅ニテ  
具視

大久保殿

尚々延着之事ハ、吳々心外至極之事にて、実に無申  
訳事ニ候、以上、

【参照二】

大久保利通日記四年二月

八日

一今日四字ヨリ條公亭江、木戸・杉・板垣・西郷參殿、  
尚亦條公ヨリ見込御聞取相成候、

岩公モ御出、

九日

一不參、西郷昨夜ヨリ逗留、今朝山縣・小西郷入来、池  
ノ上子・吉井子・木場子等入来、

十日

一今朝岩公へ參殿云々ノコト言上、九字參朝、三藩申立  
ノコト御評議有之、尚見込申上候、條公御下坂相決  
ス、

五 諸技芸師家ノ私塾ヲ開クニハ、地方官ノ

准許ヲ要ス

明治四年二月八日、技芸師家塾ヲ開カントセハ、地方官

ノ准許ヲ受ケシメラル、

一諸技芸師家私塾相開候者、其地方官之許可可受旨、御  
布令有之候付ては、各藩士族等にて、從來当府下江私  
塾相開居候者と雖とも、今更ニ当府江願書差出候様、  
夫々江御達有之度、此段申入候也、

辛未二月八日

太政官

二伸、右願書之儀は、当府戸籍調処江直ニ御差出可  
有之者也、

六 勅シテ島津久光・忠義ノ藩政改革、兵賦整  
頓ノ功蹟ヲ賞ス

明治四年二月、勅シテ久光公・忠義公ノ藩政改革、兵賦  
整頓ノ功蹟ヲ賞セラル、

別紙二通入

(記)

勅使復命・藩政ノ革新・兵制ノ周備ヲ賞セラレ、勅ヲ  
西郷ニ伝ヘテ藩地ヘ達セラレタルナリ、

(按) 記日ナシ、勅使復命ノ日即チ二月六日ナラン、

(島津忠義)  
鹿兒島藩知事

朝旨ヲ遵奉シ、藩政改革行届、殊ニ練兵其任ヲ尽候段、

大納言岩倉具視ヨリ及

奏聞、

御満足被為

思召候旨

御沙汰候事、

二月

島津(久光)從三位

朝旨ヲ遵奉シ、藩政改革行届、殊ニ練兵其任ヲ尽シ候  
段、大納言岩倉具視復命被

聞食候、且從來知事ヲ輔翼贊成之功亦不少、

御満足被為

思食候旨

御沙汰候事、

二月

七 藩庁教授ノ職級ヲ定メタルコトヲ達ス

明治四年二月十三日、藩庁教授ノ職級ヲ定メタルコトヲ

達セリ、

一四等教授

但十一等官

右之通被召建候条本学校へ申渡、向々へモ可申渡候、

辛未二月十三日

知政所

八 鹿兒島・山口・高知三藩ノ兵ヲ徴シテ親兵

トナシ、兵部省ニ隸セシム

明治四年二月十三日、鹿兒島・山口・高知三藩ノ兵ヲ徴  
シテ親兵ト為シ、之ヲ兵部省ニ隸セラル、

別紙入ル

(記)

鹿兒島藩歩兵四大隊・砲兵四隊、山口藩歩兵三大隊、

高知藩歩兵二大隊・騎兵二小隊・砲兵二隊ナリ、

八ノ一

鹿兒嶋藩

方今之形勢被為在

御苦慮、其三藩へ

御沙汰之趣有之候処、

叡旨之通奉命各不日上京、

皇國之為メ同心尽力可有之段言上、深

御満足、殊ニ汝等一同速ニ出府大儀ニ思召候、就テハ  
段々建言之趣尤ニ被聞食、先三藩兵隊御取被、仰出  
候間、早々取調可差出候事、

右勅語之趣右大臣伝宣

右之通二月廿八日被 仰出候、此已前幕府ノ時分將軍  
ヨリ仰出、御役人限敷舞台ニ於テ嚴然ト拜見被仰付、  
其上諸士支配之面々ハ麻上下ニテ、屹ト拜見被仰付事  
候処、一新已来ハケ様之

勅書モ触流ニテ、御布告相成候儀、輕深ノ故力尊敬ノ  
心ナキ故力、其可否イカ、アランカ、

八ノ二

鹿兒島藩

其藩歩兵四大隊・砲兵四隊為

御親兵被召出候間、早々精撰可差出候事、

但兵部省管轄之事、

辛未二月

太政官

右之通被 仰出候條、此旨一統奉承知候様、向々江可  
致通達候、

二月

知政所

【参照】

大久保利通日記四年二月

十三日

一九字訪西郷子、參朝、今日三藩へ兵隊被召出候御沙汰  
有之、二字退出、訪副島子、今夕小西郷入来、

九 鹿兒島藩ニ警司人員ヲ徵スルコトヲ令ス

明治四年二月十四日、鹿兒島藩ニ警司ノ人員ヲ徵スルコ  
トヲ令セラル、

(記)

市中見廻等ノ設アリシモ、未タ警察ノ制ヲ立テス、此  
ニ外国ノ制ニ則リ、其組成ヲ為ス、仍テ警司ノ人員ヲ  
鹿兒島ニ徵スニ至レリ、

(按) 警司ノ設置ハ、専ラ西郷之ニ預リ、外国ノ事例ヲ  
福澤諭吉ニ訳セシメ、參酌設定セルナリ、

【参照】

大久保利通日記四年二月

十四日

明治4年(1871)

一九字參 朝、今日ホリス人員差出候様、鹿兒島へ御達有之、二字退出、木場子・松方子入来、

一〇 府藩県ニ令シ皇族ノ陵墓ヲ検査録上セシム

明治四年二月十四日、府藩県ニ令シ、后妃・皇子・皇女ノ陵墓ヲ検査録上セシメラル〔本文記載なし〕

一一 華族ヲ以テ悉ク東京府ニ貫セララル

明治四年二月十四日、華族旧武家ヲ以テ、悉ク東京府ニ貫セララル〔本文記載なし〕

一二 九州路動揺ニ付、鹿兒島・熊本・山口三藩ノ兵ヲ発シ鎮撫セララル

明治四年二月十四日、山口藩連逃及ヒ浮浪徒西海地方ニ出没横行ス、鹿兒島・熊本・山口三藩ノ兵ヲ発シテ、之ヲ鎮撫セララル、

(記)

先ニ連逃ノ警アリ、巡察使四條隆謨ヲ派遣シテ、之ヲ鎮撫セシメタリ、此ニ於テ大阪ニ還ル、再ヒ騷擾ノ警ヲ伝フ、仍テ又日田県ニ赴キ、鹿兒島・山口・熊本三藩ノ兵ヲ発シテ、之ヲ鎮撫セシメ、尋テ西海道三十藩ニ令シ、巡察使ノ指揮ヲ受シメタリ〔本文記載なし〕

一三 西郷隆盛発途帰藩ス

明治四年二月十五日、西郷発途帰藩セリ、

(記)

西郷上京、先途ノ大策ヲ議定シタルヲ以テ、親兵ヲ徴シ、警司ヲ募ルノ用務ヲ帯ヒテ、本日発途セルナリ、

【参照】

大久保利通日記四年二月

十五日

一今日西郷子就発途相訪候、十字參 朝、退出ヨリ

岩倉公へ參上帰、吉井子・松方子入来、

一四 火防ニ付処罰ノ条項ヲ達ス

一日比各郷自火より隣傍数十家又は数百家も及延焼、其中ニは焼亡之者も有之、素と不測之事といへとも、畢竟ハ不慎輕忽ニ起り、其遺害を被り、実ニ無慚困迫之至候、依て民間ニおひて、火ハ専ら嚴肅取始末いたし、聊寛疎之儀共無之様可心掛候、乍此上失火於有之は、其本人は相当之科ニ被処度候、間ニは差火も有之候付、是又平常稽察局猶又嚴重可行届事候間、其役吏ニおひてハ、今一涯心思を尽し、胡乱之者ハ無用捨捕獲糺勸之上、其形行ニ従ひ、当局へ差廻候様、尤致差火候者は、斬罪ニ可被処旨、早急向々江被仰渡度候、以上、

辛未二月

糺明局

右之通御決定相成候付、向々江可申渡候、

二月十九日

知政所

一五 軍務局ニテ影之流門弟野試合ヲ举行ス

明治四年二月二十二日、軍務局庭面ニテ、影之流門弟野試合ヲ举行セリ、

(記)

藩内影之流師家六人・門弟四百余人ヲ兩分シテ二列ト

ナシ、首領ニハ各々赤白ノ綿球ヲ面道具ニ綻ヒ付ケシメ、之ヲ奪フヲ以テ勝敗ヲ判スルコトトナシ、大砲ヲ放チテ合鬨ヲナシ、競技ヲ開カシメタルナリ、

寺師宗道日記

同廿二日 晴

出席ス、ハツより軍務局ニおゐて影之流門人共野試合有之由にて御暇いたし、中村與兵衛・伊藤清右衛門・兒玉彌右衛門同道晚ニ至ル、深見休八・鈴木彌藤次・野村新九郎・坂口源七兵衛・隈元某・竹下八郎、右六家取合候由、人数四百人計有之由、双方ニ相分れ、一方は顔ニ赤印ヲ付ケ、一方は無印にて大砲相鬨にて双方より相掛り候打合也、其内ニ一人大将ヲ立、是ヲ目当ニ切入戦事也、初度ニは本学校之方負ケ之様子也、二度目ニは勝敗不相分候、数千之見物人也、稀代之壯觀也、

一六 西郷隆盛東京ヨリ帰着ス

明治四年二月二十四日、西郷東京ヨリ帰着セリ、

(記)



西郷本月十五日東京ヲ発途シ、海路帰着シタリ、去月  
来上京ノ次第ヲ復申シ、三藩親兵徵集、警司募集ノ件  
ヲ稟申シ、専ラ準備ニ着手シタリ、

【参照】

道島正亮日記四年二月二十四日

一未二月廿四日ニ西郷吉之助着ニテ候、去ル五日岩倉公  
ト共ニ東京ニ着イタシ、十日方参殿イタシ候由、東京  
表之都合ヨホト都合宜、其外長州・土州共ニ都合宜、  
土州ハ三大隊ニ予備隊出京候ヤニ候、其外追々出兵相  
成候由、舟次第二ハ直ニ出立モ可有之候得共、イマタ  
幾隊トイフ事ハ不相分候由、村田新八ハイマタ着無之、  
此モノ舟手当並會計ノ都合イタシ候半、

但東京市中等ハ、殊之外人望モ有之、薩州ノ西郷被  
参候ハ、米穀ハ勿論、諸色モ可被相下トノ大評  
判ニテ候ヨシ、イカ、被差越候上ハ、可相知候得  
共、余リ前以ノ評判通りニハ無之モノニテ候、追  
テ可勤考、

一三盃入真米壹俵

代錢七拾五貫文位ニテ候、

一七 故参議廣澤真臣襲撃ノ兇賊必獲ヲ詔ス

明治四年二月二十五日、詔シテ故参議廣澤真臣ヲ戕セシ  
賊ヲ搜捕セシメラル、

詔書写

故参議廣澤真臣ノ変ニ遭ヤ、朕既ニ大臣ヲ保庇スルコ  
ト能ハス、又其賊ヲ逃逸ス、抑維新ヨリ以来、大臣ノ  
害ニ罹ル者三人ニ及ヘリ、是朕力不逮ニシテ、朝憲ノ  
立タス、綱紀ノ肅ナラサルノ所致、朕甚タ焉ヲ憾ム、  
其天下ニ令シ、敵ニ搜索セシメ、賊ヲ必獲ニ期セヨ、

辛未二月

(別紙)

詔書之通被 仰出候、今日 朝憲ノ不立、綱紀ノ不肅  
ハ、全ク實美等其職ヲ不尽ニ由レリ、苟モ大臣ヲ残害  
ニ及候賊徒ヲ逃逸シ、既ニ五旬ニ及ヒ、未タ捕獲ニ不  
至、実ニ恐懼ノ事ニ候条、篤ク 詔書ノ旨ヲ体シ、敵  
密搜索ヲ遂ケ、速ニ捕獲シ、可奉安 宸襟様尽力可致  
候也、

辛未二月

右大臣實美

一八 在村宅地變換区域ヲ定メルコトヲ達ス

明治四年二月晦日、在村宅地變換区域ヲ定メルコトヲ達セリ、

鹿兒島近在借地村々屋敷成ニ付、方限分取調帳

草牟田村

一池之平西田村境より、加治木甚右衛門屋敷掛より左右、諏訪左衛門前通横小路川面迄、同所より引続西田万次郎前通小路より川面迄左右、同所小路より四元彦兵衛前通川面迄、

草牟田村本通より左手之方小路

一右四本彦兵衛前通小路より、永山良助・有川仲兵衛前通小路川面迄、  
一御用屋敷前通小路より、岩元慶七・野村源五郎前通小路左右川面迄、  
一野村善大夫・大原仲左衛門前通小路左右田地涯迄、  
一隈元源五左衛門・山田直左衛門前通小路田地涯迄、  
一松山直八・竹之内新兵衛前通小路左右田地涯迄、  
一本田新左衛門前通小路左右白坂直助角田地涯迄、  
一木脇善之助前通小路左右田地涯迄、同所より野元市右

衛門・田中五左衛門角田地涯迄、本通より右手之方小路、

一平田善大夫辺小森良助角より、本隆盛院下小路押廻り相良小矢太辺迄、

一松井十郎屋敷小路より、中村助七後本四ツ足堂入口右小路左右先無小路、

一本四ツ足堂入口左右小路寺師堅助前通、川上嘉左衛門角より押通左右、

一岸良源之進前通小路左右岩城叶二角より押廻、右手方田地涯迄、

一同所引続東郷才助前通小路より左右黒田平右衛門前通より森川孫四郎辺、竹内勘助辺より竹内直助前通圖師太郎八辺左右田地涯迄、

一重信勘助・宇宿十郎前通小路松山三九郎角より田地涯右之方江押廻、田中新左衛門前通左右仁禮覺大夫角迄、

一松山三九郎角より左之方田地涯押廻シ、三原平吉・堀勘兵衛辺田地涯迄、

一相良治部・川崎十左衛門前通小路、萩原長左衛門前通左右河野正八郎角より田地涯宇宿孫六郎・松元喜三左衛門辺より稲留笑左衛門辺迄、

一右同所河野正八郎角より左之方押廻シ、白濱八郎左衛門前通左右欄寢覺太郎角迄、

一松崎藏右衛門・相長治兵衛前小路左右宮里炸熊角より左之方田地涯押廻シ、池上彦太郎辺迄、

一五代正太郎前通小路長谷場七郎前左右田地涯迄、

一梅北龍右衛門前通先無小路奥金左衛門辺鎌田直助迄、

武村

一肥田川原より上之町馬場高麗町橋口迄右手之方、

一同所より奥勇助居所下通左右三原善兵衛居所角より武

通田地涯迄、

一貧富小路通り田地涯迄、

一奥勇助下通り徳永助右衛門居所前通り左右武通り押廻シ、

一肥田川原筋直通下之園通左右十九文店通同断、中洲通

荒田之方善神王小路迄左右下手方田地涯迄、

一十九文店通り嶋津良馬所入口より小路内左右、

一同所より中洲通出限より高麗町橋之方左右下手之方田地涯迄、

一下之馬場田地涯源兵衛か洲辺迄、

一上之園武通より海江田武二居所前通左右右手田地涯

迄、三隅角通出口より荒田村境小路迄押廻シ、

一上之園通より市來四郎居所前通左右三隅角通迄、

一十九文店通より唐湊通左右三隅角通り田畝出口迄左右、

一武之橋口より荒田之方右手田地涯本肥坪薬師堂通迄、

一通り、

一本能學寺小路本向船手新田涯迄左右、

一西田村境本笑學寺辺武筋本壽國寺下辺迄、

一高麗町武通り池田源左衛門居所先無小路内左右、

一右同所より千田七郎兵衛居所角より先無小路左右、

荒田村

一上荒田本通村長役屋敷出限田畝涯迄左右下手之方田地涯迄、

一本通より善神王小路左右中原休左衛門居所出限唐湊田

畝出口江之横小路迄、

一本通より村長役屋敷前通伊東善兵衛居所小路通田地涯

左右、

一下荒田武橋口辺より右手之方武村借地ならひに本肥坪

薬師堂前通左手之方嶋津助之丞居所迄、

一喜入主計屋敷より御船江堀直通・橋口彦二居所下通押

廻シ、八幡社前通北側迄、

西田村

一 肥田川原辺蟻尻通伊地知壯之丞居所通田畝出限迄左右、

一 蟻尻通より田屋敷通山岡敷馬居所辺迄左手之方田地涯迄、

一 武通ハ本笑岳寺辺迄一通り、

一 村長役所下辺より水上筋宮之原小吉居所辺迄左右本通屋敷掛迄、

一 武通より新溝筋違橋口迄左右、

一 筋違橋口より新溝筋限より平田桑衛居所前押廻、小幡甚大夫居所前通田地涯迄、

一 倉山作大夫居所辺より東之方後馬場通り左手之方田地涯迄、

一 新上橋口鎌田仙千代居所辺川田将監前通田地涯迄、

一 同所より赤松主水居所前通後馬場出限迄左右通り左手之方田地涯迄、

一 新上橋口辺より川水流日置半兵衛居所辺迄、

一 新上橋口より草牟田筋川原通草牟田境辺迄、上手之方御城山涯迄、

塩屋村

一 樋之口方より塩屋本通新屋しき境押廻シ、船玉神社辺より川上助八郎居所辺場之濱上通り限、七曲り小路左右ぐわんぐハラ橋口より禅門川限、

坂元村

一 後迫筋瀧之上辺迄、

一 韮韃冬之筋蛇穴辺迄、

一 但智恵光院之上より坂元村役所通路筋伊勢仲之丞辺迄、

一 内之丸筋精松八郎右衛門辺迄、

一 但花岡野屋しき通横通双方右野屋敷境迄、

一 冷水筋白ヶ迫迄、

一 城ヶ谷筋草牟田境迄、

一 岩崎筋新照院境迄、

今般屋敷御検地ニ付、近在五ヶ在并塩屋村現屋敷申請被仰付候段被仰渡候付ては、在中土族又は兵器方附士・足輕等当分借地之場所都て屋敷成被仰付候ては、過分之御高引入は勿論、百姓屋敷迄も相抱訳合御座候間、別紙之通方限被相定度、左様御座候ハ、第一人気も致安堵旁可然評議いたし候間、御布告相成度存申候、

明治4年(1871)

此段申出候、

未二月

民事局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

未二月晦日

知政所

一九 山口藩ノ逋逃ヲ隠匿シタル久留米藩ヲ

巡察使四條隆謨ニ命シ檢按セシム

明治四年二月二十九日、久留米藩山口藩逋逃ヲ隠匿ス、

巡察使四條隆謨ニ命シテ、檢按セシメラル、

(記)

久留米藩大參事水野正名等山口藩ノ逋逃ヲ隠匿シ、是

ニ至テ發覺セリ、四條巡察使ヲシテ之ヲ檢按セシメ、

高知藩ニ令シテ兵ヲ西海道ニ出シ、南海道十二藩ニ巡

察使ノ指揮ヲ受ケシメラル、

二〇 兵部省親兵ノ旅費手当支給ノコトヲ達ス

明治四年二月晦日、兵部省親兵ノ旅費手当ヲ支給スルコ

トヲ達セラル、

一 今般其藩兵隊 御親兵被 仰付御徴相成候付ては、当

処迄之旅費手当として金子相渡可申候間、請取方之儀

は會計司江承合せ可申、此段相達候也、

但当所江着到之上は、諸費銘細帳届可申事、

辛未二月晦日

兵部省

鹿兒嶋藩

別紙之通兵部省より被仰渡候間、軍務局江申渡、可承

向江可申渡候、

辛未三月

知政所

二 兵部省旧名古屋邸ヲ親兵ノ屯営ニ充ツ

明治四年二月、兵部省旧名古屋邸ヲ以テ、親兵屯営ニ充

ツルコトヲ達セラル、

一 今般其藩兵隊

御親兵被 仰付、当所江罷出候付ては、旧名古屋藩邸

江屯営可致、此段相達候事、

辛未二月

兵部省

鹿兒嶋藩

(記)

旧名古屋藩邸ハ、市ケ谷尾張邸ナリ、

## 二三 加藤弘藏時事ニ付建言ス

諸侯追々封土返上願出候趣ニ有之候得ハ、一兩月中ニハ二百七十諸侯悉ク願出候様可相成奉存候、乍去右願御許容相成候上ニテ、御請取可相成御処置延引イタシ候様ニテハ、自然不測之患害ヲ可生哉、其故如何ト申候ニ、最早御許容相成候上ハ、何レトモ其藩ノ有ニハ無之事故、姦臣貪吏等所謂行掛ケ之駄賃ニ、下民ヲ酷虐イタシ候様之事故、有之間敷ニモ無之、且下民亦仮令是迄暴政ニ被因候事有之候テモ、永代之領主ト存候故、自然屈服致居候者モ、最早領主トモ不存候故、此時コソ是迄ノ積怨ヲハラスノ好機會ト存、如何様之事仕出シ可申哉モ難計、且又仮令右両様之如キ事無之共、各藩民ノ為メニ永久之謀ヲ為シ候事決テ無之、唯所謂頭上之蠅ヲ追候様之事計イタシ可申ハ必然ニテ、敢テ咎ム可ラサル儀奉存候、都テ是等之患害ハ申上候迄モ無之、大ニ國家ノ治乱ニモ拘候儀ニ有之候間、右願御許容相成候上ハ、過日津田真一郎相認サシ上候様ノ振

合ニテ、君臣共夫々稟米又ハ俸金等被下、藩主ハ当分定府被 仰付、直様人物御選舉ニテ其地へ被遣、一時知臬事様之者ニ被 仰付度、尤其藩執政・參政等之内ヨリ両三人ツ、モ人選ニテ、右同動被仰付申談相動候様被 命、夫レヨリ追々跡々之御処置ニ被為取掛、始終ハ大小各藩共夫々分合イタシ、諸臬御定相成候様当然之御儀奉存候、乍去跡々ノ御処置ハ、猶追々御手ヲ被下可然儀有之候得共、一時之処如何ニモ御大切之儀ニテ、万一御処置宜キヲ不得候テハ、如何様ノ患害可生哉モ難計奉存候ニ付、職務外之儀ニハ御座候得共、此段奉申上候、

二月

加藤弘藏〔弘之〕

## 二三 士族等級廢止杯ニ付キ高知藩意見書

藩政改革ニ付、

朝廷御沙汰之趣有之、第一士族等級ヲ廢スヘキ旨被仰出候杯、猶以於藩庁評議之上、士民平均ノ政令相立候様、更ニ朝儀ヲ奉同施行可致旨被 仰出候条件如左候事、

一人民一致平均ノ理ヲ主トシ、士族文武ノ常職ヲ解キ、

同一人民中ノ族類ニ帰スヘキ事、

一官員兵祿ハ士族・平民ヨリ撰シ、実ニ官祿ヲ給スヘキ

事、

一士族ノ宗祿ヲ變シ、更ニ祿券ヲ給シ、宗産ト做シ、又

其券ヲ割キ、売買スルヲ許ス、且漸年ヲ以テ政府ヘ其

券ヲ当相場ニテ買上ヘキ事、

一士族常職ヲ解キ、別ニ文武官員ヲ立ツルニ依リ、従来

宗祿ノ三分一ヲ削リ、且大祿ハ更ニ削減ヲ加ヘ、官給

ニ充ツル事、

一卒ハ一代ノ者トス、華・士・平民ノ間ニ於テ、族祿ヲ

立テ難シ、依テ更ニ卒ノ一類ヲ除キ、平民ト做シ、祿

アル者ハ士族ノ法ニ准シ、祿券ヲ給スヘキ事、

一士族・平民其族類ヲ分ツノ三農工商ハ、人民ノ御生業

ニ帰シ、族祿ニ関セス、唯士族ハ賦業ヲ禁スヘキ事、

一藩庁ヲ視テ一藩ノ民政司ト做シ、士族・平民一般方籍

ノ法ヲ立ツヘキ事、

一右之通ニ付、従来ノ階級ニ依テ立置候規則一切廢之、

一官人及士族帯刀勝手次第、

但卒ヨリ平民ニ帰シ、或ハ平民中従来帯刀イタシ来

候者本文ニ同シ、

一士族・平民族共乘馬勝手次第、

但平民於一藩内限他所ハ其他ノ制ニ從フベシ、

辛未二月

高知藩

## 二四 桑名旧臣瀧安弘・馬場正武ノ意見書

瀧安弘・馬場正武再拜謹白于立見盟長及中村兄、

方今天下之事豈暇復言哉有志之士效忠於、

皇国者、入則贊 廟謨、出則匡藩政以挽回世運、是今

日臣子之責也、外事姑措之、我藩内之事果如何也、昔

平国公撥天明之妖氣、回狂瀾于已頽以藩屏于

国家、其志業天下之所共誠也、及其後世墜其志業、則

何面目对天下哉、而况戊辰之事負辱于天下、嗚呼豈忍

言哉、夫寬政之功烈天下莫不知也、而慶應之羞辱天下

莫不知也、苟不雪此辱桑藩臣子何以立子世哉、然既往

之得失不足論也、唯当效大節于国以報

天恩而已矣、如此而後臣子之責可以少塞前辱可以少雪

矣、諸老成及同志士所尽焦心者唯此而已、夫果欲效大

節莫如先立其实備也、蓋諸老成所以痛心焦慮於此者亦

已久且深矣、則不待多議也、雖然某等至愚有不堪憂念者矣、夫事至于今日我藩存亡將判于今日焉、当胆枕戈其民練其兵以大報

國家矣、如此而後臣子之責可以塞也、不然、前視後顧、彌縫一時不能大自奮于郡藩之上以效節焉、而僅靠之民則將何以報

國家矣、桑藩臣子之責果足以塞乎、然則今日更張之事在他藩、則蹈襲尋常軌迹可也、在我藩則決不當、如此而止也、宜為非常更張而後可也、今我藩所以結鹿兒島者、固非徒覬其光也、將必取則于此以助報國之謀也、夫神丹之累卵所以至于今日者、固非一朝一夕之故也、而其所由以致今日之衰弱者、由于綱紀頹而已矣、天下憂國之士夙有見于此焉、方賴鹿兒島藩以圖恢復宏業、蓋海內之州七十有余州、而其足以藩屏于

皇朝外陲四夷者蓋不過一二州也、是今日國威所以不揚也、苟欲恢復之、則莫如使海內七十余州民悉振勵興起如鹿兒島藩也、是今日海內有土所以賴鹿兒島藩以謀恢復也、夫鹿兒島藩所以砥柱于

神州者、果何以也、無他其報政者惕若不息剛健勵精忠益集衆、思未嘗一日忘大敵在四疆也故、其為政一知創

業之日、賞罰明嚴養老恤幼壯懲惰、以使闔國之民爭奮于善、而恥于苟安焉、鹿兒島藩所以能砥柱于

神州者、其大本盡在此矣、抑海內之州地富人衆者何止一二、而鹿兒島藩所以獨奮興、而為天下先者豈有他哉、不忘大敵而已、大敵者誰也、英亞也、鄂李也、凡海外諸蕃皆莫非我敵國外患也、昔者我德川公之在濱松也、常不忘大敵故能立國于危迫之中、而撥天下亂焉、今其事之大小與勢之難易則雖不可同日而論也、而鹿兒島藩之尽力于

神州以維持之不可為之日亦猶遠參士民維持濱松于大敵之中也、而鹿兒人之視英·米·鄂·李諸國也、亦猶濱松視甲·信·相·尾也、其日夜惕若不忘大敵而從事于創業亦宜矣、然則立國之道豈有他哉、果知濱松之所以不忘甲·信與鹿兒島之所以不忘英·鄂者、而凜然自勵、則海內之州可以皆為干城也、今我藩將士固未能遽望鳥居·大久保·本田等諸士之万一、而其他貫於游惰苟安、其人染於固陋小成焉、則其學濱松亦至難而非一朝夕之所能及也、雖然國之強弱唯由于其人而已、不拘其大小也、夫我藩戊辰苟有人心者、誰不情激思所以雪此辱者哉、使我藩果不一日忘此辱、則闔藩之士固已在死地矣、



以在死地之士也、而學濱松決不難也、亦在<sup>(47)</sup>勵之如何而已矣、夫學濱松亦無他使闖臣民如常在于大敵中焉、而凡百之事一以創業從事而已矣、或曰、以創業為法者在干戈之際、則固可也、今天下雖未平而又未至動干戈之甚也、而遽以創業從事則是殆好事者所謂矯狂過直之害亦不鮮矣、而非藩庁所以遵奉

朝廷規則之意也、凡事貴特重矣、執藩政者當熟察方今之世體、広考諸藩之異同而折衷之也、其要在無過不及也、嗚呼是何言也、從視日前之形迹以墨守可謂規則者而不處也、世奕千百年之後者足迂儒俗吏之所為、而非忠臣之所宜為也、今海內之勢已至于此、雖亂之形則未免也、而其實則宇內恟々強者日盛情者日亡、故以佛郎西之強大、而一旦有變、則為普魯士所乘交兵、不出一年而首長為擒土地割割矣、語曰、出則無敵國外患者亡、以佛郎西之強大与其酋之雄黠、而一日忘敵則亡不旋踵矣、

況我

神州以一島孤立于東海、國制未全立、軍備未全定、而當狡慮窺覷之働平乎、天下有人心者莫不日夜憂慮也、當

比時

神州之士民固当日夜奮勵念

神武常創業之艱難而從事于此也矣、而況於我藩乎、苟不以創業為法而拘于形迹誘之于得已則藩之為藩何以立哉、昔者岡崎之方微也參之士流離困厄艱苦不可勝言也、而遂能輔東照公而興以、撥天下之亂而效尊攘之烈于國者雖固由于公之英武、而亦必由于其始輔之者能從事于創業也、今時勢固非當日之比、<sup>(48)</sup>其治國之要無古今之異、則今日為

皇室之藩屏者不當不以創業從事也、明集等側聞、我藩昨冬更革之略謂、藩庁之事至重大而其施設之輕重操縱之緩急亦皆有機宜焉、是諸老成之所熟慮深謀而、固非在下者之所得而輕儀也、然聞、我藩更革純遵奉于朝廷規則、而或未免大拘焉、蓋諸老成持重其於更革亦必周謀熟慮而後發之也必矣、然其恭順大過專奉規則而致一二大拘也、古人所謂觀過知仁者亦此類也、夫普天率土悉奉

朝旨固勿論、已是以海內府藩俱莫不悉、基于規則而是張改正以歸一治也、雖然

朝廷之盛旨、唯在于七州之治一定其大綱以總攬之于朝廷而已矣、豈必詳其末而遺其本区々較其制治之末節哉、

然而端緒不序則紊亂矣、水道不疎淤泥矣、故方今政体

始更之際、所以先布其規則者所以開其端、而立其標焉、以使府藩臬更張改正其大体必原于比規也、若夫職官之名俸祿之等或簡或詳、而其文為不易遽行者、則非急務之所在也、非

朝旨所先也、且夫地有東西、人者淳漓、風氣民俗未可報一而論也、故更張之要在合機宜、以立綱而已、豈可執物拘泥、以趨于其末哉、昨冬在東京馬喰町旅寓、盟長与山脇權大參事論更革之事、反復切至其意不出(たゞ)從事創業也、而山老成曰、事要特重、不宜迫切、且更革之事一遵奉規則而又參之時勢人之情不得止已者、而後生之弁論縷々徹衣而止、某等至愚不如大計、而杞憂有不能也焉者、是以上仰

朝旨下察与情、又熟察内外之勢而反復深思、以為廟謨之所先者、在使七十州之治大綱確定焉、以總攬之于

朝而已、海內之州尚能張其綱紀、足以折衝禦侮藩屏于國焉、則大凡大宝之治亦不過于此也、而區々規則之未何足較其同異哉、由是觀之更張之事諸藩各異其焉、而其施之前後操縱之緩急亦不能一也、故必洞見卓觀、因其所宜而為之節制、当立紀綱以存大体而已矣、

朝廷之旨蓋在乎此矣、必矣、今且言、我藩之所宜先者夫我藩之疲弊亦久矣、加之以己巳之削管重之以庚午水交軍資無三年之儲而民產有旦夕之困、然而其患未大形者何也、以其地繁華舟車之所輻湊而民易以護目前之利也、故無事則苟安其形之富庶以為是可猶特也、不復察其果虛弱不足特也、一旦有事、鬪藩士民知方而勦

王事者恐不過十之二也、其余則往々將狼狽失所也、國之存亡必由于其備之予与否矣、特其形之不可攻布安其富強焉、而不予其備所以致戊辰之辱也、其形更矣、其備亦將日趨夷也、然特開其端而未足以為國也、一旦有事特足以僅免于戊辰之敗焉、則焉、而其不是以為

皇軍先鋒、則決矣、嗚呼足何以雪大辱哉、是實不可憂也、果憂之則莫如視機宜以振藩綱也、所謂視機宜以更張者如何、曰、以創業從事也、已夫煩則事必擾矣、簡則事而夫煩則事心擾矣、簡則事必立矣、立与擾者存亡之所申來也、夫悅創業之簡明而厭乎成之煩擾者人心之自然也、故自古大事之成敗國家之興衰、必由于其報事者之簡与煩矣、而方於事之未敗也、迂儒俗吏方以繁文縟禮飾其治體、而設文法以束上下曰制度如此而立矣、法令如此而具制國使人不得已而聽於上也、自常人觀之則可

謂治矣、而自識者見之則將必深危之、何則形迹之、

而人心不振也、此其弊也、上下隔絕情不相通、雖有憂國者而其誠不能達于上也、英傑之士則不然立國以簡存其大体而去、其繁文苛節之視上如子弟之於父兄也、故能使民尽其情、自常人觀之則以為大簡無節也、莫不怪之也、然及其一、且有事也上下相親如手足、頭自相為用也、欲國之不興亦不可得也、嗚呼簡煩之得失唯英傑之士独能知之、己已之際諸老成与壯士共甘若將有所報國家也、當此時闔藩有志翕然望其出而從事于創業焉、庚午之春藩政始革、諸老成以衆望出任其職、闔藩刮目企踵一效矣、而人心立奮勵有不如己已之日者何也、蓋創業之法未行而守成之文或賸也、抑簡煩之得失固諸老成夙察而不待多言也、則今日之事諸老成非不欲從事于創業也、然而其所以未能然者何也、蓋亦其崇奉

朝旨太原而、更張之事唯規則足由焉、是以或為規則所束縛而有不得已也、是有士可以為深憂也、鹿兒島之所以振者亦以創業從事、今我諸老成能斷然從事于創業、而無復毫拘於規則、闔藩人心將必不待終日而奮不啻如己已之日也、夫如此而後更張之实效可得而得而見焉、必矣、不能則改革文雖悉其詳而具美亦未免為虛設耳、夫

實備不立于内、則不可以外結、不可以外結則不可以大

凶報

天之業也、然則内修外結如軸与輪矣、而其本則莫急且重於内修也、今天下之勢變在旦夕、變則必有事、有事而藩備未固、其兵未足、以為

皇軍先鋒則何以效節哉、今事勢已至于此誠以我藩效節報國之秋也、而又存亡榮辱、將判于此之秋也、是盟長及大

兄所夙念、不已而某等至愚亦所深心也、某等曩奉命遊學于鎮西、至于鹿兒島藩將有所賴也、及見其俊傑觀其政、文出、而巡隅、日之間一月命于效矣、慨然觀感不

能自己也、於是乎俯仰低回、夜以繼日仰思效節之機決在于今矣焉、俯思存亡榮辱將判于此矣焉、而又益慨然、以其等雖至愚而一奉命于政府以來于此焉、則決不當從觀而默止也、遂決議將急赴于桑名以貫愚誠也、及二月十五日將發訪大山翁名格、叩以愚誠、翁謂某等曰、僕

前月過尊藩見其在職諸君、諸君方苦心于更正焉、公等宜尽力及未發也、又曰、更張唯当合于機宜矣、不宜拘于規則也、如我鹿兒島藩更張唯立紀綱以存大体焉事一合于機宜而已、決不毫由于規則以乖藩之情宜也、若夫諸州更張之際、或致紛紜者蓋皆曰其墨守規則而不合情

宜也、蓋翁之所以忠告者決非偶然也、乃答曰、某等雖頑鈍然決不負忠告也、若愚誠不實則死不已也、願察此事遂告別而發矣二月十五日也、抑今日臣子之費固重矣、而況某等頑鈍辱奉南遊之命、守夫我藩所以賴于鹿兒者、其意決非徒尔也、而其可以命某等者亦決不在於區々細節也、然則今日之事不容默止也不待言也、凡前件之事皆盟長及大兄等所嘗為憂也、今將就而共謀之、而東西數百里未得急乃也、故發急報以告、伏冀盟長及兄等諒某等之愚誠、當速發東京趣于桑名大尽其力也、則某等亦將得附驥以效愚誠也、旅館匆卒臨不尽所言、幸諒其意、

明治四年辛未春二月廿二日夜書

于崎陽客舍南樓燈下

瀧 安弘再拜

馬場正武再拜

立見盟長

中村盟兄

杜鵬啼血声ハ有明ノ月ヨリ

外ニ知ル人ソナキ

武士ノ日本心ヲ尽シテノ

後コソ吹免イセノ神風

二五 市來四郎廣貫島津久光へ建白書

〔頭註〕明治三年庚午十二月  
旧臘十二月

勅使岩倉殿下鹿兒島ニ下向シ玉ヒ、

照國神社へ

御劍一口、國家興隆ノ為

御祈御納、且ツ

老公御懇微股肱羽翼トナリテ

御不速ヲ補助セラレ、群臣ト戮力

皇業ヲ贊成セラルヘント之趣、実ニ我カ島津ノ御家ニ

於テ、前代未聞之御美事、土芥ニ等シキ身ニ至リテモ、

錦繡ヲ衣テ白日ニ向フカ如ク、如此ノ盛時ニ逢遇スル

モ、真ニ闔藩ノ景福何事乎之ニ如シ哉、当地ニ於テモ

愛國ノ情信節ナル者ハ、藩政ノ隆盛ト

老公之徳義ヲ感稱シ、大早之雲霓ヲ望カ如クトモ云フ

ヘキノ人心ニテ、政蹟高隆庶民安堵ノ日ヲ仰キ見シコ

トヲ希望シ、指ヲ數ヘ日ヲ算シテ相待ノ況勢ナリ、願

クハ早く御登京アラセラレテ、内ハ紛擾之人心ヲ鎮静

安撫シ、國富兵強庶民泰平ヲ榮ミ、生業ヲ勉競スルノ

策ヲ献セラレ、外ハ海外各國之輕侮蔑如ヲ受ケスシテ

並立信交之議ヲ建ラレ、維新之鴻業千載之模範ト仰キ、  
 應仁 仁徳其他列聖帝ト並称欣慕スルノ政蹟賛成セラ  
 レンコトヲ、天地神明ニ仰テ希望スル処ナリ、右ニ就  
 テ草莽之一書ニ等シキ躬トシテ大政ヲ謗議スル、素ヨ  
 リ僭踰越等之罪不輕ト雖モ、聊憂國之微衷ヨリ積日耳  
 目ニ触レ、或ハ上下ノ人情或識者之論説ヲ酌テ、拙考  
 短見ヲ陳テ万分之一御参考之一端トモナラント、忌諱  
 ヲ憚ラス左ニ陳述ス、

凡ソ事業ヲ施サントスルニハ、細大共ニ先ツ緩急輕重  
 ヲ明弁シ、而シテ施行ニ臨マサルヘカラス、然ルニ  
 御一新尔来之事蹟、多クハ先末緩急之順序ヲ被為失候  
 廉不鈔、或ハ朝令暮換ト名ツクヘキ事件モ多ク、故ニ兩  
 京ヲ初メ其他上下之人情頗ル紛擾シ、稍離反土崩ノ況  
 勢ニテ異言喧々物議囂々、更ニ 維新之難有キヲ感戴  
 シ、法令奉信尊崇スル者鮮ク、却テ旧幕ノ弊政ヲ慕フ  
 ノ情ニ殆ント立至レリ、畢竟緩急先後之弁ヲ失シ、強  
 テ旧法ヲ破壊シ好シテ新法ヲ施サレシヨリ生シタルノ  
 一病疾ニシテ、終ニ朝令暮變之姿ニ相成リ、夫ヨリシ  
 テ人心危懼ヲ懷キ、臨淵踏水之思ヲ為シ、淺愚或ハ血  
 氣激發之徒ハ道路ニ罵ルノ勢、憂國愛君ノ情信節ナル

者ハ嘆慨擧眉声ヲ吞ンテ憂患シ、或ハ輕薄驕謾ノ輩又  
 ハ迷利多欲ノ徒、或ハ名分大義不弁之族ハ喋々陰言誹  
 譏シ、或ハ浮説流談ヲ釀唱シ杯シテ御施行上少シク過  
 不及疵瑕アレハ惡言誹謗シ、人心ヲ動揺惑惑シ、維持  
 誠警スルニ道ナキトモ云フヘキノ今日ナリ、之ニ由テ  
 愚考スルニ、古人ノ云ヘル如ク民ハ旧法ヲ慕フト、或  
 ハ人心定テ而シテ後百事舉ルトモ云ヘリ、故ニ其弊害  
 ノミヲ除カレ、則チ去煩蠲苛以綏百姓ト申ス御着目ニ  
 テ、人心安堵四民其職ニ安ンシ、生業ヲ樂ミ候様ノ御  
 所置專一ナルヘシ、尤モ緩急輕重ヲ弁シ、先後之順序  
 ヲ定メラレ、確固不動ノ盤礎相立、其上御施行ノ業ニ  
 被為係度、然シ斯克人心不定或ハ上下之官員多日不体  
 裁ヲ釀シタル後ナレハ、黜陟之典ハ初ニ施サレシテ  
 ハ事挙ラス、人心安堵セス、反正之途ニ赴キ難カラシ、  
 之レ此度改革ノ大要目ニシテ断然御勇決アラマホシキ  
 一大事件ナリ、其他寬急ノ區別ヲ左ニ挙ク、一ニ曰ク、  
 官員ノ正邪ヲ明弁區別シ黜陟ヲ行フヘシ、其法ハ斯ク  
 正邪佞諛混淆スルニ於テハ、進退転遷スル位ノ所置ニ  
 テハ區別スルニ精粗ノ議モ紛紜シ、時日ヲ費シ或ハ手  
 數ヲ經杯シテ其煩雜繁縷、其間ニ奸佞邪点ノ輩ハ面ヲ

換へ論ヲ変シ、百方手ヲ尽シテ種々附着従属シ、利禄ヲ貪ルノ姦策ヲ用フ等ノ大弊生セサルトモ云ヒ難ケレハ、此一事ハ麗猛至急一挙ニ御所置アラマホシク候、則去々年我藩改革ノ如クニシテ、兩輔相公並 御身辺ノ高官四五名ヲ除クノ外其他上下之官員悉ク廢止シ、而シテ即チ精沢之參議・弁官等三四名ヲ新ニ置カレ、夫ヨリシテ天下之人材草野ノ賢材ヲ拔擢セラレ材器能芸ノ所長ニ從ヒ任用セラレ、野ニ遺賢ナキト云フヘキノ御施行アラマホシク、之レ此度改革之礎基ニシテ正邪ノ區別佞諛分弁ノ第一ナリ、近ク譬ヲ取リテ勘考スルニ、我藩ノ改革速ニ成功シ、姑息因循ノ弊ヲ一洗シ驕惰之惡習ヲ去リ、海内ニ轟鳴希望セラル、之本ハ、唯此一勇断ヨリ万端ニ涉リタル者ト存候、此事蹟ニ被為則御施策アリ度事ナリ、二ニ曰ク、玉体從之官員ヲ精沢シ転伝スルヲ要ス、古ヨリ國之興廢存亡ハ君ノ明闇賢不肖ニアリ、今聖上御若齡、万機御親裁トハ云ヘト多クハ群臣之議決ニ出ツト、故ニ民ノ信スル処少シク厚薄ナキニアラス、爰ヲ以テ輔傳又ハ侍從ノ人ヲ択ヒ、和漢ノ聖帝明王ノ政蹟言行ヲ常ニ

聞食シ、上下ノ情ニ通セサセラレ、益 聖德赫耀宇内ニ尊戴畏伏スルヲ希望ス、就テハ兎角侍從之人ヲ択擢セラルニ有リ、之レ即今至重ノ要件ナラン、三ニ曰ク、兵權真ニ御掌握之事之レ即今最モ至重ノ要件ニシテ、一日モ忽ニスヘカラス、今各藩ヨリ徵集ノ兵ハ、屯所ヲ異ニシ隊制ヲ別ニシ同和協力ノ名アリテ実ナク、藩ニ振不振強弱ノ別アリテ、全国強盛之基ヲ開クニ妨アレハ、尔来

釐下警衛之兵ハ屯所ヲ一ニシ、各藩合一伍什小大隊藩々混一同交シ、編隊ノ制度相立候ハ、海内一致和同ノ基強兵ノ礎柱ト存候、四ニ曰ク、民政ヲ整理シ民ニ未開ノ産業ヲ教授シ、逸遊之民ヲ減シ徒食ノ者ナカラシメ、教化ヲ布キ邪教ニ迷溺セサラムル等至急ノ要目トセラレ度、之レ建國ノ盤礎ニシテ、第二目ニ論セシ如ク、兵權御実握ト并ンテ速ニ御改正興業セラルヘキノ要務ト存候、五ニ曰ク、大藏省ノ制度麗確ニ相立、出納ヲ精フシ、歳入出ヲ量リテ成ルヘク余計ノ生スルヲ專ニシ、其余計ハ不虞軍旅ノ用ト民庶救助ニ充ラル、ノ麗則確立アリ度、当今會計ノ次第ヲ伝聞スルニ、旧幕ノ失体或ハ驕侈或ハ疲弊ノ跡ヲ採次シ、或外國ノ債財モ

夥ク、或ハ兵馬ノ費用巨万ノ後昨今年迄ハ不足スル勿論ナリト雖モ、情勘フルニ、旧幕ノ時ノ出納ト比較スルニ甚疑ヲ容ル、如何トナレハ旧政府関轄スル石高ハ無論其俵ニ大蔵ニ納リタリ、加フルニ奥羽・岩陸・北越等ノ各藩削地ノ石高、或ハ知藩事奉還モ四五ヶ所ハアルヘシ、其レ石高或雜稅或五港ノ出入高稅等、大數幾千平ハ詳ニ知ラザレドモ、相應ノ數ナルヘシ、又旧政府ニハ潜上ノ驕奢甚シク、此費耗ヲ初トシテ城郭ノ構造大小役員ノ數モ夥シク、随テ給俸旅費或ハ海陸軍費其他種々ノ費用、加之冗官冗費ハ顯然、殊ニ閑老ヲ始メ其員随テ多キハ論ヲ俟タズ、然ルニ即今ノ処其入ルハ増加シ、出ルヘ甚減少セシハ判然明ナリ、其一二ヲ挙テ云ワンニ、第一諸官員減シタル凡ソ三分ノ一位ナラン、随テ俸給モ減少セリ、或海陸軍ト云ツテモ未タ旧政府ノ半ハニモ至ラザルベシ、加之多クハ各藩ノ公廨ヲ以テ弁用シ、大蔵ノ出ス処ハ三分ノ一ニハ至ラサルナラシ乎、諸藩現石二十分一海陸軍費ノ大數凡現石六十余万石ニ及フト、之ヲ一石ノ価六兩宛ト算シテ其金凡ソ三百六十万円ナリ、之ヲ以テモ追々余計ノ生スルハ勿論ナリ、又大小礮彈藥製造等ノ入費進モ新ニ手ヲ下サ

レタルヲ聞ス、其佘仮令臨時ノ用途有リトモ、旧時ト比スルニ余計ノ生スハ明ナル訳ナレトモ、不足シテ繰合ノ見止ナキト云ハ疑ヲ容ルノ第一ナリ、旧政府ニテハ毎々金銀ヲ吹替、其佘利モ夥シキ事ニアリシナルヘシ、夫ト並ンテ当今ハ紙幣ヲ出サル、之レ同一ノ訳ナレハ之ヲ以テ勘フルニモ不足、疲弊杯ト云フヘキ訳ニアルマシク、兎角ニ大蔵ノ出納ヲ麗ニシ、歳入出ヲ量リテ而シテ百端ノ事務ニ分當シ、一年間ニ施スヘキノ分界ヲ定メ、少許ハ是非余計ヲ生シ非常ノ用途ニ備ヘラル、ノ大法御一定相成度候、何事ヲ為スニモ歳入出ヲ量リ、其後手ヲ下スニアラサレハ成功ヲ見ルコト能ワサルヘシ、之レ和漢洋古今ノ常法ニテ、国体分限ヲ知ルノ第一ナリ、六ニ曰ク、北海道並ニ奥羽、岩陸其他ノ諸国不開ノ原野ヲ開拓シ、人烟ヲ繁殖シ或ハ鉞山ヲ掘開シ、金・銀・銅・鉄・鉛・錫等必用ノ品ヲ外国ニ購求セス、中ニモ多ク金・銀ヲ採リ得テ早く正貨ヲ製造シ紙幣ヲ減シ融通ニ洪滯閉塞ナキヲ要シ、或ハ欠ヘカラサル鉄銃鋼ヲ外国ニ求メス、我國産ヲ以テ我カ用ヲ弁スルヲ要セラレ度、我ニ全ク備ワラサル物ハ有餘、不足ヲ回轉スル貿易ノ道ニ就テ求メサルヘカラサルハ

天然ノ訳ナレトモ、適々天之賦造セル鉉類夥クアルヲ  
知りナカラ之ヲ棄置テ他ニ求ルハ、全ク人カヲ竭サ、  
ルノ罪ナレハ、勉メテ製造ノ道ヲ開キ人民ニ教導セザ  
ルヘカヲサル事ナリ、七ニ曰ク、北海道ノ諸國開拓育  
民之法ヲ改掌シ、産物ヲ開キ人烟ヲ繁殖シ教化ヲ垂レ、  
後年北虜ノ侵掠奪拠ノ憂患ナカラシメンコトヲ深ク慮  
カレ度、八ニ曰ク、大小礮・彈丸・硝薬ハ国家保護ノ要  
品ニシテ、今時ノ如ク外国ニ購求スルハ穀塩ヲ他邦ニ  
求ニ同シ、因テ東京・浪花等へ製造局ヲ開カレ、国用ヲ  
足シ候策ヲ建ラレ度、大小礮ハ外国ニ新發明ノ利器出  
タルトキハ、一二ノ器ヲ得テ之ヲ模造シテ可ナリ、譬  
ヒ価ハ少々高直ニ付クトモ、其価金ハ国内ヲ周回シテ  
下民賑恤ノ一端トナルヘシ、硝石ハ我藩ニ於テ近代發  
明セシ洞穴ニ設施スル法ヲ以テ地利ニ随ヒ、府藩県ニ  
於テ製造シ、年々貢税ノ法ヲ建ラレテモ可ナラン乎、  
九ニ曰ク、外務關係ノ官員重立チタルハ、彼ヲ知り己  
ヲ知レル者ヲ用ヒラル、ハ勿論ナリト雖モ、即今其人  
物ヲ得ラル、ハ真ニ難ルヘシ、難キニ於テハ彼ヲノミ  
知レルヲ用ンヨリ寧己ヲノミ知レル者ヲ用フルトキ  
ハ、応接論判ノ上ニ就テ我ヲ辱メザルナラン、厚ク議

セラレ度事ナリ、十二曰ク、前論ノ如ク官員ノ黜陟ヲ  
行ワレンニハ、此涯大中各藩ヨリ人材ヲ択撰シ、議員  
十四五名ヲ置レ太政官ニ參預シ、細大ノ事務悉ク預議  
ノ制ヲ被設度、之レ今時枢要ノ事件ニシテ弘ク衆說ヲ  
容載セラル、公平ノ法ト存候、十一ニ曰ク、商買ハ国  
内融通ノ第一ニテ、民政中至テ指置ノ難キ者ニテ、一活  
物ニ属シ正權ノ二術ヲ兼用スル者ナルコトハ、和漢洋  
古今同一ナリ、故ニ動モスレハ利ヲ恣ニセントシテ価  
ノ高低ヲ謀リ、品物ノ運回ヲ渋礙スル等ノ惡弊ヲ生シ、  
万民ノ苦ヲ興スコトアリ、然リト云ヘトモ利權ハ商買  
ニ任セサルヘカラス、故ニ政府ノ權ヲ以テ寬猛之制度  
法令ヲ立テ維持シ、人生ノ融通回轉ニ渋滞ナク、一己  
一家ノ肥利ノミヲ謀ラサルヲ專要トス、殊ニ外国ノ商  
買ハ本手金ニ富ミ或ハ社ヲ結ンテ共ニ利ヲ謀リ、弘ク  
字内ニ周旋シ、耳目洞開着眼スル処細大迅速ニシテ、  
進退果決ヲ能クスル故ニ我商買ノ及ハサル一ナリ、或  
ハ諸開港場毎ニ岡士其他ノ官員ヲ置テ、國權ヲ以テ維  
持保護スルカ故ニ、ヲノツカラ商買ニ一ツノ權アリテ  
妄ニ致サレ、或ハ迷貪セラル患鮮ナシ、之レ我カ商買  
ノ未權利ノ任アラサルニナリ、如此ナルカ故ニ從テ本



手金ニ富ムコト能ワス、或ハ海外ニ出商スルコトナキ故ニ、着目遲鈍狹隘果斷ナク、勝敗ノ機ヲ失スルコトノミニシテ始終彼ニ致サル、者ナリ、商ハ正權ノ二道兼用スル者ナレハ、即チ戦争ノ如キモノニシテ攻守ノ別ノ如シ、出テ攻ムルハ必ス利多ク、退テ守ル者ハ必ス利鮮カ如シ、然ルカ故ニ我カ商賈モ弘ク字内ニ出商スルニアラサレハ、真ニ利ヲ得ルコト難ルベシ、随テ真ニ富國ト云フニ至リ難カラシ、今時ノ況勢ニテハ、一商賈一家一己ノ損益ノ様ナレトモ、実ハ国家ノ損益ナル故ニ、彼ノ措置ニ倣習シ、政府ヨリ其官ヲ置テ保護維持スルニアラハ、渠ニ致サル、ノ患免レサルヘシ、又海外出商ト結社ノ道モ勸導セサレハ、富國ノ本源ハ恐ラクハ立チ難カラシ、今通商司ト云一局ハ如何様其目途ヲ以テ建レタルヤ、其次第ヲ聞クニ全ク維持保護スルノ筋ヲ聞カス、却テ商賈ノ害ノミアリテ融通回転之妨トナレリ、一概ニ云ヘハ關係ノ官員或附屬セル奸商共ヲ利肥スルノミト見ユ、素ヨリ官ヲ利スルニモアラス、唯奸商賈ノミヲ利シテ幾千之小商賈ヲ苦ムルノ局ナレハ、速ニ廢止セラレ、積日私曲ヲ働キタル者ハ、品ニヨリテ罰セラルヘシ、而シテ弘ク海外ノ商賈ト社

ヲ結ハセ、広ク字内ニ趨走シ商業ヲ營セ度、斯ク交際ノ道開ケタルニ、外国人ト結社ヲ許サレザルト海外ニ出商セサルハ甚拙策ニシテ、富國ノ道立難ルヘシ、十二ニ曰ク、即今外国ヨリ輸入ノ品ト我ヨリ輸出ノ品トヲ比較スルニ、輸入ハ細大凡百八十余品ニ下ラス、輸出ハ凡七十余品ニ上ラス、之ヲ以テ月々歳々國之損亡瞭然タリ、輸入品ノ内多クハ甌器遊器ニシテ、是迄ナクテモ事ノ欠ケサル者多ク、夫ヲ以テ我ノ膏油ヲ絞ラル、知ルヘキナリ、其内過半ハ心ヲ用ヒ力ヲ竭ストキハ模造擬製スヘキモノアレハ、第三ニ論シタル如ク、産業教授ノ一局ヲ設ケラレ、専ラ洋学者或ハ和漢物産家或セーミ学家・經濟家等ヲ置キ、些小ノ仕掛ヲ為シテ教授シ、或書籍ヲ与ヘ抔シテ叮嚀反復教諭シタラハ、各一産業ヲ得テ生計ヲ營ミ候様相成リ、逸遊徒食ノ者鮮ク、遂ニハ輸入ヲ減シ國之損亡少ク、富國ノ根本爰ニ於テ初テ建ツヘシ、國ニ遊民アルヲ患フルノ論說ハ、和漢古今識者ノ云フ処ナレトモ、未タ其実効ヲ見ルコトナシ、西洋各国ハ皆其法制ニシテ、假令テ其一二ヲ挙テ云ワンニ、英國ハ土地疲瘦五穀菜菓諸品乏シク、然シ奇工ニ長シタルヲ以テ國人多クハ工芸ヲ以テ生活シ、

則亜国ノ綿花ヲ買テ布ヲ紡績シ、四方ニ輸出シ、一大産業トセリ、其紡織ト染彩スル一産物ナリ、佛ハ烟草ノ名産ナリ、国人耕作スル者ト或巻キ或刻ミ抔シテ一産業トシ、日本ノ如ク全業ノ假他邦ニ売出スコトナシ、其製造スルノ工人一ノ産業ヲ為スヲ要ス、又蠟燭モ日本ノ如ク塊蠟ノ假売出スコトナク、大小所好所用随意ニ製造シ、万里ノ波濤ヲ凌ヒテ我國ニ輸入スルモ夥シキ数ナルヘシ、如此一細事ヨリシテ心ヲ用ルコトノ信節ナル故ニ、国富ミ兵強宇内ニ跋扈横行スルモノナリ、何レノ国ト雖モ万物具備国産ヲ以テ国用ヲ足スコトハ、風土寒暖ノ異ナルニ随テ能ワサルハ天賦自然ノ道理ニシテ、素ヨリ独立鎖閉ハ天意ニ背ケル事故、交誼貿易ハ則チ天道ナリ、然シテ互ニ有余補不足ニ至リ候、然シナカラ其国ニ生具セル物品ヲ採用セス放擲シ置ハ、甚タ人道ニ背ケルナレハ、前論ノ如ク心ヲ用ヒ力ヲ竭シテ生業ヲ勉サルヘカラサル者ナリ、政府ハ民ノ父母ナレハ、財ヲ費シ心ヲ勞シテ民ニ生業ヲ教諭シ、徒食逸居セシメス生計ヲ為サシムルヲ勸導スル職掌ナレハ、此事件ハ速ニ手ヲ下サルヘキノ重事ト存候、十三二日ク、五港開市場ノ制度變更アリ度事ナリ、如何

ントナレハ、旧政府ノ失欠ヨリシテ悉ク彼ニ担当セラレシ法ニテ、国威ヲ失ヒ損耗トナレルコト数フルニ違アラス、能ク〳〵精調シテ變更アラマホシキ事ナリ、十四二日、市中家税ハ速ニ允許セラレ度候、十五二日ク、浪華貨幣製造局ハ西洋各国ニモ誇ルヘキ程ノ美局ナリト、之レ甚タ無用ノ事ナレハ、製造ノ速ニ調フヲ專要トシ、仮成ノ局ニシテ早く正貨幣ヲ製造シ、楮幣並贋惡ノ金銀幣曳替相成度、贋金偽札ハ畢竟政府之不縮ヨリシテ人民ノ疾苦トナリシ訳ナレハ、此涯府藩県毎ニ仮リニ改局ヲ設ケ、悉ク印章ヲ記シテ差支ナク通用作セテ可ナラン乎、伝聞ク、近頃支那ニ於テ贋札六百万円程拵ヘタル者共アリシカ、之ヲ縛シテ改メ所ニ繫キ置キ、札ニハ総テ印章ヲ記シ差支ナク通用サセ、其輩ハ六百万円ノ償ヲ出サセ、足ラサルハ所持ノ田園家財或妻子等ヲ奴婢ニ改局ニ仕役シ、其償銀ハ一年間官ニテ転回シ利足ヲ取り、而シテ改メノ印章ヲ記シタル札ノ分僅一年半ノ後悉ク皆曳替ト、其罪人ハ曳替濟ノ上極刑ニ処シタリト、一時已ムヲ得サルノ時ニ中テハ、民ノ疲弊困窮ヲ救ニハ面白キ法ト存候、十六二日ク、函館脱走榎本釜次郎(武徳)・永井玄蕃(尚志)・松平太郎其他ノ

輩寛宥之御処置速ニアラマホシク候、函館平定ノ前期  
総督府ヨリ説諭使ヲ立ラレシニ、初テ

朝廷至仁之御趣意拜承シ、降伏謝罪セシ由、就テハ御  
説諭ノ一事ヲ以テ初ヨリ寛宥アルヘキハ勿論ナリ、若  
シ之ヲ極刑ニ処セラル、トキハ、御詐謀ヲ以テ誘降セ  
ラレタルニ似テ、恐ナカラ御不体裁ト云ヘキナリ、速  
ニ宥罪之御沙汰アリ度事ニ候、十七ニ曰、当今刑部省

東京府等ニ留置レシ軽重ノ罪人死刑以下ノ者ハ、大赦  
ヲ行ワレ度事ニ候、十八ニ曰ク、卿・大輔等之重官其  
当ヲ得サル公卿方或ハ旧諸侯等ヲ置ル、甚不体裁ノ第  
一ニシテ、事ノ挙ラサル基ナレハ、旧習ヲ一変セラレ、

貴賤ニ拘ワラス材器能芸ヲ以テ御登用アラマホシキ事  
ニ候、十九ニ曰ク、官員ノ数ヲ減シ俸禄ヲ増スニアリ、  
中ニモ判任以下ノ諸宦ハ禄ヲ増シ員ヲ減スル、之レ諸  
事速統スルノ本ナリ、二十二ニ曰ク、邪宗禁制今一層嚴

確ニアリ度、就テハ同シク外国ノ教法ナレハ、仏寺モ  
我藩ノ如ク一掃洗滅シテ外国ニモ布告シ、邪教侵入ノ  
大禁確立セラレ度候、之レ我 皇国宇内無比肩君臣之  
大義名分ヲ存シ、国体堅立ノ一大業ナレハ、少シク事

挙リシ日ヲ俟テ御施行ノ手ヲ下サレ度事ニ候、二十一

ニ曰ク、鉄道製造ハ先此涯御止相成度、其訳ハ即今大  
蔵疲弊窮民救助サへ御存分不被為調場合ニ、如何ニ開  
化ヲ好ムトハ申シナカラ、目前国民餓飢ノ苦ヲ放擲シ  
テ巨万ノ費用ヲ為ス、之レ先未緩急軽重ノ序ヲ失セラ  
ル、トハ此等ニ可有之ト存候、  
右二十一日ハ僭踰之愚存拙考ニ御座候、誠惶頓首再拜、  
明治四年辛未二月日 市來四郎廣貫 奉

右久光公へ家令伊集院九郎ヲ以テ奉  
ル、其前内田政風子へ及談合タリ、

### 二六 官制官等表ノ案文

神祇宦

諸陵寮

太政宦

式部寮雅樂寮  
ヲ兼 彈正寮

弁宦 上議院

民部省左右京府

寺院寮 戸籍寮

駅通司 開拓司

圖書寮

制度寮弁官又ハ各省ヨ  
リ兼モアルベシ

土木司工部  
司兼

鉾山司

庶務司

下議院

地理司

以上二宦七省

生産司 産業教授ヲ兼

病院 盲啞孤獨四院兼

幼院 今設クル所ヲ上条兼シテ可ナラン(改革)

一宮内卿ハ参議ヨリ兼下条ノ如シ

貧院 以テ之ニ充ツ

大蔵省

造幣司

監督司

租税司

一同大丞少弁ヨリ兼

出納司

神祇宦

兵部省

海軍局

陸軍局

造船局

伯一名 大副一名 少副二名

造兵司 大小砲ノ製造并火薬製造兼

武庫司

海軍兵学寮

大祐四名以下ノ官従前

刑部省

會計司

海軍兵学寮

陸軍兵学寮

大納言兼彈正尹二名

宮内省

皇太后宮 春宮職

囚獄司

内膳司

参議兼彈正大弼兼八省卿八名 每一省一關係

舍人寮 御殿兼

皇后宮職

内膳司

大弁兼彈正少弼二名

外務省

文書司

内膳司

内膳司

中弁兼彈正大忠四名

大学校

国学校

漢学校

洋学校

少弁兼彈正少忠八名

医学校 右五課二分ツノミ、更ニ分隔スヘカラス

剣法学校 府藩県諸学校大ニヨリ管轄ス

大巡察

少巡察

少疏

以下ノ宦従前

八省之大輔各八名

同少輔每省各二名

同大丞每省各四名

同少丞每省各六名

大藩知事兼神祇大副參議八省ノ卿

中藩同神祇少副兼八省之大輔

小藩同神祇大祐兼八省之少輔 下条ノ如ク五万石又ハ三万石以下ノ知事ヲ司、又ハ大中小領トスルトキ

ハ、俸給ハ相当表ニ就テ賜ヘシ、屬吏モ之ニ準ス

大藩大参事兼八省之大丞

中藩同兼八省之少丞

小藩同兼八省之權少丞

大藩權大参事兼八省之少輔

中藩同兼八省之大丞

小藩同兼八省之少丞

以下官等表ニ準シテ階級ヲ定ムヘシ、尤従前人員ヲ

減スルノミ、

府知事兼神祇大副參議八省之卿

。東京ノ大輔　。西京大輔　。北海道ハ渡島守  
。攝津守　。長崎ハ肥前守　。奥州ハ陸奥守

同大参事兼八省之大丞

同權大参事兼八省之少丞

知臬事兼八省之大丞

同權知事兼八省之少丞

同大参事兼八省之權少丞

海陸軍大将相当大納言海軍ヲ以首トス

同中将相当參議同

同少将相当大輔同

同大佐相当少輔同

同中佐相当大丞同　大隊長

同少佐同　少丞同　教導教佐

同大尉同　權少丞　小隊長

同中尉同　從七位　半隊長

同少尉同　正八位　分隊長

同曹長同　從八位相当　什長

同權曹長同　正九位相当　伍長

同權曹長同　正九位相当　伍長

一等兵士相当從八位

東西京府實屬並各藩士族以上ノ兵士功勳能去アル者階級ス

二等兵士相当正九位

三等兵士相当從九位權曹長ニ充ツ

四等兵士相当大初位

五等兵士相当中初位

六等兵士少初位

五等兵士ハ學校兵士・員外兵士、或俗務省掌等東西

京府貫屬並各藩卒族ヲ以テ之ニ相当ス、功勳ニ由テ

階級ス、

一各藩士族非役ノ者ハ、大中少初位相当職務ノ高下ニ從

テ階級アルヘシ、

一大中藩知事ノ名ヲ改テ守・介ノ字名ヲ下スベシ、

假令ヘハ尾張守兼神祇大副

参議八省之卿

假令ヘハ一國ニ四五名・六七名、藩アルトキハ高ノ

多少ヲ以テ守・介ヲ分チ、假令ヘハ守、次ハ權守ト

シ、其次ヲ介トシ、其次ヲ權介トシ、其以下ハ支配

郡ノ名ヲ以テ日向宮崎郡司、イツレモ郡司ノ名ヲ以

テスヘシ、或大領ノ名モ可ナラン、

官祿表

正一位一年ノ給金 三万兩

現石一千二百石一石ノ時備八兩賦  
ニシテ九千六百兩

從一位 二万兩

正二位 一万五千兩

從二位 一万兩

正三位参議并卿 八千兩

從三位大輔并大弁 七千兩

正四位中弁并少輔 六千兩

從四位少弁并大丞 三千五百兩

以上勅任

正五位權大丞并頭 三千五百兩

從五位 三千兩

正六位 二千五百兩

從六位 二千兩

以上奏任

正七位 一千兩

從七位 八百兩

正八位 七百兩

從八位 六百兩

正九位 五百兩

從九位 四百兩

大初位 三百兩

一千石八千兩

八百石六千四百兩

七百石五千六百兩

六百石四千八百兩

五百石四千兩

四百二十石三千三百六十兩

三百四十石二千七百二十兩

二百七十石一千七百六十兩

二百石二千六百兩

百三十石一千四十兩

八十五石六百八十兩

六十七石五百三十八兩

五十石四百兩

三十三石二百六十四兩

二十六石二百八兩

二十石百六十兩

中初位

二百兩

少初位

一百五十兩

以上判任

一 少初位以下省掌等ハ等外トシテ階級ヲ定メ、給祿ハ百

五十兩以下一百兩ニテ止ル、中ニ就テ海陸軍ノ官員兵

士ハ俗務ト同位ナリト雖モ、給ヲ増スヘシ、兵ハ愛重

スヘキ者ナレハナリ、給養モ多キヲ要ス、

一 等外使部其他ノ卑職ハ、等ヲ立俸給ノ多少ヲ定ムヘシ、

一 俸給米俸ノ割定価ヲ以テ金俸トスヘシ、三年毎ニ時価

ニ随テ変改スルモ可ナラン乎、然シ米価格別高低ナケ

レハ動スヘカラス、

一 俸祿ハ増シテ人員ヲ減スルヲ要ス、

一 每宦每省人員ヲ定メ、容易ニ増スヘカラス、人員ノ多

キハ雑踏不連続ノ基ナリ、

一 每宦每省毎局ノ宦祿其他入用ヲ定額シ、容易ニ増スコ

ト勿ラシムベシ、臨時ノ用途ハ各省ノ議裁ヲ經テ而シ

テ其用ニ充テシムベシ、

一 出仕ノ祿ハ本宦三分ノ二ヲ賜フベシ、

一 上院ハ華族又ハ各省ノ宦員中ヨリ択ンテ充ツヘシ、

一 下院ハ各藩士族中ヨリ択挙スベシ人員五万人位一人ノ割ヲ以テ議員ヲ出スヘシ

一 彈台ヲ太政官ニ兼宦スルハ権政府ニ歸スヘシ、政府權

ナケレハ維持ノ柄ナキヲ以ナリ、

一 宦員ノ多少ハ事務ノ多寡ニ随テ定ムヘシ、成ルヘク少

キヲ要ス、

一 各藩各県ヨリ宦員ニ徵スルハ、其人表能芸等知事ニ問

テ、而シテ命セラルヘシ、不可ナルヲ云フトキハ用フ

ヘカラス、非常ノ人材ハ出格ノ命勿論ナリ、

一 草高石(マ)以下ノ藩ハ県又郡トシ、從來ノ知事ハ其司又大

領トシ、給祿ハ十分一ヨリ三四分ヲ増スヘシ、其藩士

ノ給俸ハ位階ニ給ルベシ、

但此涯三万石以下ヲ改革スルモ可ナラン乎、年ヲ追

テ五万石ニ及シ、或九万石余十万石内ニ及スノ順

序アルモ可ナラン、

一 治務ノ宦員ハ減スルヲ要シ、軍務ト雖モ兵士ノ外俗務

モ同少キヲ要シ、兵士ハ増殖スルヲ目的トスヘシ、

一 制度寮ハ国法刑律ヲ議シ、和漢洋ノ法ヲ取捨折衷スル

ノ要務ナレハ、此涯其人ヲ択ンコトヲ要ス、

〔表紙〕

忠義公史料 明治四年三月

二七 島津久光病ニヨリ、代リテ島津忠義上京

スルコトヲ達ス

明治四年三月五日、久光公病アリ、忠義公代リテ東上アルベシト達セリ、

〔記〕

久光公勅ニ応シ上京奉答アラントセラレシモ、宿疾癒ヘス、玆ニ於テ忠義公代リテ上京アルベシトノ事ニ定リ、之ヲ藩内ニ達シ、尚人ヲ東京ニ上セテ、之ヲ朝廷ニ請ハレタリ、

〔按〕久光公疾快カラス、忠義公代リテ上京ノ事ニ定リ、  
〔マコト〕  
ヲ上セテ大久保ニ謀ラシム、大久保周旋其請ヲ允サル、然レトモ忠義公上京ノ事ハ、已ニ決セラル、所アルヲ以テ、前後之ヲ公布セラレタリ、

一先般

勅使御下向

從三位様

宸翰御拝戴

御召ニ付、御病体御勉強、当春中闕下ニ

御拝趨可被遊旨御請被仰上置候処、未御順快ニ不被為

至候付、当秋迄御猶予御願、

從四位様御事、

從三位様へ被為代、

天恩御拝謝之為、来廿五日御発途御上京被遊筈候、此

旨一統へ可申渡候、

辛未三月

知政所

【参照一】

大久保利通日記四年三月

十六日

一今朝安場子入来、吉井子入来、昼后訪吉井子、今日松



〔頭註末〕氏名編ヘノコト  
元子藩某着、川村子同道ニテ入来、從三位公御所勞不  
宜、知事公代ニテ御出ノコトヲ奉命、伺書差出答也、

十七日

一今朝岩公江參上、藩〔忠義公代リテ〕ノコト相願候、九字參  
朝、今日退出后西郷子入来、

【参照一】

西郷吉之助

右は今般就

御上京御供被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未三月九日

知政所

二八 藩庁廣澤參議刺殺者搜問ノ勅命ヲ伝達ス

明治四年三月十日、藩庁廣澤參議刺殺者搜問ノ勅命ヲ伝  
達セリ、

一今九日曉、何者共不知廣澤參議邸江忍入、同人江深手  
を為負逃去候趣達

天聰、深く

御宸怒被為 在候、就ては府下は勿論近傍地方官ニ於

テ嚴密遂探索、捕縛可致旨

御沙汰候事、

但諸官員・宮・華族家人陪從之者并府藩具士族卒及

私塾生徒、其他末々ニ至迄一々遂吟味、昨夜より外

出之者刻限・行先キ等委詳取糺し早々可申出候、

万一隱置、後日露頭に及候ハ、主宰之越度たる

へく事、

辛未正月

太政官

別紙之通從

朝廷被仰渡候条、不審之者入来候ハ、留置、早々当局

江届申出候様可被申渡候、以上、

辛未三月十日

糺明局

二九 藩兵一隊親兵トシテ乘船東上ス

明治四年三月十一日、藩兵一隊親兵トシテ乘船東上セリ、

(記)

三月十一日・十二日、藩船豊瑞丸・寧静丸ヨリ藩兵五

小隊發途東上セリ、大隊長種子田左門政明之ヲ率フ、

【参照一】

寺師宗道日記三月

同十一日 晴

種子田左門・田實善之助明朝八時ニ豊瑞丸より出帆之筈也、暇乞ニ被來候、此艦へ五小隊乗付之筈也、昨夜徳尾直次所へ今日出立之祝ニ參候由、今朝帰ル、日笠老本取入六貫三百文也、隈岡壯介今晚、出立ニ付暇乞ニ參候、例式祝酒寄合候、夕過より市來英之丞も参り立之祝候、夜更迄賑々敷候、明朝六ツ時揃にて七ツ半時分皆々出立、軍務局揃にて六ツ半時分繰出にて候由故、曉種子田左門・田實善之助江暇乞ニ到ル、杯吸物一ツにて帰ル、夫より市來氏へ参り英之丞立候、

同十八日 曇

出席ス、出掛兵学寮へ到ル、西尾金次郎雛形作り見分ス、田原陶吉より聞ク、近日長崎へ亜国軍艦拾艘入津之由、朝鮮ヲ撃之手当と云々、細事未分、今朝感通丸へ砲隊一座分人数乗舟出帆之由也、夜入時分より木脇次郎右衛門入來続相咄也、

【参照一】

道島日記

三月十一日

一四大隊大挙出兵、

但

三番隊二月中当番ニテ、先キニ出兵被仰出、仲八杯ニテ此節一番小隊ヨリ三番小隊迄被差出、豊瑞丸・寧靜丸ヨリ被遣十一日・十二日出兵ニテ候事、

但 十七日ニ着ノ由、三月廿五六日方説ニテ候事、

三〇 藩庁吏員更遷期限延長ノコトヲ達ス

明治四年三月十一日、藩庁吏員更遷期限ヲ延長スルコトヲ達セリ、

一当三月中ニは諸吏更遷期限之処、第一御上京且兵隊も御親兵之 御沙汰ニ相成、其俣被差出候付、今一期限西三月迄諸局共当分之通被召置候条、向々江可申渡候、本文ニ付、廢官御養料米被下置候面々は、四石ツ、被成下候旨、一月三日御布告相達候事、

但

冗員相重居候分は、追て 御沙汰可有之候、

三月十一日 知政所

(記)

二年二月藩制変革ノ際、諸吏留任滞職長キニ過ルトキハ、人才擢用ノ途ヲ塞キ、弊習紛出スルノ憂アルニ由リ、毎二ケ年ヲ期シ更撰一新スルノ制規ヲ立テタリ、即チ本年本月ハ恰モ其期限ニ際会スルモ、藩知事上京、親兵発途等ノ為メ之ヲ断行スルヲ得ス、故ニ一期限ヲ延セシナリ、

磨官養料ハ六石ヲ給付セシモ、尔今ハ四石ヲ給スベシトナリ、

### 三二 藩庁心付金給与ヲ停メ褒賞ヲ行フヲ達ス

明治四年三月十二日、藩庁心付金ノ給与ヲ停メ、別ニ褒賞ヲ行フコトヲ達セリ、

一 諸局之内被定置候季禄被成下候上は、最初よりの御規定通、御心附銀は不被成下候、且嶋方為引替御金被下候儀も、以来一切不相成候、左候て抜群致精勤御用立候者江は、別ニ褒賞之典可有之候、

右之通被 仰付候条向々江可致布告候、

辛未三月十二日

知政所

### 三三 諸郷兵員ノ紀律ヲ振肅シ兵氣ヲ奨舞ス

ヘキヲ達ス

明治四年三月十四日、諸郷兵員ノ紀律ヲ振肅シ、兵氣ヲ奨舞スヘキコトヲ達セリ、

一此節為

御親兵兵隊被召出候付ては、追々諸郷之兵隊も同様被召出場合ニ可立至、夫のみならず事ニ依ては出兵被仰付儀も可有之候付、愈士氣振起いたし、隊律嚴肅相調候様、一涯勉励可有之候、就中地頭之儀は何篇御委任之職掌ニ候得は、兵隊引立之儀も尚更相励、実地之効驗相立候処、一向可相動候、依時機兵隊御繰出相成候節は、大隊長之場を以可差出候付、兼て其心得を以練兵之儀も可相貫候、右ニ付ては時々軍務局へも致出席、兵士引進之儀は勿論、御手当向等之儀も得と遂吟味、一定いたし候様可取計候、

右之通被仰付候条、軍務局并地頭江申渡、可承向々江可申渡候、

辛未三月十四日

知政所

(按)三藩連合成り、親兵徴ニ応スルニ至リシハ、漸次

國勢改革ノ深謀アリ、事態不穩ナルニ於テハ、兵力ヲ以テ四方ヲ制スルノ方策決シタルニ由リ、専ラ兵ヲ練リ、カヲ養フニ至レルナリ、

### 三三 藩庁会計局藩吏俸禄受取方手続ヲ告示ス

明治四年三月十五日、藩庁会計局藩吏俸禄受取方ノ手続ヲ告示セリ、

一軍治諸官俸禄払方ニ付、当四月より別段改て俸禄帳被相渡候付、米穀掛出納方より相請取候上は、各月割之俵数等写取扣置候儀は人々勝手次第にて、右俸禄帳之儀は居所相記、始て米蔵江差出候ハ、其俵出切にて、月々御払米相濟次第ニは都て御蔵格護相成居候条、自然届米遅延且俵数等相違之儀も候ハ、米蔵出張出納奉行江形行申出候様被仰付候、左候て転職・名替又は死失等にて、暫時俸禄帳不相受取候て不叶節は、其訳筋書付を以て右出納奉行江申出、相受取候儀は其通にて、其内転職等にて又々右俸禄帳相渡候ハ、本之通米蔵江可差出置候、且又右帳面を以金錢取替之向有之、余人江御払米引渡候約定之人は、是又形行届先等、双

方より同様申出候様被仰付候条、御城下在職之面々江告諭可致置事、

辛未三月十五日

会計局

### 三四 藩庁諸郷地頭居所指定ヲ停メ宜ニ任ス

明治四年三月十八日、藩庁諸郷地頭居所ヲ指定セシヲ停メ、尔今管轄内所在便宜ニ任スルコトヲ達セリ、

一諸郷地頭之儀、管轄内居住所被定置候得共、何方迎も差別無之事候付、以来は居住所不被定置候条、地頭江申渡、向々江も可申渡候、

辛未三月十八日

知政所

### 三五 藩庁区内郷校ヲ設置シタルコトヲ達ス

明治四年三月十九日、藩庁区内郷校ヲ設置シタルコトヲ達セリ、

#### 一第一郷校

右は高見馬場方限郷校、右之名目ニ官校被召建、本学

校管轄被仰付候条、可承向江も可申渡候、

辛未三月十九日

知政所

(記)

先ニ二小学校ヲ設置セシモ、中央各区ノ校舍ニシテ、未タ区内ノ設置ナカリシナリ、高見馬場トハ下方限ノ一区ニシテ、始メテ郷校ヲ設置シタリ、尔後漸次各区ノ校舍ヲ建ルニ至レリ、

三六 藩庁島津忠義本学校外二校試業臨閱ノコ

トヲ達ス

明治四年三月十九日、藩庁忠義公本学校外二校試業臨閱アルコトヲ達セリ、

一從四位様明後廿一日四ツ時、御供揃本学校并小学第一

校・同第二校江被為入、試業

御覽濟之上被遊 御帰殿筈候、此旨向々江可申渡候、

辛未三月十九日

知政所

三七 藩庁城下警備ニ外城兵隊更番衛戍ヲ達ス

明治四年三月二十日、藩庁城下警備ニ外城兵隊更番衛戍ヲ達セリ、

一今般

御城下常備隊 御親兵被仰付、外城兵隊之内より別冊繰順之通、御城下番兵被仰付候条、軍務局并諸郷地頭江申渡、可承向々江も可申渡候、

辛未三月廿日

知政所

一外城常備大隊(組合)

第一

南方

一小隊

阿久根

一小隊

宮之城

一小隊

(串木野野田)

一小隊

加治木

一小隊

出水

一小隊

平佐

一小隊

岩川

一小隊

第二

東郷

一小隊

(須松)	上三俣	今和泉	第四	下莊内	(敷)	加治木	吉利	隈之城	(山)	重富	串木野	第三	水引	高尾野	大崎	知覽	(栗)	垂水	伊集院
木山					隈根				山崎								牟田		
一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊

加治木	(大)	飯野	出水	田布施	第六	下莊内	(新)	宮之城	平佐	志布志	(横)	高江	伊作	第五	上莊内	(真)	高岡	出水	蒲生
	黒木村						華岡				辺川					加久藤			
一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊

(踊)下三侯	小根占	國府	(東)吉郷	穆利	末吉	伊集院	第八	鹿屋	上莊内	入來	穎娃	垂水	(大)始良	加世田	南方	第七	(大)串根占	蒲生	野尻
一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊			一小隊	一小隊	一小隊

長嶋	小林	(岩)山川	太良	加治木	綾	谷山	高城	第十	川邊	高山	福山	高岡	(牛)市根	吉田	下三侯	佐志	鶴田	第九	財部
一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊	一小隊		一小隊

第十一

樋脇 一小隊

高岡 一小隊

重富 一小隊

勝岡 一小隊

阿多 一小隊

知覽 一小隊

上莊内 一小隊

襲山 一小隊

倉岡 一小隊

綾岡 一小隊

宮之城 一小隊

吉松 一小隊

菱刈 一小隊

末吉 一小隊

下莊内 一小隊

加世田 一小隊

恒吉 一小隊

百引 一小隊

國府 一小隊

山田 一小隊

第十三

櫻島 一小隊

垂水 一小隊

内之浦 一小隊

田代 一小隊

下三俣 一小隊

帖佐 一小隊

加治木 一小隊

高岡 一小隊

下莊内 一小隊

高岡 一小隊

喜入 一小隊

山之口 一小隊

高山 一小隊

永吉 一小隊

吉利 一小隊

指宿 一小隊

加治木 一小隊

出水 一小隊

佐水 一小隊

清水 一小隊

種子島 一小隊

右二ヶ月交代

砲番隊

阿久根 半座

第十四

喜入 一小隊

山之口 一小隊

高山 一小隊

永吉 一小隊

吉利 一小隊

指宿 一小隊

加治木 一小隊

出水 一小隊

佐水 一小隊

清水 一小隊

種子島 一小隊

右二ヶ月交代

砲番隊

阿久根 半座



明治4年(1871)

出 水 半 座

式番隊

加治木 半 座

下莊内 半 座

三番隊

出 水 半 座

高岡 半 座

種子嶋 半 座

右三ヶ月交代

右は此節四大隊・砲隊四座

御親兵被 仰付候付、一大隊・一砲座右之繰順を以

御城下番兵被 仰付候事、

一小銃一大隊

但人員四百式拾四人

一大砲一座

但人員六拾人

一大砲夫卒四拾人

但一小隊五人

一大砲夫卒八人

惣人数五百三拾式人

【参照】

池上四郎日記四年三月日

大隊組合

第一

南方 阿久根 宮之城

加治木 出水 平佐 岩川

第二

東郷 伊集院 垂水 知覽

大崎 高尾野 水引 栗野

第三

串木野 重留 山崎 隈之城

吉利 加治木 高敷 隈根 下庄内

第四

今和泉 上三保 松山 蒲生

出水 高岡 加久藤 上庄内

第五

伊作 高江 横川 志布志

平佐 宮之城 新花岡 下庄内

第六

田布施 出水 飯野 黒木村

加治木 野尻 蒲生 申根良

南方 加世田 始良 垂水

穎娃 入來 上庄内 鹿屋

伊集院 末吉 穆佐 東郷利

國分 小根占 踊下三俣 財部

鶴田 佐志 下三俣 吉田

市成 高岡 福山 高山

牛根 高岡 福山 高山

川邊 高岡 福山 高山

高城 谷山 綾 日置

上庄内 太良 岩山川 小林

長島 第十一 榎脇 高岡 重留 阿勝岡 綾倉岡 種子島

宮之城 吉松 末吉 下庄内

加世田 百引 國分 山田

櫻島 第十三 垂水 田内之浦 下三俣 帖佐

加治木 高岡 下庄内 龜島

喜入 山之高口 永吉 指宿

加治木 清水 高原 種子島

右二ヶ月交代 砲一 阿久根 出水

第二 加治木 下庄内 第三 出水 高岡 種子島

右半座ツ、 右三ヶ月交代

三八 藩庁諸吏ノ減俸ヲ二ヶ年延期スルヲ達ス

明治四年三月二十二日、藩庁諸吏ノ減俸ヲ二ヶ年延期スルコトヲ達セリ、

一在職之面々、去夏俸祿差上度追々願出趣有之、其通ニは難被仰付、乍然會計道難涉旁不被為得止、去七月より当三月迄諸官之俸米減少被仰付置候処、

御上京且 御親兵等被差出御費用も不少、未會計道充備之場合にも至兼候付、来ル西三月迄は、是迄之通減祿被仰付置候条、向々江可申渡候、

但大隊長并教頭・教佐俸祿之儀は、去年九月依願減

祿被 仰付置候通ニ候、

辛未三月廿二日

知政所

三九 南校教師ヲ刃傷シタル本藩人肥後壯七外

二名ヲ処刑ス

明治四年三月二十七日、南校教師ヲ刃傷シタル本藩人肥後壯七外二人ヲ処刑セリ、

(記)

三年十一月二十四日、東京南鍋町ニテ南校教師英國人二人ヲ刃傷シ、逃レ去リテ其所ヲ得ス、英國公使パー

クス嚴談ヲ極ム、政府頗ル之ニ困惑ス、仍テ令ヲ全国ニ下シテ嚴ニ之ヲ搜捕セシム、此月終ニ發覺捕ニ就ク、本藩國府郷士族肥後壯七・杵築藩士加藤龍吉・關宿藩士黒川友次郎ノ三人ナリ、訊鞠シテ其実ヲ得タリ、然ルニ擬律ニ当リテ英公使之ヲ論難シ、談判甚タ困ム、然レトモ刑部諸官固ク定律ヲ主張シテ曲ケス、此日新律綱領ヲ英公使ニ贈リテ、其擬律ヲ了知セシメ、遂ニ加藤・肥後二人ヲ絞、黒川ヲ准流十年ニ処シ、<sup>(マ)</sup>ニ処スルニ至リ其局ヲ了セリ、更ニ本令ヲ發シテ一般ヲ戒飭シタリ、

(按)

従前士分ノ処刑ハ、屠腹ヲ命スルノ例多シ、堺市佛國事件ノ如キ然リトス、此時英國公使ハ処刑ノ当ヲ失スルコトヲ論シ、佛國公使ノ罪人トシテノ処刑ヲ求メス、日本ノ国風トシテハ、名譽ナル屠腹ヲ行ハシメタルコトヲ非難シタリ、今回リング・タラス兩人刃傷事件ニ對シテ、其処分ノ輕重ヲ論難シテ止マス、論判頗ル困ム、然レトモ一旦外國人ヲシテ容喙ヲ許ストキハ、國体立タス、後來ノ惡例ヲ流スニ至ルベキヲ以テ、新律綱領ヲ制定シテ之ヲ英公使ニ贈リ、其擬律ニ拠リ裁断

ヲ下スニ及ヘリ、茲ニ英國公使巴厘斯伝ノ一節ヲ撮録シテ参照ニ資ス、

英國人教師二名、東京日本橋附近ニテ三名ノ士人ニ重傷ヲ蒙レリ、日本政府ハ最モ熱心ニ搜索ヲ為シ、直ニ之ヲ捕ヘテ囚獄ニ投シタリ、而シテ此件ニ関シテ、日本歴史アリシ以降初メテ新撰ノ刑典ヲ發布シ、其照律ニ基キ各々重罪ニ処シタリ、

【参照】

大久保利通日記三月

廿一日

一五字参 朝、肥後壯七暗殺一条ニ付、外国人談判六ヶシク御評議有之、岩公御行向相成候、退出后訪松方氏囲碁、

廿二日

一今朝五字参 朝、肥後一条六ヶシク、尚又 岩公公使館へ御出有之候、退出ヨリ一同刑部省へ出席、今日肥後、鍋丁ニ於テ外国人ヲ一刀殺害ニ及候段及白状候、誠ニ安心之至也、四字退出、松方子入来、

廿三日

一九字参 朝、安場面会、佐伯ノコト承ル、今日尚又黒

川・山口首従ノコトヲ議セラル、刑部モ少輔以下出席、愚存ニハ云々申述ル、二字退出、小西郷子入来、

〔廿四日・廿五日省略カ〕

廿六日

一今朝九字ヨリ小西郷子入来、吉田子・吉井子も入来、海江田子一昨日出府ニテ入来、

一岸良子・刑部・黒川・山口首従ノ論ニ付、英公使異議申立、談判甚六ヶシクト存候付、若外国ノ為ニ法ヲ枉ケ候様成行候テハ夫限ノコトニ付、此ニ至テハ刑部ニ於テ一死ヲ投テ尽力ノ者ナクテハ不相濟ト思込、既ニ今日澤大丞迄談置候旨ニテ、尚相含クレ候様承ル、実ニ同人如此ノ断決有之候コト感伏ノ至ニ堪ス、今夕宿直ニテ六字ヨリ参朝、

四〇 藩庁忠義上京ニ付神社参詣ノコトヲ達ス

明治四年三月二十二日、藩庁忠義公上京ニ付、諸神社参詣アルコトヲ達セリ、

一明廿三日巳刻

御首途ニ付、御対面所より御楼門 御出、八坂神社・

諏訪社

御参詣、引続 稻荷・若宮・春日江

御参詣、夫より 鶴嶺神社・照國神社江

御参詣、御出口之通被遊 御帰殿管候条、向々江可

申渡候、

辛未三月廿二日

知政所

四一 藩庁大山綱良日田県出張ノコトヲ達ス

明治四年三月二十三日、藩庁大山格之助日田県出張ノコトヲ達セリ、

一 大山格之助

右は急速之御用有之、日田県江往來急にて被差越候条、向々江可申渡候、

辛未三月廿三日

知政所

(記)

長州ノ逋逃浮浪ノ徒嘯集、地方ヲ騷擾セリ、先ニ四條按察使出任アリテ鎮撫セシモ、再ヒ警ヲ伝フ、仍テ本藩其他ニ出兵鎮撫ヲ令セラレタルニ由リ、予メ大山ヲ派遣シテ視察セシメシナリ、

【参照一】

寺師宗道日記四月

同二日 雨天

前略之

比日筑後久留米藩へ浮浪輩千人屯集して、勤 王申立、頻りニ藩士ヲ引入、肥後・熊本藩杯も是ニ引合居候由にて、窃ニ彼藩より鎮静方依頼ニ相成り、先日大山格之助差越候由、右之模様ニより若浪士共強情之勢ニ候ハ、一左右次第外城兵隊繰出相成り、討方ニ及候由、昨日方兵隊乗舟、米国艦老艘、外ニ阿波舟一艘、都合三艘前濱へ入津ス、

【参照二】

道島正亮日記

一三月廿五六日方ニモ候半、大山格之介豊後日田表へ被遣候由、年内屯集イタシ居候長州ノ兵隊、其外浪人共ニテ候半、混雜之儀有之、此方へ注進相成、聞合トシテ被遣候ヨシ、模様次第第二ハ兵器隊被遣管之由、四月七日迄ハイマタ為何事モ不相知由、

但

筑後久留米ニ諸困浪人屯集イタシ居、藩知事モ取抑方不相調、却テ追出サレ候程ノ勢ニテ候ヨシ、

イマタ委敷事ハ不相知候、

四月六日記置候事、

#### 四二 久留米藩騷擾ニ付藩兵ヲ派遣セラル

明治四年三月十三日、久留米藩山口ノ逋逃ヲ匿シ乱ヲ謀ル、命ニ由リ藩兵ヲ派遣セリ、

(記)

三年二月、長州奇兵隊ノ變動アリ、逋逃、豊後日田・筑後柳河辺ニ潜匿シ、本年ニ及ヒ頻ニ攘夷改革ヲ主唱シ、危激ノ論ヲ以テ人心ヲ煽動シ、浮浪ノ徒之ニ応スルモノアリ、是ニ於テ、四條隆謨ヲ按察使トシテ日田ニ派遣シテ鎮撫セシメタリ、然ルニ本年二月ニ及ヒ魁首大楽源太郎等久留米ニ潜居シ、藩吏ト通謀スルノ状ヲ得タリ、茲ニ於テ更ニ巡察使ヲ遣シテ、之ヲ鎮撫セシメラル、然ルニ其状ヲ得ルニ從ヒ、藩吏挙テ之ニ通謀スルノ情アルヲ以テ、本月十日藩知事有馬頼咸ニ謹慎ヲ命シ、権大参事吉田某ヲ免セリ、同十三日遂ニ大参事水野正名、権大参事小河真文・澤之高ヲ捕フ、魁首大楽等逃逸シテ往ク所ヲ知ラス、同二十四日巡察使

ハ、参謀井田讓ニ兵一中隊ヲ率キ久留米藩ヲ監セシム、全二十九日藩士等大楽兄弟ヲ匿セシカ、其発覚センコトヲ恐レテ密ニ之ヲ殺セリ、

寺師宗道日記四月

同五日 雨天

泊り明ケ也、当番宅万伴助へ次渡ス、昨日松岡直左衛門・伊勢十郎掛兵器奉行被仰付候、久留米江抛ル浪人之事六ヶ敷説也、追々藩より使者来ルト云フ、薩之大隊神奈河へ着之折、既ニ浪人共攘夷策ヲ立、横濱ヲ焼払東京ニ迫り侵シ、若事ナラサルトキハ、奥州へ引取要地ニ抛ル之謀計、且筑後九州ニも起リ薩ヲ伐之との計議、其為彈藥・小銃等は用意いたし居候由、然処薩之兵隊十七日着相成候処、之ヲ聞諸所屯集之浪人共悉く立去り候由、又横濱ニても七八人召捕相成候由、静岡藩及び肥後杯も与之由聞ク、何分大變之事状也、東京之内魁首アルヘシ迎探索敵之由也、明早天ニ番大隊出航之筈也(六日省略カ)

同七日 晴

今日も火薬積入、四ツ前より津畑へ出役ス、兒玉彌右衛門・松岡直左衛門・拙者也、亜国舟へ乗ル通弁嘶ニ、

東京之事浪士共窃ニ

主上ノ御遷幸ヲ謀リ候由、肥後・久留米其外諸藩之内より党徒多候由、彈藥等之用意は安房ニ備へ置候由、

久留米知事ニは国元ニテ謹慎之上閉門被仰付候由、又久留米表ニテ長州・肥後繰入相成候由、高良山へ長州陳宮相成候由、東京より四條卿総督出張相成り、此藩よりも兵隊被差出候賦、一左右次第と云々、尤柳川へ繰込之筈候由、又久留米大参事水野何某召捕相成り、豊後日田ニテ糺弾之由也、朝廷役人ニも与徒之者多かるべしと云々、七ツ過仕舞帰ル、硫黄嶋氏より荒土差贈り生産方より受取候、隣加納直右衛門明後九日出立候付、祝ニ夕方より至ル、東京より書状届ク、英之丞状ニ豊瑞丸十八日ニ神奈川へ着、同廿日神田邸へ着之由、近日より尾州邸へ移陳相成候由也、

四三 藩庁島津忠義上京発途ノ延期ヲ達ス

明治四年三月二十四日、藩庁忠義公上京発途ノ延期ヲ達セリ、

一 明廿五日被遊 御発駕筈候処、

御召船不致廻着候付、御延引ニテ、

御召船廻着之上御日限被

仰達候条、此旨一統江可申渡候、

辛未三月廿四日

知政所

四四 朝集ノ知藩事ニテ満期ノ者ノ帰藩ヲ許ス

明治四年三月二十七日、朝集ノ知藩事其期既ニ満ル者ハ便宜帰藩ヲ許サル、

一朝集之知藩事、三ヶ月在京之期限相満候ハ、翌月二

日第十字一同参 朝

天機相伺候上、勝手ニ帰藩可致候事、

辛未三月

太政官

四五 各藩ニ賈札改所ヲ設ケ提理ヲ嚴ニセシム

全日、賈造紙幣鑒識ノ者ヲ諸藩県ニ派遣スルヲ以テ、各藩モ亦改所ヲ設ケシメラル、

〔第百五十六〕三月二十七日(布) 藩々へ

諸県へ賈札鑑定ノ者追々被差遣候処、地方ニ寄りテハ

改方不行届ノ向モ有之、難渋ノ者不少趣ニ付、各藩ニ於テモ改所相設、嚴重取締可致事、

四六 英人教師ヲ刃傷セシ者ノ処刑ヲ通達ス

一去冬十一月廿三日夜、東京神田鍋町ニ於テ、英人ニ傷ケ候者有之、嚴密御搜索召捕、今般別紙之通御処刑ニ相成候、元来外国御交際は重大之儀ニ付、屢御布令相成候処、右様之次第有之候ては、御政体ニ關係シ、御国辱ニも相成候条、尚又府藩県管内末々迄、心得違無之様取締可致候、

辛未三月

太政官

(別紙ナシ)  
別紙四通於東京被

仰渡候段申来候条、向々江不洩様可申渡候、

辛未五月

知政所

四七 藩庁養料給与期限ヲ延長スルコトヲ達ス

明治四年三月二十七日、藩庁養料給与期限ヲ延長スルコトヲ達セリ、

一当三月諸吏變遷期限之儀、今一期当分之通被召置候付ては廢官之面々御養料米之儀も、期限通西三月迄世禄五拾石以下是迄之通被下置候、尤是迄四石以上被下置候面々は四石宛被下置候条、向々江可申渡候、

辛未三月廿七日

知政所

四八 藩庁忠義上京ノ趣意並附従心得ヲ達ス

明治四年三月二十九日、忠義公上京ノ趣意ヲ示シ、附従ノ心得ヲ達セリ、

一戊辰以来

朝廷之御規礎不致確定候処、此節厚キ

思召を以、從三位様被為蒙

勅命候得共、いまた御平快不被為 在候付、從四位

様被為代

闕下江拝趨被遊候、就ては

御兩殿様兼て之御赤心相貫、

皇国興隆之大端可開立機會ニも立至り、不容易御場合ニ候間、御供方は勿論一同右之 御趣意奉体し、尽至誠可致勉勵旨 御沙汰被為在候付、各奉得其意無緩怠



可相動候、此旨家令江申渡、向々江も可申渡候、

辛未三月

知政所

(記)

今回ノ上京ハ朝政ヲ改革シ、先途ノ大策ヲ決スルノ声言ニテ、兵員等ニ至テハ、殆ント戦備ノ決意ヲ以テ発途セシメタリ、此ニ於テ尚附役ノ者ニモ、同一ノ決意ヲ含メテ此達ヲ発セシメリ、

#### 四九 藩庁家族養料下賜ノ制限ヲ達ス

明治四年三月、藩庁家族養料下賜ノ制限ヲ達セリ、一奏授以上之官并判授之官ニても世禄五拾石以上、

右家族養料不被下候、

一判授之官ニて世禄五拾石以下、

右家族養料三拾俵、

右は是迄

朝廷之諸官被仰付候面々、世禄百石以下江は、家族御養料米被下来候得共、右は

朝廷より夫々御宛行も有之、殊ニ奏授以上之職は、多分之官禄下賜、家内扶助も可相調候付、尔后養料之制

右之通被相定候条、向々江可申渡候、

辛未三月

知政所

#### 五〇 藩庁産科医ヲ置キ求療ヲ聴スコトヲ達ス

明治四年三月、藩庁産科医ヲ置キ、求療ヲ聴スコトヲ達セリ、

一御藩内産科療術未相開、難産ニて斃候者不少候処、医学校御雇人之教師ウキリス、右之手術器械伝来、此節局中医師鮫島彦齋・渡邊昌齋兩人江産科掛被仰付候間、以来難産ニ罹候者は勿論、産婦療治望之者は病院江申出、教師并右兩人ヨリ可受療治候、此旨向々江不洩様可申渡候事、

辛未三月

知政所

#### 五一 外国人居留地等通行ノ節ハ管轄地方ノ印

鑑ヲ持参スヘキヲ達ス

一北海道へ罷越候者箱館港上陸之節、管轄地方官印相取候上、開拓使員数相渡候間、地方官印持参可致候事、

一諸官員を始メ府藩具士卒ニ至迄、横濱其他外国人居留地関門、自今其管轄所之印鑑ニテ通行可致旨、先達テ御達相成候付、箱館港も同様可相心得候事、

右兩条ニ付照准印鑑、兼テ東京出張開拓使江可差出置候事、

辛未二月

太政官

別紙三通之通於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

辛未三月

知政所

## 五二 劍崎灯台建築ノコトヲ藩内ニ達ス

一今般相州劍崎江灯明台建築、来未正月十一日点火候条、此旨相達候事、

庚午十二月

太政官

別紙六通之通、於東京被仰渡候段申来候条、向々江可申渡候、

辛未三月

知政所

〔表紙〕

忠義公史料

明治四年四月

五三 藩庁南方神社祭式ヲ改正ス

明治四年四月一日、藩庁南方神社祭式ヲ改正シ、祭称ヲ

定メタルコトヲ達セリ、

一南方神社

一四月祭独活祭と名ク、

但祭日は御占伺之上可被相定候、

一七月祭

但先規之通朔日より相初り、廿八日ニは献幣使発遣

被仰付候、

右は当社之祀法、右之礼典を以御改正被為在、頭殿祭は名分ニ不相叶之間、其式都て被廢、在町踊而已は向後も前蹤ニ基キ、於御神前興行被仰付、左候て幣帛等は、此節被召付置候御高之内より奉備候様被仰付候条、社司江申渡、可承向江も可申渡候、

但七月七日御祀之礼は、追て可申渡候、

辛未四月

知政所

(按) 諏訪神社ハ、島津崇祀ノ神ニシテ、五社ノ内ナリ、従前ノ祭式ハ、藩士中家系正シク、家計貧ナル者ノ中ヨリ、十二、三才ノ男子二人ヲ撰拔シテ、之ニ頭殿ト云ヘル祭司ヲ命シ、四月朔日ヨリ社務所ニ移シ、齋戒シテ神事セシム、待養ノ者皆之ヲ崇敬シ、俗ニ生神ト称ヘテ汚濁ヲ禁セリ、社務所ニ要スルノ薪水食料一切、皆之ヲ城下附近二十四ヶ村及櫻島ノ村民ニ課シテ支給セシメリ、七月一日ニ及ヒ祭典ヲ行フ、一日一村ノ順番ヲ以テ太鼓踊ヲ催シ、先ツ神前ニ踊リ、城門外ヨリ藩主ノ各菩提寺ニ及ビ、終日各所ニ踊廻リテ帰村スルノ例ナリ、祭事ノ際ハ兩人ノ頭殿ハ、一人ハ青衣ヲ着シテ、男ニ紛シ、一人ハ紅衣ヲ着シテ女ニ紛ス、神殿ノ側ニ壇ヲ設ケテ踊舞ヲ見ルナリ、此太鼓踊ヲ為スノ

扮装ハ、鼓手ハ白衣ヲ着ケ、二尺径ノ鼓ヲ胸ニ掛ケ、背ニハ丈余ノ竹ニ五六段ノ造花ヲ挿シ、段端ニハ馬毛ヲ垂ルモノヲ中央ニ立テ、両側ニハ五尺余ノ幹鶏ノ黒羽ヲ、三尺許ニ密挿シタル羽毛立ヲ負フナリ、鐘手ハ青毛ヲ着ケ、造花ノ花笠ヲ戴キ、尺許ノ鐘ヲ左手ニ擎ケ、右手ニ鐘木ヲ持シテ、鼓手ト相応シテ、調子ヲ取りテ踊ルナリ、

此踊ノ起因ハ全ク俗習ノミニ仍ラス、旧時農家勸業ノ一助トシテ催シタルモノナリ、四月ヨリ七月ニ亘リテハ、稲作植付後ノ時期ニシテ、農家最モ繁忙ノ時ナリ、然ルニ旧来ノ慣習ニテ、七月ノ踊ハ終年農家ノ最楽事トシテ、始終此踊ヲ立派ニ為シ、本年ハ何村ノ踊ヲ最一トスルノ名評ヲ得ルヲ念願トスルニ由リ、労力費用ヲ厭ハス、他ニ遅レサラソトヲ励メリ、故ニ四月ニ及ヒ田草取ノ期ニ至レハ、終日田畝ニ勞力シ、夜間ハ鎮守社ノ庭又ハ名主等ノ庭ニ集リ、鐘鼓拍子ノ練習ヲ為シ、六月ニ至リテハ、日夜田間ニ出テ、畦途ヲ伝ヘテ練習ヲ行フ、之ニ由リ、一ハ田畝ノ種芸ニ精粗巧拙アルヲ、彼我ノ間ニ示シテ、勤怠ヲ督スルノ一助トナリ、一ハ夏間農家日々ノ労働ニ倦ムノ傾アリ、故ニ之

ヲ奨励スルコトトナリ、一ハ（田カ）間ヲ多人數（ママ）往喧（マヤ）行スルニ由リ、（百カ）然稻虫ノ駆除トナルトノ伝説アリテ、

一種農間ノ奨励トナリテ、其功多シトセリ、特ニ頭殿ヲ置テ之ヲ神ニ擬シ、無智ノ農民ニ神威神徳ヲ感銘セシムルノ妙ニ至テハ、寔ニ味フベキノ事例ナリ、

然ルニ旧弊矯正ノ余勢、遂ニ従前襲伝ノ頭殿祭ヲ停メタルニ由リ、各村モ意氣甚タ進マス、尚太鼓踊ノ催アリシモ、又前年ノ如クナラス、一体ニ粧飾ヲ廃シ、鼓手ノ花矢幡ハ惣テ紙旗ニ換ヘ、之ニ各村土産神氏子ト記シタルモノヲ挿シタリ、其情況前年ニ比スレバ、頗ル冷寥ヲ覺ヘタリ、

#### 【参照】

寺師宗道日記四年七月

同七日 晴

昨日之通、藤崎善平入来候、大河内火薬局一件也、武田上村踊ニて子共見物ニ遣ス、当年ヨリ在踊は、始メ諏訪社改称南江、夫より諸所へ躍候由、花矢幡背ニ挿ス花竿ヲ云フは廢して、スヘテ紙幡ニ其村々土産之神氏子と相記スものを背負、冷水熊次郎来ル、不快、遅通貫珍ヲミル、

五四 工商ノ制限ヲ立テ新ニ税法ヲ設ル等ハ

稟候セシム

明治四年四月二日、工商ノ制限ヲ立テ、及ヒ新ニ物品ニ課税スル者ハ申請セシメラル、

府藩県へ御布告写

地方官ニ於テ、工商之制限ヲ立、或ハ物品取締等之為メ、新ニ収税之法ヲ取設候向モ有之趣、自然区々之取計ニ相成候テハ、民情ニモ差障可申ニ付、自今右様之儀ハ一々可伺出事、

五五 藩庁軍人養俸ヲ従前通支給スルコトヲ達

ス

明治四年四月二日、藩庁軍人養俸ハ、従前ノ通減少ナク支給スルコトヲ達セリ、

一当三月迄御養料被下置候向は、世祿五拾石以下都て四石宛、来々西三月迄是迄之振合を以被成下候段は、別段申渡置通ニ候、然処出軍人数之内廢官等にて、是迄等級を以養俸被下置候面々は、右期限中従前之通被下

置候条、向々江可申渡候、

辛未四月二日

知政所

(記)

四年三月二十七日、廢官者養料支給期限經過シタルモ、諸吏更任期限ヲ延長スルニ由リ、尚従前ノ例規ニ準拠シ、支給スルコトヲ達シタリ、然ルニ軍人ニシテ、従前等級ニ応シテ養俸ヲ給付セシモノハ、仮令等級ヲ廢停スルニ拘ラス、尚二ヶ年間ハ旧等ニ基キ、支給スルノ特例ヲ布キタルナリ、

五六 藩庁會計局各局ノ定員給禄ヲ申供セシム

明治四年四月三日、藩庁會計局従前藩庁諸局役職定員・給禄ヲ申供セシメリ、

一諸局筆者御一新前は、定役何人、助役何人被究置候訳、且当分之人數、銘々俸祿・季祿片書ニ相記、御用見合相成候間、来ル十日限り当局江可申出事、

未四月三日

會計局

五七 藩庁島津忠義名代上京願許可ノ旨ヲ訓達

ス

鹿兒嶋藩知事

島津忠義

弁官御中

明治四年四月三日、藩庁忠義公名代上京願出許可ノ趣旨ヲ訓達セリ、

從三位様為 御名代、

從四位様御上京之儀、御別紙之通御願立被遊候処、御附札之通被

仰出候条、各奉承知候様向々江早々可致通達候、

辛未四月三日

知政所

別紙

一先般

勅使御下向、実父久光

宸翰拝戴被 仰付、病体勉強仕、当春中 闕下ニ拜

趨可仕旨御請申上置候処、病痾猶順快不仕候付、恐縮

至極奉存候得共、当秋迄御猶予被成下候様奉歎願候、

依之臣忠義久光ニ代り上京仕、奉謝

天恩度奉存候間、宜御執

奏奉願候、以上、

辛未三月三日

願之趣兼て厚キ 御沙汰之次第も被為在候儀ニ候得共、不得止事情ニ付被  
聞食届候間、精々療養相加、其内聊得病閑候ハ、早速上京可致候、就ては忠義儀、願之通り早々上京可致候事、

五八 私ニ紙幣ヲ製造スルヲ禁ス

明治四年四月四日、私ニ紙幣ヲ製造スルヲ禁セララル、

〔第六十八〕 四月四日（布）

府藩県へ

府藩県ニ於テ楮幣製造不相成儀ハ、兼テ御布告モ有之候処、今以製造致シ候向モ有之哉ニ相聞、以ノ外ノ事ニ候、右ハ全国理財ノ要務ニ於テ弊害不少、実ニ不容易儀ニ付、向後金銀・米札・並錢・切手或ハ諸産物預リ切手等通用貨幣ニ紛敷品、新製又ハ増造等決シテ不相成候、万一違犯ノ輩於有之ハ、屹度御処置ノ品モ可有之候条、嚴重取締可致事、

〔法令全書にて補正〕

明治4年(1871)

明治四年四月四日

府藩県へ御達書写

近来各地方ニ於テ、商法便利之為メ、追々諸会社取設候趣、然ル処結社之規則モ不心得、懸空之見込ヲ以取扱候ヨリ、往々訴訟之端ヲ開キ、或ハ融通之道ヲ誤リ、準備之正金モ充実セス、預リ切手又ハ金券様之モノ發行シ、終ニ破産之資ト相成候儀モ有之哉ニ相聞ヘ不都合之事ニ候、追テ一定之商規モ可相立候得共、差向右等之所為無之様、各管轄庁ニ於テ、委詳取調、官許無之金券并空名預リ切手等有之候ハ、速ニ廢止、正金ニ為引換候様可致事、

明治四年四月四日

諸藩へ御達書写

從來諸藩ニ於テ、歳入之米穀売却之節、蔵米切手ト唱ヘ、米券ヲ製シ売買候向モ有之趣、然ル処會計窮迫之余、一時之取計ヲ以蓄積之米穀高二適実セス、空米切手ヲ製出シ、終ニ融通否塞之基トモ相成候儀不少哉ニ相聞、以之外之事ニ候、向後右等之所為決テ不相成候

条、屹度可相心得候事、

五九 藩庁忠義公上京發途ニ付送問アルヘシト

達ス

明治四年四月、藩庁忠義公上京發途ニ付、任職中送問アルベシト達セリ、  
一從四位様此節

御發駕ニ付、八等官以上任職之面々 御城下江罷出、

御發駕後登 城伝事江相付御祝儀可申上候、

但改服、

右外略ス、

辛未四月

知政所

六〇 戸籍法ヲ改正シ其規則ヲ頒ツ

明治四年四月五日、戸籍法ヲ改正シ其規則ヲ頒ツ、

御布告写

今般府藩県一般戸籍ノ法、別紙ノ通知改正被 仰出候条、管内普ク布告致シ可申事、

戸籍検査編製ハ、来申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候得共、右ニ関係スル諸般ノ事ハ、今ヨリ処置致ス可ク、尤三都府及各開港場ハ、人民輻湊ノ地ニテ、取締向速ニ不相立候テハ難相成ニ付、送籍・入籍並旅行寄留ノ者へ、鑑札渡方・寄留表取調方等、当六月廿九日ヨリ後ルベカラザル事、

但不審ノ廉ハ、民部省へ可承合事、

右之通被 仰出候事、

寄留・職分・戸籍三表有リ、略之、

### 六一 社寺ノ毎歳埋葬人員・姓名ヲ録上セシム

明治四年四月五日、社寺ヲシテ毎歳埋葬ノ人員・姓名ヲ録上セシメラル、

人生始終ヲ詳ニスルハ、切要ノ事務ニ候、故ニ自今人民天然ヲ以テ終リ候者、又ハ非命ニ死シ候者等、埋葬ノ処ニ於テ、其時々其由ヲ記録シ、名前書・員数トモ、毎歳十一月中其管轄庁又ハ支配所へ差出サセ、十二月 中弁官へ可差出候事、  
右之通、管内社寺へ可触達候事、

### 六二 採礦ノ請負ヲ許シ其稅ヲ課セララル

明治四年四月五日、採礦ノ請負ヲ許シ其稅ヲ課セララル、  
府藩県へ御達書写

礦山開採之儀願出度輩ハ、其地方官ニ於テ身元取調、相応ノ仕法相立候分ハ、伺之上御差許相成、相当之稅為相納請負可申付候條、願人有之候ハ、早々可申出事、

### 六三 藩庁飛脚差立期日ヲ定メ其手續ヲ達ス

明治四年四月七日、藩庁飛脚差立期日ヲ定メ、其手續ヲ達セリ、

一此節 御上京中且 御親兵在京之中は、毎月廿九日式日飛脚被差立候條、向々江可申渡候、

但諸局御用物等は船便より可差出、左候て差掛御用有之者は、朔日・二日方迄之間被召延儀も可有之候事、

辛未四月七日

知政所



六四 府藩県ニ令シテ国典・珍書ヲ索求ス

明治四年四月八日、府藩県ニ令シテ、大ニ国書ヲ蒐索セラル、

〔第百七十六〕 四月八日(布)

古書籍類、別紙目録之通全部不存者並欠本等、府藩県管内精細取調、所蔵之者有之候へハ可申出事、

但其他古本・珍書等有之候へハ、同様可申出事、

(別紙省略カ)

六五 藩庁島津忠義発途延引ヲ達ス

明治四年四月八日、藩庁忠義公発途延引ノ事ヲ達セリ、一従四位様御儀、今日 御発駕被遊筈候処、御子様御出生ニ付、

御発駕御延引被 仰達候条、早々向々江可申渡候、

但御日限之儀は、追て可被 仰達候、

辛未四月八日

知政所

【参照一】

寺師宗道日記四年四月

同八日 曇天

出席掛ケ兵学寮へ立寄、田原陶吉へ談話ス、フレットモーレン訳春名ヨリ受取候、今日 知藩事公四ツ時御雷発、阿波船へ御乗付御登京之筈ニ付御供揃、道掃等も有之候処、俄ニ御取企相成り候由、今朝御妾腹へ姫君御誕生之由、右ニ付御猶予ニテ云々 (以下は番号六七にあつ)

【参照二】

道島正亮日記四年四月十一日

知事公四月八日東京江御出立ノ筈候処、御姫様御出生ニテ御延引、六村萬娘名ノ腹ニ御出生、右ニ付十六日御出帆、阿波ノ御借入船ニテ候ヨシ、

六六 地方官ノ公罪通減法、知事・参事・属ヲ以

テ三等卜定ム

明治四年四月九日、地方官ノ公罪通減法、知事・参事・属ヲ以テ三等卜定メラル (本文記載なし)

六七 久留米藩通逃一件鎮撫ノ為メ藩兵二小队

ヲ遣ス

明治四年四月九日、久留米藩遺逃一件鎮撫ノ為メ、藩兵二小队ヲ發遣セリ、

【参照】

寺師宗道日記

四月八日

(前文は番号五参照にあり)  
又昨夜中三邦丸并ニ今朝久留米ヨリ蒸氣艦一艘、救心

之為迎舟来着之由、右ニ付外城番兵一番・二番南方二小队、池田次郎兵衛督シテ明日發箭之由、尤筑後若津と云処へ繰込相成候由也、段々浪士之動靜不穩、久留米ニは追々叛逆之実蹟露レ、柳河・筑前・肥後其外藩々多荷担、九州中充滿、追々兵隊繰出相成候由、今朝も中津藩より二小队も出張相成候由、早馬來候由、豊後日田潜居浪人悉く久藩へ繰込候由、兎角伐方不相成は鎮靜は六ヶ敷と之説也、日田屯集之浪士ニは長崎ヲ燒討之策之由、然共違策相成候半、如此東西一同ニ蜂起、一先日本ヲ擾乱して弊ニ乘リ

天子之遷幸ヲ謀リ、大望ヲ達スル之略と見へたり、七ツ過退出ス、明朝亞国艦トウケイ兵隊出立開帆之筈也、

同九日 晴

出席候、今日十時比東京兵隊舟出帆也、井上直助参局、

春日丸士官ニて候処、龍驤丸士官ニなりて、近日親病氣ニて下り候由ニて、右軍艦備用之火薬三万斤位 朝廷より御買入相成候由、松元了藏兵部省之間合持参之由也、一門ニ付二百発賦ニて、六十四斤砲八門・百斤

砲二門二段ニ備へ候由、田實善之助書状来ル、十八日神奈河着、十九日神田邸へ着之由、東京中不穩事情ニて、久留米藩・柳川藩・嶋原藩・筑前藩等其外諸藩之内、多浪士共ニ党徒之由、今日七ツ過比ニ筑前蒸氣艦一艘入津相成候由、事情不分、今日豊後日田より迎舟、昨日着之蒸氣艦へ外城二小队池田次郎兵衛督シテ出帆相成候由、鍼打銃五百発賦ニて兵器方より繰出相成候由、中津藩参局断ニ、彼藩ニも二小队姫路之方へ繰出相成居候由、豊津藩ニも同断、且ツ屯人通行之時分長州兵隊高良山より府中へ繰出、城下より一里手前之善道寺と云処迄繰込相成候由、右之通り漸迫り候ニ付戦争ニ可為哉、又兵器差出降伏相成候哉、一ツニ相決、何分浪士之勢熾故、無体ニ押付は難出来趣也、火薬しらべヲ為ス、纔九万四千四百斤位あり、因テ彈製之事評議ス、  
十日、十一日省略之  
同十二日 雨天雷雨

出席掛兵学寮へ立寄、寮之事廢候由内知有之、此内より

火薬局光沢器械等出来方西尾金次郎混と取懸居候処、  
兩日中ニ本局之様引取候様承候、九ツ過出張局へ出、  
泊り番也、近日説長州之奇兵隊与脱走者三人当藩へ潜  
居候処、長より捕方として捕亡方入込探索相成り、昨  
日此方より召捕相成り、彼方へ引渡相成候由、又説ニ  
此内は拾二三人来り居候処、

知事公御立日限御取究相成候処ニ、急ニ七八人は行衛  
不知相成り、段々探索有之候得共不相分由也、定て久  
留米方間諜ならんと云、又昨日召捕之者共ハ、士分一  
人外は軽キ者ニて、長之御使者と偽り居候由、然共口  
状之次第意味違之事のミ有之、本藩へ問越相成候処、  
則偽りニて彼方より捕方として役人差出候由、夜入前  
より本局、泊り番、伊勢仲左衛門へ參り緩談ス、

同十三日 曇晴雨

泊り明ケ也、久留米浪士は凡三千人之与徒有之由、大  
山格之介書状先日筑前福岡より達あり、未鎮静之目途  
は不相立由、肥後は出兵ヲ差留候由、種々雜説也、汾  
陽真一兵衛より僕甚兵衛復勤之事、礼謝色紙坏被贈候、  
書状端ニ、此度知事公東着候ハ、直二千五百人銃ヲ打  
掛、外ニ諸藩手之人數拾万人馳集り、右砲声ヲ合図ニ、

西城 皇居ニ八十六人之間徒兼て忍居候て同時ニ燒  
立、其紛ニ 皇居ヲ遷奉り候策、又越後ニは三千五百  
人程起り立、九州ニは久留米ヲ始メ、肥後・肥前・筑  
前・嶋原・大村・對馬及佐伯・岡・柳川・伊東・延岡  
等之諸藩ニ合同討薩之手筈ニて、東西同時ニ起前後よ  
り挾討候策略之由候処、姦謀露頭、先ツ拾六人召捕相  
成り、尹宮一檄、夫故一番出兵艦十八日横濱着、則一  
字横濱打立、八里之陸夜行日の出ニ着、即於府下調練  
威儀堂々、故ニ姦徒忽胆ヲ飛シ離散候由云々、又 主  
上ヲ日光ニ奉遷策之由也(十四日當略)

同十五日 雨天

夜半八ツ時分より早鐘鳴り、十里内諸郷寄調練、吉野  
原出張有之、孫一郎と一緒ニ出ル、直ニ火薬局へ出席  
ス、兩殊之外降、繰出兵隊十一大隊有之由也、七ヶ所  
台場も六ツ時砲発アリ、又調練場へも小隊出張有之由  
也、昨日 朝廷龍驤艦為乗方火薬六百斤当月中仕出相  
成候様と之事也、久留米ニは知藩事免職ニて、取締役  
四條四位殿日田県へ出張相成候由、藩士共長州之奇法  
之所置ニ不忍、此節薩兵少ニも合力之勢アラハ、直ニ  
討長之賦之由也、九ツ前出張、吉野より引取相成候由、

火薬増製之衆議ス、又昨日 朝廷火薬一条ニ付、退出掛ヶ井上直八江鈴木杜七同道差越内談ス、明日 知事公御発馬<sup>(馬)</sup>、御舟より登相成候由候付、兵部省川村兵部大丞へ内話申入置候、郷田藤助来ル、今日より太郎小仕江召入、

【参照二】

道島日記明治四年四月

一 四月十日前後ニテモ候ヤ、浪人三人祇園ノ広間辺ニテ被召捕候由、子細ハ長州モノニテ御拘願出候ニ付、御掛合相成候処、全ク左様ノモノハ不罷居候由、外ニモ段々疑シキ事有之候ヤ、召捕糺方ニヲヨヒ候処、旧幕モノ又ハ會津辺ノモノ候由、格護所へ被召入候由承候事、

四月十五日方承候事、

本文、長州脱走人等ニテ、長州使者トイフ名目ニテ差越居、召捕之上及糺明候処、出兵之時分市中又ハ軍務局等へ火ヲ掛ノ存念ニ候得共、中々取締嚴重ニテ、得火ヲ掛候儀不相成トノ申分ニテ候ヨシ、長州ヨリ召捕列越候ヨシ、

六八 親兵四大隊上京発航ス

明治四年四月九日、親兵四大隊乗船東京江発途セリ、

(記)

此日午前十時、四番大隊雇船<sup>米國船</sup>ニ乗込ミ、発途セリ、今月十三日神奈川ニ着、今月十五日神田邸ニ着セリ、

(按) 今回ノ発船<sup>(イ)</sup>ハ、前回ノ分ハ三月 日ニ発船シ、四月十九日ニ東京ニ着セシモノナラン、

親兵トシテ今回上京ノ兵員ハ、四大隊・四砲座ナリ、今糧食経費ノ計算ヲ記セルモノアリ、左ニ掲ク、

一 壹ヶ月分

現人数三千百七十四人

白米五百七十一石三斗二升

右一月份

金五千九百五十一兩貳朱

右菜料一ヶ月分

一 一年分

白米六千八百五十五石八斗四升

金七万千四百拾三兩貳歩

一日分

白米拾九石四升四合

菜料百九十八両老部式朱

右市ケ谷入費

【参照】

道島正亮日記四年五月二日

一四月廿日出之書状五月二日ニ相達候処、此方ヨリ出兵ノ四大隊、共ニ朝士ノ名目ニ相成、印モ被相廢、生國相唱候節ハ、旧鹿兒島藩ト相唱候様、イツ下国ノ程モ不相知候段申來候、

但王政御一新ニ相成候上ハ、旧幕府ノ政事ヨリ一入可被難有事候処、全ク左様ノ御所置モ無之、貧家ノ小店モ税金相掛、其外女太夫且按摩・小便船荷担ニ付テモ運上銀相掛、沢山ナルモノハ獄中ノ罪人ニテ候ヨシ、此節三藩相揃候ハ、右变革御仁惠ニ可相成、市中専ラ風説イタシ候由、

但是非風俗紊立候者カ、三藩相揃逆俄ニ立直ルヘキモノニ無之、上ニ英明ノ大人突立、此人ノ一心ヨリ出ルノ仁徳ニ無之テハ不相濟、タトヒ三藩一段ハ同氣相催候トモ、一身同体ノ如クアルモノニテハ無之、其内ニハ狐疑モ生シ權ヲ争フ事モ出来ルモノナリ、看々一兩年

モ不過シテ大乱タルヘシ、

六九 地方貸付金穀ノ借用証書式ヲ定ム

明治四年四月十日、地方貸付金穀ノ借用証書式ヲ定メラル、

御布告

一府藩県諸拝借之儀、最初返納期限取極、大蔵省ヨリ直ニ受取候外租税ノ内ヲ以貸渡候分、或ハ最初用意金等ノ訳ヲ以大蔵省ヨリ受取先ニ於テ貸渡取計候分共、総テ今度証文書改相成候間、是迄拝借米金共未納ノ分一且大蔵省ヘ返納、更ニ拝借ノ積相心得可申、尤年賦ニテ既納有之分ハ、残高残年季ヲ以証書何レモ各通ニ取調、東京貢納ノ諸県租税ノ内ヲ以貸渡候分并大蔵省ヨリ受取候分ハ、当六月中旬迄ニ同省ヘ差出、証書引換可申、京阪ヘ貢納ノ諸県及同所ニテ受取候分ハ、右兩所ニ於テ同様引換可申事、

但租税ノ内ヲ以貸渡候分ハ、最前何濟ノ書面相添可差出、且本文之通証文書改候以後ハ、別段勘定組同ニ不及、別紙雛形ニ照準シ、証書相認可差出、

尤出納勘定帳組方ノ儀ハ、兼テ達置候通可相心得事、

一拜借其外年賦上納金等、是迄十二月中ニ相納候処、以

後ハ其年十一月限大蔵省へ上納可致事、

一但正米ノ儀ハ、貢米同時上納ノ事、

右之通可相心得事、

七〇 藩庁島津忠義發途上京ノ期日ヲ達ス

明治四年四月十日、藩庁忠義公發途上京ノ期日ヲ達セリ、

一從四位様御儀、來ル十六日四ツ時被遊 御發駕旨被

仰達候条、御通行筋并御手当等之儀は、先達て申渡候

通可相心得旨、向々江不洩様可申渡候、

辛未四月

知政所

(記)

本月八日ノ達ニ由リ、九日ノ發途ヲ延期アリシニ由リ、

此達アリシナリ、

七一 異宗徒取締ノ為外務權大丞ヲ遣サル

明治四年四月十二日

御沙汰書写

鹿兒島藩

異宗之者取調トシテ、外務權大丞中野健明被差遣候ニ付、其藩到着之上ハ、知事始篤ト申談取計可致候事、

(記)

二年末ヨリ三年ノ初ニ亘リ、長崎県浦上・大良両村民

三千余人ノ邪蘇徒ヲ捕ヘテ、本藩ヲ始メ藩ニ幽閉シテ

改宗ヲ強令シタリ、本藩ハ男女三百余人ヲ旧菩提寺福昌寺

ノ遺屋ニ收監セシモ、後朝命ニ基キ男女ヲ問ハス士民

ノ雇使ヲ許セシヲ以テ、其実極メテ寛裕ナリシニ由リ、

往々棄ンテ其居ニ親ミ者モアリキ、然ルニ各藩多少ノ

寛嚴アリ、其報聞伝フルアリ、外国宣教師ハ往々邪蘇

徒ノ処分ヲ刻虐ナリトシテ、之ヲ自国公使ニ訴フ、公

使政府ニ論難シテ止マス、是ニ於テ其実況ヲ視察スル

カ為メ、此日外務權大丞楠本正隆・全中野健明ニ命シ

テ、各藩ニ巡察セシム、仍テ本藩ニハ中野來到シテ実

況ヲ監檢シタルナリ、

【参照】

中野ノ巡回諸藩ハ左之通、

鹿兒島藩  
徳島藩  
高知藩  
松山藩  
高松藩  
楠本ノ巡回藩ハ左之通、

名古屋藩  
和歌山藩  
廣島藩  
山口藩  
岡山藩  
鳥取藩  
松江藩  
津藩  
姫路藩  
郡山藩  
福山藩  
津和野藩  
(按) 本藩ニ預ラレタル邪蘇教民ハ、男女老幼三百余人ナリ、之ヲ城下上方元福昌寺客殿跡ニ入レ、四囲ニ竹

柵ヲ繞シテ収監セリ、後ニ至リテ男女少壯ノ者ハ、望ニ仍リ城下士民ノ雇使ヲ聴セシニ由リ、或ハ勞役ニ使フ者アリ、或ハ僕婢ニ雇使スルモアリキ、老年ノ男女幼弱ノ者ハ監舎内ニ在リテ、重ニ農家ノ余業ニ従事セシメタリ、故ニ当時草履・席ノ類等ニテ、該教民ノ手作ニ由ルモノハ、民間之ヲキリスタン草履又ハ席ト称シテ、低廉ナルヲ以テ購客多カリシナリ、

又教民ノ監内ニ在ル情況ヲ聞クニ、依然信奉ノ教式ヲ廢スルコトナク、反テ艱難ヲ同フスルノ情念ヨリ教宗ニ凝固タルノ有様ニテ、益々信念ヲ堅セリ、故ニ老幼ヲ問ハス互ニ親和協睦死生ヲ誓ヒ、男女ノ品行嚴然トシテ乱レス、老者ハ幼者ヲ勞ヒ、幼者ハ老者ヲ扶ケ、其躬行ノ嚴正ナルコト尋常人ノ及ハサル処ナリシ、故ニ士民ノ間ニ雇使スル者モ、能ク其期誓ニ背カス、至ル所皆雇者ノ使用ヲ為スヲ以テ、其正直勤勉ナルヲ称セサルハナク、反テ人々ノ愛好ヲ増セリ、

(全) 英公使巴氏伝中ニ左ノ一節あり、

千八百七十年<sup>明治三年</sup>一月ニ、日本外務省より締盟各国公使ニ通牒する際、近年長崎県浦上村邪蘇教人民あり、其審問の間ハ之を各藩ニ監して、農民平和を擾乱する

の理由に基き、常業に服役せしむべしと云へり、然れとも其実状は奴隷に虐使したるなり、此の如く其処置當を得ざるを以て、曾て之を勸化するに力むるなかりしなり、多くハ苛虐に遇せられたり、就中加賀<sup>高山藩</sup>に於てハ、特に苛酷の惨毒を受けたり、ハल्ली・パークス氏は締盟各国公使と連合し、直に其事件に干渉せざりしも、初に地方官に向ひ異議を申入れ、其後日本政府に申告したり、然かるに日本政府は二ヶ条の理由を陳へて抗弁したり、其一ハ幕府時代よりハ極めて寛大なる取扱にして、苛虐の実蹟なしと、其二ハ佛国宣教師が、佛国の保護を約して盛に弘教に従事し、民心を惑乱するにありと、此一事ハ或は多少其実蹟なかりしにハあらざらんと思へり、

同氏の書牘中に、長崎附近の村民は、天主教僧の勸説恰も日本政府の宣言する如く、違叛の人民たらしむるを以て、追逐遷徙せらるに至る、要するに日本政府ハ西僧徒を追ふこと能ハさるに由り、止なく人民を遷徙せしめたるなり、当時西僧にして、各港内の聖堂に参集せしめて、教化を伝ふことに満足せず、返て日本政府を促かして教民を困憊せしめたるを悲めり、又日本

人の性情ハ清国民と異なり、第十六世前に起れる邪蘇徒乱殺の志念ハ、今も尚記憶に存するに由り、自然苛虐の情念を起す所以なりと、佛国主僧ハ屢々訓示を發し、教民を諭し多少民心を安輯せしも、尚教民を虐遇する絶へず、前時に比すれハ多少の寛大を得たり、千八百七十三年<sup>明治五年</sup>ニ及び、其間各国公使屢々其処置を鳴らし抗議を為せしを以て、遂に釈放して村里に帰らしめたり、

## 七二 城下附近十里内諸郷兵召集操練ス

明治四年四月十五日、城下附近十里内諸郷兵ヲ召集シテ、吉野原ニテ操練ヲ行フ、

(記)

城下附近十里内諸郷兵十一大隊ヲ召集シテ、吉野原ニテ操練ヲ行ヘリ、諸郷兵ハ先日ヨリ城下各町家ニ止宿シ、此日午前一字早鐘ノ号鐘ヲ以テ、陸軍局前操練場ニ召集シ、漸次吉野原ニ繰出シ、大隊運動ヲ為ス、<sup>(次)</sup>強雨為正午ニ至リ操練ヲ了レリ、全日七ヶ所ノ海岸砲台ニテモ、全日午前六時ニ発砲操練ヲ行ヘリ、



【参照一】

寺師宗道日記四年四月十五日

〔番号六七と同文により削除〕

【参照二】

道島正亮日記四年四月十五日

一四月十五日、拾里方諸郷兵士吉野調練、昨夕ヨリ雨ニテ、今晚益々強ク候得共吉野登リ、今和泉ノ御名代ニテ候ヨシ、風モ強ク布屋抔張方モ不出来、地蔵濡ニテヲロノ本辺ハ水深ク、腰ニ掛リ候ヨシ、大ニ困窮イタシ候由、ハ重廻翌十六日ニ差越、直嘶ニテ殊ノ外難儀イタシ、何事之調練カト相尋候得共、何事ニテ候カ全ク不相分、当分田地仕付時ニ付、地頭前ヨリ段々被相断候得共、聞入無之候由、二丸ノ嘶ニヲキラナリトテ候ヨシ、

七三 島津忠義発途上京ス

明治四年四月十六日、忠義公発途上京セララル、

(記)

本日午前十時、西郷随行乗船辰辰 発航、全月二十一日

東京神田橋内邸江着セララル、

【参照一】

船中記事アリ、参考トシテ掲載ス、

四月十六日

今朝四ツ半時分

御発駕、前之濱ヨリ 御迎船戊辰丸へ 御乗船、南風

ニテ少々浪高ニテ、山川へ七ツ時分 御碇泊、

御機嫌能被遊 御滞船候事、

御碇泊之御左右申上越候事、

同十七日

今朝六ツ半時分、山川港 御出艦、大東御通 御機嫌

能被遊 御座候事、

同十八日

昨日ヨリ勝タル順風ニテ、御機嫌能被遊御座候事、

同十九日

昨夕方ヨリ北風ニ相成、浪高ニ有之候得共、 御碇泊

等無之、御機嫌能被遊御座候事、

同日

今晚ヨリ風強ク、無程夜明ケ紀州路相見得、少々浪高ニテ、志州の屋へ暫時 御汐掛ノ賦ノ処、風相和候付、

遠州洋 御乗掛ニ相成、八字式拾八分余ヨリ漸々向風ニ相成、雨モ相付浪立候付、夜入三字余伊豆下田湊へ御着艦被遊 御碇泊候事、

同廿日

昨日ヨリ終日北風吹通シ、 御碇泊、

同廿一日

昨夜九字式拾分余下田湊 御出艦、四ツ過品川沖へ御着艦、夫ヨリ 御足次船へ 御乗移リ、鮫洲へ 御上陸、同所釜屋へ 御休、夫ヨリ品川筋御通行、田町大坂屋平七所へ 御小休、夫ヨリ田町御屋敷前通、尾張町老町目ヨリ数寄屋橋、目付ヨリ大名小路、細川屋敷脇ヨリ神田橋内御屋敷裏御門前通御通、八時過御本門ヨリ御光着、猶機嫌能被遊御座候事、

四月廿一日 雨

今日八ツ時、 御機嫌能被遊 御光着候事、

【参照二】

大久保利通日記四年四月

廿一日

一不参、岸良子・海江田子入来、吉井子入来、今日知事〔宝善〕

公御着故、吉井実友同道藩邸へ参ル、知事公へ謁、西郷盛隆ヲ訪、

【参照三】

道島正亮日記四年

四月十一日（一節）

本文ニ付、此節ノ人数ハ徴士ニ付、御供ハ不相成候由、御側廻計ニテ西郷吉之助御供イタシ候由、万一事アリシ候節ハイカ、  
一右ニ付、九日ニ四番大隊、十日ニ一番〔頭註〕・二番〔大隊カ〕小隊出兵云々、

ノ四大隊、馬車ノ馬七拾疋計都合被遣候ヨシ、

【参照四】

寺師宗道日記

同十九日 雨天

泊り明ケ也、東京ノ説ヲ聞ク、主上ヲ佐竹之出羽之久保田へ奉遷、薩先鋒として来ル時は、利根川にて逼り挾討ニする策と云々、又其時ニ九州之兵蜂起、薩之本国ヲ討之賦と云、又土州藩も反逆徒ニ与シタル由、藩々都合八藩ニ及候由、此度之事は紀州より為知相成候由、参事津田又三郎软或藩より引合アリテ、是ニ同セ

明治4年(1871)

す則注進ニ及候由、又阿波藩ニおゐても同様にて、此節御上京御迎舟之事ニも彼より起候由也、右之説にて兵器隊も出スと云、又東京ニは十二艘之軍艦も揃候由、不穩事情也、

泊り明<sup>マ</sup>ケ也、鳴原藩器械拜見ニ来ル、七ツ過退出、伊藤清右衛門・兒玉彌右衛門・伊勢十郎同道帰ル、諏訪迫戸ニ差越候処、段々人騒立候様子故尋候処、諏訪山之楠樹ニ火燃上り候由聞、則社内江至見ルニ、宗源殿之後之楠之大樹の半腹ニ火燃熾り候、三所よりもへ出テ、段々下より消方之手廻スレトモ上り得ス、只下より龍吐水ヲツキ掛ル計也、折枝の朽たる所の中心より燃る也、かゝる雨中ニ殊ニ神山ニして不思議之事也、何分人々驚懼ヲ為ス、如何様神告ならんと謂あへり、

七四 藩庁諸局附属長ノ軍役高ノ所有ヲ停メ、  
城下居住附士ニ売付スルコトヲ達ス

明治四年四月十七日、藩庁諸局附属長ノ軍役高ノ所有ヲ停メ、之ヲ城下居住附士ニ売付スベキコトヲ達セリ、  
一諸局附属長之面々御軍役高所持いたし候儀、職掌之名

実不相叶候付、従前より所持致米候者は、御当地居住附士以上御免之者江、此涯相對売渡候様可申渡候、此旨向々江可申渡候、

辛未四月十七日

知政所

七五 藩庁出米ハ旧制ニ基キ、集成館火薬局ノ  
經費ニ充ツルコトヲ達ス

明治四年四月十九日、藩庁出米ハ旧制ニ基キ、集成館火薬局ノ經費ニ充ツルコトヲ達セリ、

一御藩内士族御軍役高出米之儀、古来軍備ニ付、一同合力之良制候処、元和以后往々致変態候得共、既ニ四海今日之形勢ニ立至候上は、専古制ニ基キ、集成館火薬局之歳費ニ被振向、来申年より先キ、年中平均之米価を以掛役々立会致差引、出軍用ニ御振向、尚余分も候は、御軍用之内ニ被備置筈候条、向々江申渡、諸郷江不洩様可申渡候、

辛未四月十九日

知政所

(記)

出米トハ藩ノ旧制ニシテ、士族持高収納額ノ内ヨリ、

菅石ニ付八升一合ノ課出ヲ為サシメテ、軍役ニ充ツルナリ、今更ニ旧制ニ基キ課出シテ、其収額ハ五年先キ<sup>(マ)</sup>年ノ平均相場ヲ以テ金ニ換へ、之ヲ銃砲火薬ノ軍需品製造ニ充ツルカ為メ支弁スルトナリ、

(按) 当時城下・外城士族ノ持高ハ<sup>(マ)</sup>

ニ当レリ、五年以降<sup>(マ)</sup>ノ平均価額ヲ計算スルニ、金額ニシテ<sup>(マ)</sup>ニ達セリトゾ、

## 七六 藩庁兵学校ヲ廃シ軍務局寮ト改称ス

明治四年四月二十三日、藩庁兵学校ヲ廃シ、軍務局寮ト改称シタルコトヲ達セリ、

一 東西兵学寮之儀、軍務局管轄ニテ、兵士教導方被仰付置候得共、今般本学校并小学校御設建、皇漢洋之三学は勿論、兵学ニ至迄兼脩、普通之学問被相開、生徒実効有之者は、往々軍治各局江御撰挙之御規定相成居候付、此節右兵学寮は被廢候、左候て西兵学寮之内、是迄拾八歳以下之兵士出席所跡は小学第四校ニ被相定、本学校管轄被仰付、右兵士之儀は、夫々年輩を以小学校規則通諸生ニ被仰付、東兵学寮跡并西兵学寮之内、

常備兵士又は諸郷報知役等入塾場所之分は、従前之振合を以軍務局寮ニ被仰渡置候條、大隊長本学校之儀諸官申談、諸事無混雜可致取扱旨申渡、向々江も可申渡候、

但兵学寮掛指南役之儀、追て小学校師員等江可被転候間、其内是迄之通可相動、左候て兵士之内俸禄被下置候面々は、此内之通被成下候、

辛未四月廿三日

知政所

張紙

仮小学校之儀、第三校と名目被相替候條、本学校江申渡、可承向々江も可申渡候、

辛未四月

知政所

(記)

兵学寮ハ、兵員諸生ニ専ラ西洋ノ學術ヲ講究セシムルノ目的ニテ設置シ、寄宿舎ヲ設ケ、或ハ講学ニ、或ハ実習ニ就カシメタリ、然ルニ中・小学校ノ設置アリシニ由リ、年少ノ生徒ハ之ヲ学校ニ移シ、跡ヲ軍務局寮ト改称シ、常備兵又ハ諸郷報知役ノ宿泊ニ充ツルコトセリ、

(按) 寮長ハ、初メ大隊長田原陶吉ニシテ、軍事諸般ノ

講習ヲ研究セシメタリ、改称後ハ単ニ軍員ノ寄宿舎ニ充テタルナリ、

【参照】

寺師宗道日記四年四月十八日

(按) 本文達ハ、四月二十三日トアリ、日記ニ拠レハ十七日ニ相当セリ、

同十八日 昼晴晩雨

出席ス、昨日兵学寮名目替リ軍務局寮と相成候由、西兵学寮は廃シテ小学校と合併ニ相成候、局從來之水車杵搗ヲ都て桶器械ニ取替之吟味ス、当時火薬増産之目途尽力之賦也、上製火薬僅四万斤余アリ、中製七万斤余アリ、此出入等之算計ス、泊り番なり、ハツ後より伊勢仲左衛門・新納四郎右衛門同道集成館ニ至り、古水車桶取替入用ニ付、鉄軸二十本彼館在合之内より渡實之相談ス、其通り相決ス、夫より花倉分断方へ至ル、シナイトル葉包用之真鍮延金ヲ見ル、六字比帰ル、

七七 逃籍者ノ復籍規則ヲ改定ス

明治四年四月二十三日、逃籍者ノ復籍規則ヲ改定ス、

明治四年四月二十三日、地方官ニ令ツ、管内ノ河川ヲ相シテ橋梁ヲ架シ、渡舟ヲ設ケ以テ行旅ニ便ス、因テ橋税舟賃ヲ定メテ録上セシメラル、

〔第二百二〕 四月二十三日(布) 府藩県

諸道川々橋梁取建ニ可相成場所モ、從來船渡・歩行越等ニテ、旅人難渋不少ニ付、各地方官ニ於テ水利研究ノ上、早々仮橋相設可申、尤川底石砂等ニテ杭木難打立分ハ、新規通船造立致シ、増水ノ節通路相成候様、見込書並別紙雛形ノ通従前仕来取調、来七月限可差出事、

但川場へ従前ノ仕来ヲ以被下候御手当、向後一切不被下候間、右ノ心得ニテ定賃錢並無賃越共、更ニ相当ノ賃錢取調、賃錢ノ内ヲ以本橋・仮橋・渡船・管繕ノ備相立候様ノ見込、是亦可申出事、

(別紙書略)

(法令全書にて補正)

七八 藩庁諸局不用ノ書冊類ヲ小学生徒習字用ニ供与スルコトヲ達ス

明治四年四月二十四日、藩庁諸局不用ノ書冊類ヲ小学生

徒習字用ニ供与スルコトヲ達セリ、

一 小学校并郷校被召建、生徒追々相嵩候処、習字用反古紙存分調達不相叶段、本学校より申出趣有之候間、知政所を初諸局御一新以前之帳留類御用見合不相成分は、

此涯取しらへ本校江差廻、本校より無親疎致配分候様被仰付候条、本学校江申渡、向々江も可申渡事、

辛未四月廿四日

知政所

右社江福ヶ迫諏訪社同殿之

健南方富神会祭いたし、社号被相改候、

一 八坂刀賣命

右は信濃国御本社之例ニ準し、

言代主神御殿之跡江新ニ御鎮座被仰付候条、社司并可承向江も可申渡候、

辛未四月廿五日

知政所

七九 藩庁諏訪社祭神ノ更祭並社号改称ヲ達ス

明治四年四月二十五日、藩庁諏訪社祭神ヲ更祭シ、社号ヲ改称スルコトヲ達セリ、

福ヶ迫

一 長田神社

旧号諏訪

右社江戸柱諏訪同殿之

積羽八重言代主神会祭いたし社号被相改候、

戸柱

一 南方神社

旧号諏訪

八〇 藩庁死屍埋葬ノ手續ヲ達ス

明治四年四月二十七日、藩庁死屍埋葬ノ手續ヲ達セリ、

一 人民道路等ニ死果身寄親族於不相知は、検事見分之上

仮埋置、人相等相記候標札御藩内中江立置致糺方、其

後尋来者於無之は、是迄埋屍之仕来ニ候処、死て葬主

なきハ則鰥寡孤独ニて実ニ可慙、依て以来は右様非常

之死を遂ケ、三十日程も親族等不相知者は、埋葬之上

形行相記石標被召置、無苦之窮民御慙恤之典被為行度

儀と致評議候、以上、

四月

監察局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

但石標之儀、年号・月日并男女之間、且溺死・餓死・  
縊死等之訳可記置候、左候て失費は其所村長計を  
以建置、追て筋々江相付申出候ハ、即返銀可被  
仰付候、

辛未四月廿七日

知政所

(記)

従前一定ノ例規ノ抛ルベキナク、本達ニ依リ、其取扱  
ノ手續ニ一定セシナリ、

(按) 藩庁、医学院ニ英医ウルユスヲ雇ヒ教師トナシ、  
生徒ヲ教修セシム、時未タ解剖ノ術開ケス、実地ノ研  
習ヲ期セシニ、偶城下附近ノ海岸ニ女ノ死屍漂着セリ、  
藩庁ニ請ヒウルユス生徒ヲ率ヒ、其処ニ臨ミ解剖ノ術  
ヲ行ヒタリ、当時初発ノ事ニ係ルヲ以テ、世論紛囂ヲ  
極ム、又藩士和田某大ニ其不足ヲ論難スルニ至ル、是  
ニ於テ死屍埋葬ノ手續ヲ定メ、慙恤ノ典ヲ達シタルナ  
リト云フ、

【参照】

道島正亮日記四年四月女日

一四月中旬方ノ事ナランカ、女ノ生倒行レ又ハ溺死ノ者、  
在所不相知、仮埋メイタシ置ヲ、四拾日目計ニ解体イ

タシ候由、格別相痛ハ不致、左リノ手カチキレ候迄ニ  
テ候ヨシ、臭気ハヲモヒヤラレ候、

但和田八之進議論一前日一日後レ候カ、巡察共ヨ

リ此節解体之儀被差廻、既ニ解体相成、是ハ日本  
ニヲヒテ、未不承事ニテ候、ケ様之訳ニテ御覽相  
成候哉、殊ニ此死体ハイマタ在所モ不相知、只今  
相知候儀モ不被囹、罪人抔トテモ、ケ様ノ事ハ公  
義ニ取りテモ不被成訳ニ有之候、何様之御吟味ニ  
テ候ヤト、委ク書立申出相成候処、知政所ニテモ  
殊之外吟味ニ相成、已来ハケ様之儀モ不被仰付、  
此節迄ノ事ナリト、其俣相成候処、又已来ノ事ニ  
無之、此節之儀ニ有之候ト本人ヨリ申出候、誰カ  
差免候ヤ、又押返シ申出ニ相成、其後ハ不承トノ  
嘶ヲ承候事、六月八日方承候、

八一 参議大久保利通ヲ山口藩ニ差遣ス

明治四年四月二十八日、参議大久保利通ヲ山口藩ニ差遣

ス、

(記)

日田眞浮浪ノ徒騒擾アリ、政府ハ巡察使ヲ派遣シ、列藩ニ令シテ兵ヲ出サシメ、幾ナク鎮撫セリ、此際本藩ニモ令アリ、視察ノ為メ大山<sup>良綱</sup>ヲ派遣セシム、事山口藩ニ関連シテ爭議起レリ、是ニ於テ大久保自ラ山口ニ赴キ、説解スル処アラントシ、本日同藩差遣ヲ命セラレタルナリ、

【参照一】

木戸孝允日記

明治四年四月十四日

<sup>前文倉崎カ</sup>世外・三浦切ニ余ニ東上之事ヲ促す、又三條・岩倉二<sup>井上馨</sup>（<sup>信長</sup>）卿より之御内命もあり、且大久保よりの書状も到来せり、今日別に岩倉卿御書翰も到来、頗に余の東上云々の事あり、近来東京も断乎と御着手の模様切々承知、大に為邦家に賀せり、然るに又今日日田眞より山根秀輔書翰来る、薩大山格之助并に兵隊出張、其次第大に東京之主意と異なり、先年来首尾不相合之事より、天下人心之方向も弥相惑ひ、大村等の変又廣澤等の不幸等も、自ら依て来る処あり、必竟緩嚴等之議論種々雖有之、其元は只条理を貫くと不貫にあり、緩嚴皆条理中より起り、緩嚴よりして条理を論するの理なし、然

るに有司も多く其見不一故に、余も亦今日の事、只管為邦家一致一貫之目的不相立ときは、又先年の如失策、依て東京へ急に此次第を推問せんと欲す、

【参照二】

大久保利通日記四月

廿二日

八字參 朝、鎮台ノコト相決ス、秋田一条彈台出張、民部出張ニ決ス、退出ヨリ岩公へ參上、日田巡察使ノコト御談有之、帰宿後訪小西郷子、安場子入来、秋田云々ノコトヲ承ル（廿三日省略カ）

廿四日

<sup>朝カ</sup>今小西郷へ訪、八字后參 朝、二字退出、安場子入来、山縣子同日田眞大山格之助一条ニ付、山口藩疑惑ヲ以不容易事件有之、示談承り候、大山彌助・小西郷入来有之、

廿五日

今朝西郷子へ訪、長藩疑惑ノコトニ付云々及相談候、今日不參、右大臣御入来、山口藩ノコト御談有之（廿六日・廿七日省略カ）

廿八日

一八字參 朝、今日山口藩へ御用ニ付、差越候様被仰付



候、二字退出、信吾入来、

八二 藩庁掌務延滞ヲ戒メ、其処理ヲ達ス

明治四年四月、藩庁掌務延滞ニ及フコトヲ戒メ、其処理ヲ達セリ、

一御一新以来諸局之冗官御省略之上は、在官之面々深弁時勢致勉勵、御用筋等可相弁と之趣は、去々巳十一月委細致布令置通候処、諸局より申出之書付類關係之局江吟味相下候節、動ずれハ相滞、間ニは紛失之患も有之哉ニ相聞得、不可然事候付、各局奉行頭人は勿論、筆者ニ至迄申渡置候趣意相守、首尾之御用筋は、速ニ相運候様可致取扱候、尤銘々兼て扣帳仕立置、請取之書付は夫々記置、紛失等無之様致取扱、旅行等之節不相運御用筋は、同席之内より樋ニ次渡、請取候人より無滞可致首尾候、左候て至急期限等有之候書付類ハ、差出候局々より其訳張紙を以可申出候、此旨不洩様諸局江可申渡候、

辛未四月

知政所

八三 藩庁漆木栽植免許果実売上ノ手続ヲ達ス

明治四年四月、藩庁漆木栽植免許、果実売上ノ手続ヲ達セリ、

一漆御用木之儀、是迄御法も有之候得共、海辺遠く運送不便利成ル諸郷ニ於は、民産之余勢可相成良木も利用相少キ事候条、以来御用定漆之数さへ相備候へは、田畑并御用地等不差支場所ニは、其地にて十分仕立置、製漆之上勝手ニ売出候て不苦候間、願之者は民事役見分之上可令免許候、

一漆実上納願出候者は、櫛実同様四升代米可被仰付候、右之通被相定候条、尚又諸郷掛役々より勸立、農家之余産出来、育民之御趣意不相戻様可申談候、此旨民事局江申渡、可承向江も可申渡候、

辛未四月

知政所

八四 藩庁庁吏ノ定員ヲ定ム

明治四年四月、藩庁庁吏ノ定員ヲ立テ、尔今増減ヲ聴サ、ルコトヲ達セリ、

知政所

一書記(朱)〔旧唱書役〕

一同見習

右拾六人

内

小学校掛三人

東京詰四人

一神事調役

一同助

右五人

一筆者

右拾貳人

内当分人数之内貳人減少之賦

伝事方(朱)〔旧唱用人〕

一伝事

一同副役

右七人

内本学校掛壹人

東京詰貳人

一徇達(朱)〔旧唱小組頭〕

右六拾壹人

内比志嶋転住土方掛貳人

一筆者

右七人

民事局(朱)〔旧唱郡方〕

一民事奉行

一同副役

一同見習

右六拾壹人

但当分人数之内五人減少之賦

内

御檢地方拾人

大坂詰壹人

掌皮館掛貳人

農民館掛四人

外城方式拾七人

近在掛貳人

御檢地二付人配方壹人

諸郷御普請方式人

大和百姓移者方壹人

一支配役

一同助

右貳拾壹人

一檢者

一同寄

右百四拾貳人

但外二拾七人此涯被入置

一筆者

右七拾七人

内大坂詰壹人

御檢地方貳拾五人

会計局

一會計奉行

一副役

右八人

内大坂詰壹人

長崎詰壹人

一調役

一同助

右九人

内長崎詰貳人

一勘定役

一同助

一同見習

右四拾人

内大坂詰貳人

一筆者

右拾壹人

内長崎詰壹人

出納方

一出納奉行

一同副役

一同見習

右六拾四人

但米穀方三拾貳人

諸財方三拾貳人

内東京詰貳人

大坂詰六人

西京詰貳人

一筆者

右九拾壹人

但米穀方六拾三人

諸財方式拾八人

内西京詰壹人

東京詰貳人

外二大坂詰除

生産方(米)「(旧唱産物方)」

一生産奉行

一同副役

一同見習

右七拾四人

内藍玉方掛五人

蚕織方掛九人(米)「(旧唱養蚕方)」

金性分柝方掛貳人

金粉箔方掛壹人

国鈔方掛七人

木之実油方掛三人

白糖方掛六人

一監作

右六人

一筆者

右六拾壹人

營繕方(米)「(旧唱作事奉行)」

一營繕奉行

一同副役

一同見習

右拾九人

内細工掛六人

道路掛壹人

東京詰貳人

一監作(米)「(旧唱作事方檢者)」

一同寄

右七拾人

内細工掛拾人

道路掛五人

但当分人数之内五人減少之賦

東京詰四人

一筆者

右拾壹人

内細工掛三人

製造方(朱)「(旧唱御細工所)」

一 製造奉行

一 同副役

一 同見習

右拾貳人

内陶器方掛六人

紡績方掛五人

堺紡機方掛壹人

一 監作

右壹人

但堺紡機方掛

一 筆者

右六人

内陶器方掛四人

紡績方掛貳人

糧餉方(朱)「(旧唱御春屋役)」

一 糧餉役

一 同助

右八人

一 筆者

右六人

監察局

一 監察

右九人

内東京詰壹人

大坂詰壹人

一 巡察

右拾四人

一 檢事

右百五拾人

一 筆者

右四人

糺明局(朱)「(旧唱御裁許方)」

一 糺明奉行

一 同副役

一 同見習

右三拾貳人

内会所詰拾九人

一 管牢

右三人

一筆者

右六人

外城方

一筆者

右六人

内務局(卷)「(旧唱御用部屋)」

一侍直長(卷)「(旧唱御小納戸)」

右九人

内二丸三人

御子様御方三人

一侍直(卷)「(旧唱奥御小姓)」

右式拾人

内二丸八人

御子様御方六人

一侍直助

右九人

内二丸三人

御子様御方三人

一筆者

右八人

膳所

内二丸四人

一膳所頭

一同助

右拾人

内二丸四人

一内監

右拾式人

内二丸六人

道具方

一道具方頭

一同助

右參拾式人

内二丸三人

一道具預

右拾四人

内二丸五人

内厩方(卷)「(旧唱御馬預)」

一内厩役

一同助

右四人

一馬医

右式人

庭方

一庭方頭〔朱〕「旧唱御庭奉行」

一同助

右六人

内磯掛卷人

尾畔掛卷人

医員

一侍医〔朱〕「旧唱奥医師」

一同助

右式拾八人

内二九九人

玉里掛七人

貞君様御方式人

裏役

一裏役頭〔朱〕「旧唱御広鋪番頭」

一同助

右式拾九人

内二九七人

玉里六人

貞君様御方三人

一内監

右拾式人

内二九四人

玉里四人

一筆者

右六人

内二九式人

玉里式人

右は御一新以来、諸局追々改革人員之増減有之候処、既二二ヶ年ニ及び御用筋取馴来、当時官員右之通有之候得共、大凡百事之挙は其人ニ有て、人数之多少ニ不依は勿論ニ候へは、事実致弁別、成丈冗員令減少候様可申談候、乍去先右人員を以定数ニ被相定候条、已来別ニ一局開立之外、右定員相重候儀ハ不被仰付候、左候て是迄多人数ニて勤来候場所ニても、以来御用致減少候上は官員相省、可然向は早速可申出候、此旨向々江可申渡候、

但即今定員相重居候局は、転役等之節跡代不被仰付候、

辛未四月

知政所

八五 工部省御雇外国人通行ノ節、府藩県ヨリ

護送人ヲ進致セシム

一工部省官員御用ニ付、諸所江出張ノ節、御雇外国人政府之印章所持同行可致候間、府藩県管内通行之節ハ、相当之護送差出可申、尤道筋其外差掛り、同省官員ヨリ其場所ニ於テ申談候儀も可有之候条、不都合無之様可取計候事、

辛未四月

太政官

八六 附録

<sup>八六ノ一</sup>  
一未四月中旬比、御物方諸人自借銀、是迄六部利付ニテ候処、世間不相並候間、尅割付ニ被仰付候旨被仰出候、世間ハ是迄尅割又ハ拾式歩、又ハ尅割五歩杯ニテ候処、一昨年方ヨリ式割又ハ式割五歩御扶持加候杯ハ三割ニ

テ候由、右様不法ノ利付ニ付、御取締モ可有之候処、布テ世間不並ニテ、利銀被召上候儀、如何様ナル御処置ニ候ヤ、ケ様ノ高利ヲ貪リ候付、屹ト仰出モ有之、四部五歩ニ御引下ケ被成場ニ可有之ト申人モ段々有之候、

<sup>八六ノ二</sup>

一四月初二モ候ヤ、和田八之進<sup>元ハ中村新介ニ男ニテ養子ニ差越候由</sup>知政

所へ建言イタシ、段々議論イタシ、其前度々建白等イタシ候由、参政之者共誰ニテ候ヤ、段々ト激論ニ相成、桂ヨリ申ハ、今日ハ御方顔色モ不宜、殊之外激論ト相見得候、殊ニ御存知通り此御座ハ、国家ノ政事ヲイタス格別ナル御座ナリト申候得ハ、肥後罷在候自分ハ激論所ニテ無之、一統ノ奮激ニテ罷在候故、此位ニテ可有御座候杯ト、実ニ議論明白ニテ、誰モ一言無之程ノ事ニテ候ヨシ、橋口與市ヨリ御建白之内ニ、君臣一ナラサレハ、奸臣生スト相見得候、是ハ御見留アリテノ事カト相尋候処、見留所ニテ無之、御方杯之内ニモ有之、則可申カト申候処、與市一言ノ返答モ無之、朝四ツ過ヨリ七ツ過迄ノ議論ニテ候ヨシ、此外ハ委ク不承候得共、決テ一々申披キモ出来兼候程ノ事ナリト、専



ラ風説有之候、

八六ノ三

伊地知正治ヨリ内田政風・黒田清綱へ書翰

尚々暫時不得貴意候得共、御奉職奉大慶候、次小生無事、此度ハ御留主ニテ碌々罷居候間、乍余事御安意可被下候、忝知事公御上京諸兄一同十分御尽力ノ上ハ、王政之盛ナル日ヲ數ヘ可奉待、草藁間ト雖モ、多年ノ大慶此事ニ御座候、從テ藩中申上程ノ儀モ無御座候得共、近頃静岡ノ人蓮之池先生御頼入候テ、学校御取興相成候処、小学三ヶ所ニテ生徒六百位、外ニ郷校十三所本校ニ不相替盛ナルモノ三ツ余、逐々相調候様子、生徒千八百余、五ツヨリ七ツ時迄毎日ノ勉強、目覺敷次第々々ニ御座候、尤先生才徳兼備頗ル賢者ノ風アル故、諸人一同納得無此上幸甚御座候、昨年冬ヨリ麦稅御免ニテ、麦作十分御引勧メ相成候処、民心ノ居合極メテ宜敷、今分ニテハ例年ノ一倍増ト申事ニテ、是許ハ老眼ヲ悦シ候次第ニ御座候、右事迄郷音ノ吉事ト御聞取可被下候、先ハ久々音信不仕ニ任セ、御何勞得御意度如斯御座候、敬白、

未四月九日

伊地知正治

内田仲之助様

黒田嘉納様

侍史御中

(按) 本書ハ四月九日親兵ノ乗船ニ託シテ贈リシモノナリ、書中静岡人蓮池(マ)ヲ雇ヒ教頭トナシ、学事ヲ理シムルノ文アリ、之レ(マ)ノ事ニ係ハレリ、又郷校十三ヶ所設置ノ記事アリ、本年 月 日平之馬場郷校設置ノ達アリシモ、余ヶ所ノ郷校設置ノ達ヲ欠ケリ、思フニ平之馬場郷校ヲ設置シタル以來、各区競フテ之ヲ設置スルニ至リ、別ニ達令ニ及ハサリシモノナラン、又麦稅免除ノ事ハ 月日ノ達ニアリ参照スベシ、

八六ノ四

俸禄貸ノ弊害ニ付久保藤之進建言書

近来俸禄貸盛ニ致流行、大ニ窮士之憂ト罷成申候、其仕向ハ富家之者人ニ錢ヲ貸シ、返済之方二月々ノ俸米ヲ請取、御定直成ヨリ壹俵ニ付錢五六貫文、又ハ拾貫文余リモ下直ニ立、本錢ニ三割之利分ヲ懸テ差引、或ハ本物返シト申テ、何ヶ年モ俸米ヲ利分ノ形ニ請取、実以テ過当之仕方ニテ御座候、然レトモ貧究之モノノ渡世之難渋ニ迫リテ、高利ノ錢トハ知りナカラ、無拋俸

祿ヲ差遣シ致借財者不少、右様過當之仕方故、困究モノ倍々及疲弊、即チ家内介抱モ難調モノ余多有之候、唯今ニテハ不経年シテ御奉公モ不相調、終ニ劍ヲ食ニ換へ、放僻邪侈ノ心起テ身ヲ亡シ、剩へ御難題ヲモ醸出シ候半、真ニ非細事候、依之以來俸祿ニ金錢取替事堅被禁止、是迄取替居タルモノへハ、夫々年府等<sup>感</sup>ニテ相請取候様被仰出候ハ、銀主モ是迄過當之高利ヲ設ケシ事ニテ、何ソ迷惑ト申ス儀モ無之、大ニ究士之御救助ニ相成可申候、若シ今形ニ被召置候ハ、富タルモノハ益々不理之利潤ヲ設ケ、飽煖逸居之奢リヲ究メテ究士ヲ苦シメ、実ニ不堪傍觀ニ、依之不顧多罪愚考奉言上候、恐惶謹言、

未四月

鹿兒島土族

久保藤之進

八六ノ五

和蘭留學生某内密報告

当地ニ<sup>秘密</sup>ヘイメレイキ報告アリ、我邦ノ為ニ甚憂フ可キ処ナレトモ、果シテ其策ノ行ハル、哉否ヲ不知、子細ハ英国ノフレ<sup>上</sup>ミエール<sup>席</sup>ミニストルハルメルストン

去月中死去ス、是ハ有名ノ宰相ニテ、近来英国ノ政治凡テ穩ニ相成度、漫ニ他邦ニ対シ干戈ヲ動スコトヲ好マス、終始佛國ト相表裏ノ歐地ノ靜謐ヲ本トナシタルハ、此人ノ功也、然ル処此宰相ノ死ニ付テ、今迄ホレ<sup>外</sup>ンマツヘルノ宰相ナリシイーレル<sup>外</sup>リユクセル、フレミエルト成レリ、然ル処此フレミエルト<sup>政治形勢</sup>ノ変リニテ、内外共ホリチキノリフチングノ変ヲ起スハ万国ノ同シキ処ニシテ、支那・日本モ同様也、併ナガラ英ノ如キ<sup>公明正大之制度法令アル</sup>コンスチチユオネールノ国ニテハ、内治ノ頓ニ変スヘキ理ナキハ更ナリト雖トモ、<sup>外</sup>外交<sup>際</sup>チチフロヤチーキノウエフノ變リハ測リ難キ処ナリ、然ル処此リユツセルト云人ハ、先年ニテ久シク英ノ宰相タレトモ、元來ノ習氣ヲ備ヘタリト云、依テ今歐地無事ノ折カラ、地ノウエーレルトテール一羽ヲ広ケント云私心アリト見ユ、右ニ付今日本在留ノ英国ミニストルハレク成ル者ハ、其リユツセルク手先ニテ、兼テ支那ニ於テチフロヤチーキニ相関セシ人ト聞ク、此人リユツセルト心ヲ合テ日本ノ<sup>政事</sup>ホリチーキニシフヤ<sup>尽力</sup>ハム<sup>労働</sup>イエンセント欲スル様子也、其一証ハ日本ノセーテ<sup>精</sup>ノコトニ付、色々此人ノ骨折ニテ、政府ノ<sup>妨</sup>ヒントル<sup>調</sup>ハールヲ開タリト新聞

紙ニアルハ是ナリ、然ル処イールルリユツセル此度フ  
レミユルトナリ、愈此策ヲ遂ント欲シ、英国ヨリ秘使  
イリエム某ト申者ヲ發シ、魯國ヘ遣シタリト聞、其子  
細ハ、日本ノ交易兎角業々シカラス、此上在再打捨置  
寸ハ、何時ニ歐人フレイニハントルトレーヘンセン事  
計リ難シ、故ニ条約ヲ新ニ仕更ヘ、ノフメールハ一  
ヘンヲ開カン、夫ニ付色々ト政府ノ落度タル処ヲ取り、  
難題ヲ申出サント也、万一日本ニテ聞キ入サル寸ハ干  
戈ニ及ヘシ、左スレハ長州ノ一件ニテ日本ノ手並モ分  
リタレハ、償金ノ外策アルマシト云ヘリ、然ル処魯ニ  
テハ肯セス、魯ハ元來歐諸國ト相反シタルホリチーキ  
成レハナリ、魯ノ云フハ、我國ニテハ本ヨリ交易ヲ盛  
ニスル意ナシ、只日本ト相親和スレハ夫迄ニテ可也、  
何モ此上ウエールトノ策ヲ以テ、交易ヲ盛ニスル意ナ  
シト答タリト云、其後右英使李漏生ニ至リ其説ヲ述シ  
処、是モ日耳曼ハ今盛ンニ日本ト交易スル程ノ見込ニ  
モ非ス、又戦争ニ及タル寸遣スヘキ戦艦モ多分ハナケ  
レハ、右策ニ同セスト断リタリト聞、其後右英使和蘭ニ  
来リ候処、和蘭ニテハ正大ニ断リ云フハ、交易ノ盛ナ  
ルハ港ノ多少ニヨラス、又今日本國內ニ戦争ナドアリ、

実ニ其政府モ成シ難キノ寸ニ乗シテ、色々難題ヲ云ハ  
ンハ、我國日本ト從來相親和スルノ意ニ背ケリト云々、  
右三ヶ國共皆英ノ策ヲ拒ミタレトモ、残ル処ハ只佛帝  
一人ニテ、是ハイカ、タル決定ニ及ヒシ哉、未タ不知、  
然処愚考ヲ以テスルニ、佛ハ近來安南ノエーンフレツ  
キヲ取り、英ト相競テ亞西亜ニ手ヲ広ケント欲スルノ  
意底アレハ、如何共計リ難也、其余スハン等ハ計ル  
ニ足ラス、合衆國ヘハ英ヨリ別ニテスヘツチヲ遣シタ  
リト聞ク、是詮スル処所謂世界ノ合縦連衡ニテ、魯  
猶秦ノ如シ、英・佛ハ齊楚ノ如ク、吾日本ハ其間ニ挾  
リ鄭ノ如ク、古ハ土耳其ニテ引請シ処、今ハ變シテ吾  
邦ト成リタルナリ、此策ニ挾レハ吾對州ヲア、台、灣ノ  
ケイト唱ヘ候由、先年魯國ノ軍艦故ナク吾對州ニ据リ  
タリ、是ハ其節英ノミニストル等支那ニ在留スルモノ、  
窃ニ吾對州ヲ取ルノ計アリ、是ヲ魯ノミニストル聞テ、  
直ニ軍艦ニ命シテ、對州ニ来リ据ラシメ、對州ヲ英ニ  
向フヲ拒キタリト云、後数十日英ノ軍艦果シテ来リ、  
魯人ノ已ニ来リ居ルヲ見テ去レリト云、此説僕ハ從來  
アチラコチラニ考ヘイタレトモ、若シクハ然ラン平、  
カ、ル形勢若シ真ナラハ、吾國危急ノ秋ト云ベシ、是

ハ外国奉行へハ既ニ通セシ人アリ、日本ニテ成丈深オ  
フルレフヲ以テ謀ル可コト也、アニテ不ルス忽チ大變ヲ  
起スニ至ルベシ、英ミニストルハルクハ、此説ニ拠レハ  
信スヘキ者ニ非ス、併ナガラ又佛ノ弘法教師セントリシク杯決  
テ頼ムヘキニ非ス、必後害ヲ起スコトアラン乎、要ス  
ル処、吾国ニテハ正大公明ニシテ、欧州諸国ト直々親  
懇ヲ厚クスレハ、自ラ害ニ遠サカルベシ、

直ノ字極テ重シ、何トナレハ間ニミニストル杯且オ  
ー東印度ストインラセノ媒杯アリテハ、情意相通ス、動モ  
スレハフルスタント通ホウシシクノ悪キヨリ、色々ノ  
コト生スレハ也、右吾輩ノ在ルヲ如何トモ仕方ナケ  
レトモ、ヘ學者レールテノ心得ニモ成ルコトナラント報  
シ置ク而已、

八六ノ六

四月十四日、秋田藩士須田七郎右衛門・副田清左

衛門兩人ノ内情極密聞取ノ趣

右須田・副田兩人出府致候儀ハ、落地從來天下ノ形勢  
ニ暗ク、因循頑固ノ風不止ヲ以テ、知事深ク是ヲ慨歎  
セラレ、兩三年前ヨリ四方ノ形勢通曉ノ為、書生數人  
差出置候得共、事情形勢一ツモ知事へ通スル事ナシ、

故ニ右兩名ヲシテ、西国諸州ヲ跋渉シ、各藩ノ事情改  
正ノ政体ヲ觀察シテ、其宜キニ由リ大ニ藩政ヲ改革シ、  
陋習ヲ一洗セントノ志ヨリ被命候筋ニテ、二月中御當  
地へ罷出、既ニ西発ノ期ニ臨ミ、種々ノ事件差起リ、  
殊ニ同藩士族ノ内ニモ、御嫌疑ヲ蒙リ候面々モ有之、  
落地ノ形勢モ不穩、平素ノ次第モ有之、甚憂慮罷在候  
内、一藩中へ御不審ノ筋モ有之趣承候ニ付テハ、知事  
ノ所置此此ニテハ難相濟、実ニ日夜痛心罷在候得共、  
誰ニ向テ心緒ヲ可明哉、更ニ其友ヲ不得、殆ント方寸  
紊レントスルノ際、初テ胸臆ヲ吐露シ、大悅致シ候段  
申聞候、

右ノ諸生輩多クハ初岡・中川ノ門人或ハ縁故ノ者ニ  
テ、御当地へ差出候モ、初岡・中川兩輩ノ存意ヨリ  
出ルモノ軟、撰ノ如キハ知事ノ意ニ無之、近況知事  
ニ疑惑有之ヨリ、須田兩輩へ諸生輩ノ行跡ヲモ探索  
可致旨被命候由、

右ハ前書ノ通、諸生輩ヨリ事情形勢一ツモ知事ニ通ス  
ル事ナク、己レカ同志ト而已事ヲ謀シ意ニテ、遂ニ害  
端ヲ招クノ根本ト相成候、

此諸生輩他藩ノ激徒等ニ交リ、其徒ヲ落地へ誘ヒ或

ハ邸内ニテ会合セシ由、

此事件ニ付テハ、断然藩ニ於テ所置可致処、全ク藩庁  
官員ノ者共、大体ニ暗ク、方向不定曖昧タル情ヨリ、  
七八分ハ激徒ノ罪ヲ覆ントスル意ニテ、既ニ中川権大  
参事等、今般ノ事件ニ於テ、唯ニ輕忽ニ看過シ、表面  
嫌疑ノ筋何等ノ子細候哉ノ段、ケ条ヲ以弁官ヘ伺出、  
且知事出京ヲ願出候杯ハ、畢竟自身ノ非ヲ匿シ、又激  
徒ヲ愛スルノ知事ヲシテ、右ノ次第ヲ弁詞セシムル存  
意ト被考、激徒ヲ愛スルノ確証ハ、過日御召ニ相成候  
吉田精一郎ヲ、夜中窃ニ帰藩セシメ、小野崎信藏（強懸）一本文吉田精一郎帰藩ノ儀ハ、中村繁助・泉金三郎東京府（御召出）ニ付、既ニ当人身ニモ及テ蓋放、賄賂有之趣ヲハ、取通司（申ヨリ）立帰候ヲ、是又其低帰國致セ候事等ニ至テハ、実立、吉田何某ニテ変名ヲ唱差立候事ニ不屈ノ心得ニ付、一藩御嫌疑ヲ蒙候モ、御國当ノ筋  
ニテ、奉恐入候次第、是等ノ成行ニハ一切所置難立儀  
ニ有之、右様方向ヲ誤候者而已ニテハ、

朝旨並事情藩地ヘ相通シ候筋モ、定テ意味相違可致、  
左候得ハ、弥以藩地一統方向ニ差障候儀故、尔後如何  
ト苦心罷在候、

中川権大参事、密ニ 朝官ノ人ニ依リ、色々申拵、  
己レ一身ノ責ヲ遁レン事ヲ謀リ、将八木藤兵衛ハ相  
馬藩某ニ依頼セシ廉々モ有之由、右ノ次第ニ付、中

川・八木ノ兩人ハ速ニ御召出シ、御糺彈有之度、尤  
八木藤兵衛ハ過日御召捕ニ相成候得共、丸山外務権  
大丞ヘ全策ノ事件ノミ御調ベ有之、激徒ニ關係ノ筋  
ハ其情ヲ不被得欵、御解放ニ相成、甚タ僥倖ノ儀ト  
存候、

即今藩情ノ如キハ隔遠ノ地ニ候間、

朝廷ノ御趣意ハ深ク不奉察候処ヨリ、今般御召捕ニ相  
成候事件等ニ至テ、甚タ疑惑ヲ生シ居可申、然ルニ吉  
田精一郎・小野崎信藏等ヲ初メ、其徒俄ニ帰藩致シ、  
唯

朝廷暴政ノ趣ニ共唱候ハ、日ヲ逐テ激徒蔓延連結スル  
ノ勢ヒニ可相成ト、愁慮ニ難堪候、既ニ三月十五日、  
激徒ノ内少参事志賀為吉ヲ殺害ニ及ヒ候仕儀ニモ立至  
候得ハ、頑固僻ノ激徒ハ益是ニ雷同シテ、日々ニ相  
募可申哉ト遠察致候、

志賀為吉ハ、今般頑固ノ徒ヲ制スルノ意アルヲ以テ、  
殺害セラレ候欵、右暴徒ハ小室勝藏ト申者并外四名  
ニテ、小室ハ其場ニ於テ、志賀為吉悴同苗源吉ト申  
者ニ討レ即死致シ、外四人ハ逃帰リ一同割腹イタシ  
候趣、其党尚数人可有之、殺害ノ趣意ハ酒狂ヲ以口

実ト致候由、尤無謂事ニ候、右ノ事件御当地藩邸ニテ深ク秘候由、

前文ノ姿ニ候得共、知事ニ於テハ、深ク御当地ノ情ヲ承知無之儀ハ必然ニテ、妄ニ中川等カ私情ノ取計ヲ以申送候事ヲ信用シ、自身出京致委曲

朝廷へ弁解致候テハ、藩中ノ御嫌疑一朝ニ氷解可致ト、一凶ニ存込被居候儀ト被考候、左候得ハ知事ニ於テ、事情案内故トハ乍申、斯迄国家ノ大害ヲ醸シ候儀ヲ承知無之ハ、職分ニ於テ難相濟、其實素ヨリ不可遁候得共、懸隔ノ地故情実難通、殊更中川等カ私情ヲ以擁蔽、終ニ因テ知事ノ罪ニ帰候訳ニ立至リ候儀、兩人ニ於テ実ニ痛悲慨歎ニ不堪候、然処前件ノ情実ニ於テ、深く勘考致候得ハ、今日ノ事容易ニ弁解坏致候ハ、深く恐入候儀ニ付、寸刻モ早く即今委曲ノ情態ヲ知事へ報知イタシ、暫時ノ間出京ヲ止メ、藩ニ於テ深く身反身責シ、断然被致所置候上速ニ出京ニ相成、職分不行届ノ罪ヲ闕下ニ被相待候様有之度トノ存念ニテ、兩人志ヲ合セ周旋尽力致度候得共、前頭ノ通藩邸方向違却ノ者共、却テ右兩人ノ意中ヲ探索イタシ候程之事ニ付、藩邸中ニ於テハ、互ニ其本意ヲ談候儀難相成、黙止愁慮、是

迄窃ニ邸外諸方ニオヒテ、密議致シ罷在候、然ルニ今日ノ勢徒ニ愁慮致候迄ニテハ、何ノ甲斐モ無之、速ニ藩地へ立帰度存候得共、元来右兩人ハ西国遊ノ命ヲ奉シ出京致候ニ付、只今帰藩ノ儀申出候共、中川等狐疑ノ念ヲ抱キ拒可申候、

彼等右兩輩ノ志ヲ察知致候ハ、却テ固結シ益害ヲ招可申ト案勞致候由、

若無謂帰藩イタシ候得ハ、脱走ノ姿ニ相成、遂ニ中途ノ奸賊ニ擁蔽イタサレ、其志ヲ不達ノミナラス、遂ニハ不測ノ事ニモ到ルヘク、去迎朝旨并事情委細知事へ不申聞候得ハ、奸徒術中ニ陥リ、何ノ所置ナク徒ニ出京イタシ候ノミニテ、弥以恐入候儀ニ有之、素ヨリ身ヲ殺シテ恢復ヲ謀候ハ、其分ニ安候儀ニ候得共、事ヲ不遂シテ空敷倒候ハ、実ニ千歳ノ遺憾ニ存候ニ付、御当地ニテモ出没其疑ヲ避ケ、種々苦慮罷在候得共、心緒ヲ語候人無之、所置ヲ可謀友ヲ不得、知事出京ノ期モ相迫リ、切齒痛憤日夜寢食ヲ難安、依之如何様トモイタシ、一応帰国ノ上、知事へ申聞同志ノ者共ト協力致シ、一刻モ 朝廷御手障ノ筋ニ不立至、御安慮被為在候場合ニ運候様有之度、切迫ノ

至情ニ候得共、前頭ノ次第ニテ、帰藩ノ名義無之、最早此上ハ術尽キ策究リ候場ニ至リ、誠ニ在カタク何トモ口外モ致兼候得共、仰願クハ参議公ノ御内ヨリニテモ急速立帰、尽力致候様、御内命ヲモ蒙候儀ハ被為叶間敷哉、万々一左様ニモ有之候得ハ、一身ノ儀ハ譬窃ニ藩邸ヲ脱候トモ心底安着致シ、死ヲ以相尽可申、知事ニ於テモ奮発興起断然ノ処置可致見込ニ候、右ニ付テハ、

大参事

須田政三郎

非役士族

澁井内膳

中安泰次

戸沢ト申処ニテ二大隊ノ兵ヲ預居候由

此輩ト共ニ事ヲ謀リ、藩中ヲ一洗シ、方向相改候様周旋尽力致度旨申立、落涙ノ体ニ見受申候、右聞取候俟書付差上候也、

辛未四月十五日

八六ノ七

名古屋藩建白

臣慶勝謹テ案スルニ、今日ノ勢ヒ治途一轍ニ序シ、偏

重ノ害ナカラシムルヲ以テ、大大緊要事トセリ、今夫人ノ四肢一処ノ康健ナルヲ恃テ、身ノ安全ヲ保ツヘカラス、一府ノ能ク治リ、一藩ノ能ク強ク、一県ノ能ク安ク、未タ以テ、全国ノ殷富ヲ論スヘカラス、宜シク君民一様遵守ノ標的ヲ立テ、危疑ノ念ヲ絶テ、堅根固帶五指交弾ノ力ヲ一挙ニ集ムヘシ、因テ其大綱ヲ五条ニ掲ク、其細目ノ如キハ、

朝廷採択ノ日ヲ待テ、逐条ニ之ヲ奏セン、

第一条

各地方学校ノ制ヲ一ニス、

教学ノ道多岐、終ニハ天下ノ人才ヲ誤ルモノ尠カラス、今一学制ヲ立ツルハ能ハスト雖トモ、至適ノ方  
法ヲ定メ、各地方ニ令シ逐次施行セシムヘシ、

第二条

天下ノ人才ヲ収攬ス、

藩々多クハ官内ノ人才ヲ用テ、他ノ官内ノ人自ラ彼我ノ区別ヲ生シ易シ、自今偏党ノ私ナク人才ヲ登用シテ、各地方政庁ニ、至ニ在職セシメ、万里同軌ノ地ニ至ラシムヘシ、

第三条

要地ニ兵ヲ置、

各藩之兵ヲ収メテ、兵部省ニ管セシメ、八道喫緊ノ要地ニ分附スヘシ、其費用ノ如キハ、各藩管内ノ高ニ照準シテ、コレヲ大蔵省ニ完納セシムヘシ、

#### 第四条

一州一知事ノ制ヲ定ム、

藩ニ大小アリ、一藩ニテ数州ヲ管轄シ、或ハ一州ニ数藩ヲ碁布ス、自ラ治民ノ術多途ニ別ル、今一州ニ一知事トナストキハ、民政尽一ニ帰シ、人心向フ所ヲ知ラシメ、官職世襲ノ弊ヲ革除スヘシ、

#### 第五条

華族給禄ヲ均フス、

華族給禄ノ多少均シカラス、適宜ノ方法ヲ立ツヘシ、然レトモ以テ永世ノ制トスルニアラス、終ニハ文明ノ化日ニ睦シ、禄位ヲ去リ、世襲ニ安ンスルコトヲ期待スヘシ、

臣区々ノ微衷ヲ布ク、退テ省スルニ、地官ノ敢テ論スヘキ処ニアラス、恐悚罪ヲ俟ツノ外他ナシ、然レトモ多年非常ノ優恩ヲ荷シ、未涓滴ノ報効ヲナス、今夫外ニ強國要盟結信ノ事アリ、内ニ 皇上銳意國治ノ勞

アリ、老嫗ノ微軀偷息屈首<sup>首カ</sup>安佚ヲ其間ニ求メンヤ、依テ大參事志水忠平・丹羽賢等ト議シテ、赤誠ヲ表シ、犯分上言罪死ニイレズ、臣激切屏宮ノ至リニ堪ルコト無シ、誠恐誠惶頓首敬白、

辛未四月

名古屋藩知事徳川慶勝

弁官

御中

八六ノ八

市來四郎建言

國之盛衰強弱ハ必ス貧富ニアリ、故ニ富國強兵ト云ヘリ、之レ和漢洋古今同一ナリ、又威力強逞ナラサレハ、内ハ流賊奸民ヲ制馭スルコト能ワス、外ハ宇内ノ交際ヲ全フシ、國体ヲ保持スルコト能ワス、交際ハ宇内ノ大道ナリ、獨立鎖鑰ハ大道ニアラス、爰ヲ以兵士ヲ愛養シ、器械ヲ充具シ、不虞ノ變難ニ備ル事、國家維持ノ要綱ニシテ、一日モ忽セニスヘカラサルナリ、其根源ハ國ヲ富マスニアリ、其本ハ逸遊徒食ノ人民ナキニアリ、如何官庫充實スト雖モ、一時變災ニ中ツテ耗散スルトキハ、至急充補スルコト難カルヘシ、是故ニ古人モ民富ムト云ヘリ、之レ政府ノ違忌スヘカラサル



語ニシテ、勉メテ逸遊徒食ノ民ナキヲ要シ、農工商ノ  
 三民ヲ勸導シ、一夫モ逸惰ニ消光セサルヲ教ヘ諭シ、  
 法度ヲ設テ保護スルハ政府ノ任、政府ハ之レヲ勤ムル  
 ヲ以任ノ要トス、故ニ民ニ臨ニ信愛ノ二ツヲ以テシ、  
 幼兒ヲ育教スルト同シク、勉テ職業ノ勸導怠ルヘカ  
 ス、然ルトキハ遊惰ノ逸民ナク、国富ハ勿論ナリ、古  
 人ノ云ヘル如ク、非信無以使民、非民無以守国、治道  
 必先教化ト云ヘリ、然レハ淺民陋夫ニ職業ヲ勸導スル  
 モ、教化ノ一ニシテ、即今ノ世態必スナカルヘカラサ  
 ル者ナリ、情本邦近世ノ況勢ヲ見察スルニ、開港以來  
 物価騰貴、万民塗炭ノ苦ヲ受ケ、加之十二三年前ノ頃  
 ヲリ今日ニ至ル迄、人心動揺騷擾絶ルコトナキトモ云  
 フヘキノ世態ニテ、上下ノ困弊実ニ云フヘカラス、殊  
 ニ東西兩京ハ、二百有余年至治ノ化ニ浴シ、貴賤トモ  
 ニ奢侈驕惰ノ風ニ流レ、逸遊徒食ノ輩多ク、何ヲ以テ  
 生業ト云モナク活計セシ者少カラス、今日ニ至リ生計  
 ノ資ナキ者夥シク、男女共ニ醜惡ノ道ニ陥リ、或惡事ヲ  
 ナシテ繫獄ノ者、東京中ニテモ殆ソト千ヲ以テ數フル  
 ト聞ク、誠ニ歎息ノ至、政府ニ於テモ苦心セラル、御  
 事ナルベシ、殊ニ開港以來輸入ノ品夥シク、旧來ナク

テモ濟シモノ多ク舶來シ、其中ニハ全ク無用ノ遊器玩  
 物モ鮮カラス、貴賤共用ヒ初シ上ハ、再ヒ止メ難キ者  
 モ又少カラス、況ンヤ之レヲ禁輸スルコト能ワサルノ  
 勢ナレハ、如何トモ為シ難シ、近ク支那ノ覆轍ヲ考ル  
 ニ、阿片ノ毒品サヘ輸入ヲ絶ツコト能ワス、遂ニ大乱  
 ニ及ヒ、即今ノ況勢ニ立至レリ、我國ニ於テモ無用ノ  
 弄品ト云ヘトモ、禁輸ノ制ハ抑モ下策ニシテ、却テ国  
 家ノ損トナルベシ、然リト雖モ、今形有用無用ノ差別  
 ナク輸入夥シキニ於テハ、國家ノ損亡一年ハ一年ヨリ  
 増長シ、益人民ノ疲弊ヲ重ルヨリ外ナク、政府心ヲ用  
 ラルヘキハ此事ナルヘシ、因テ輸入品ノ内模製効造シ、  
 其用効異ナラサルモノハ、悉ク国製ノ道ヲ開カルヘシ、  
 之レ民ニ恒ノ産ヲ得セシメ、徒食ノ者ヲ減スルノ一策  
 ニシテ、富國ノ根本トモ云フヘシ、就テハ百般ノ事業  
 産物成製ノ教授所ヲ開カレ、望ノ者ヘハ、貴賤男女老  
 幼ニ拘ワラス懇篤ニ示教シ、且其方法ノ書ヲ与ヘ、教  
 授ニ就テハ、其局ニ於テ細小ノ仕掛ヲ以テ現事ヲ施シ、  
 或ハ手術ヲ働ワセ、道理ヲ説講シ、熟得スルヲ專要ト  
 シ、或器械ノ雛形図面等モ与ヘ、或農耕ノ器械、或鋳  
 類分析採聚ノ法、或藥品製煉ノ術、或薬用品草木土石

ノ採扱、或皮革ノ鞣消、或布帛紡績染彩ノ諸法、或日用飲食酒醬類ノ醸成、或武器製造等、其他細大ノ事業悉ク人生必要ノ事ノミヲ教授シ、又ハ從來為シ來レル物品生産ノ製法等、即今ニ至リ日備給金諸物価以前ト比スルニ、甚タ高騰シ、夫レ為ニ品物ノ元価貴ク売鬻ノ場ニナリテ曳合兼、適々生産モ益減シテ棄廢セシモ少カラサルアリ、之レハ兎角ニ人手ノ触ルヲ減シ、器械ヲ用ヒ、或理化学ヲ学ヒタル者ハ、ヲノツカラ施術モ簡易ニシテ、誤謬費失モナク、或從來ノ仕方ニテハ、全ク棄捨シタル余残物等ヲ以テ、有用ノ品ヲ製シ杯、如何ニモ化学ノ理上ヨリ出タルコトハ損耗ナク、随テ元価モ廉ニシテ移多ク、人々競テ生産蕃殖スヘシ、從來ノ事業ハ何ニ由ラス理學上ヨリ為スコトナク、唯ニ口伝手術ノ授法ニテ、道理ニ暗キカ故、一タヒ施法ヲ謬ルトキ、還元軋製スルノ理ヲ知ラス、全ク廢捨損亡ニ至ル、如此クナルカ故ニ、生産少シク適天賦ノ良産モ人知ノ足ラサルヨリシテ、空シク無用ニ属スル者多シ、之レ理化学ニ暗ク、又ハ人力ヲ竭サ、ルト、政府心ヲ用ヒサルニアリ、爰ヲ以テ百物悉ク外国ニ購求シ、国財日々彼ニ占メラル、嘆息ス可キ事ニアラスヤ、細

少ノ品ト雖モ國産スヘキ者ヲ、他邦万里ノ外ニ求メテ國用ヲ足ス、愚ト云フベシ、況ヤ國ノ疲弊ヲ為ス、実ニ傍觀スヘキニアラスヤ、自今購求スルハ僅々少ナリト雖モ、年ヲ積ンテ之ヲ算計スルトキハ、莫大ノ數ナルヘシ、万石ノ米粒モ一粒一抄ヨリ積量ス、然ルニ輸入ノ品有用無用ニ限ラス、細大之ヲ量算スルトキハ、國家ノ損亡夥シキナルヘシ、西洋諸州ノ事ヲ伝聞スルニ、日ニノ發明ノ品多ク、或旧來ノ方法ヲ改革シ、費用ヲ省キ杯シテ、生産日ニ月ニ増シ、徒食ノ民ナキヲ要シ、人民競テ生計ノ道ヲ勤ム、実ニ開化ノ域ト云フヘシ、因テ我國モ彼ニ倣ヘ学ヘキハ富國強兵ノ二ツヲ專トスベシ、故ニ右ニ論セシ如ク、産業教授所ヲ建ラレ、洋學者或理化学者・器械學者又ハ倭漢諸國ノ識者ヲ置テ、教導ヲ初メラレタラハ、諸授ヲ願フモノ多カルベシ、然ルトキハ、年ナラスシテ人々一生涯ヲ得、逸遊徒食ノ輩減スルコト疑ナシ、貴賤共ニ一己獨立シテ生計ヲ營マンコトヲ欲スハ、人情ノ常ニシテ、奴婢僕隸ニ終身苦仕セラル、平、或路街ニ乞食スルヲ好ムニ非ラサルハ素ヨリ論ナシ、故ニ上下ノ人情ヲ以テ考フルニ、如此教授ノ道ヲ開カレタラハ、人々一稼業ヲ

得テ、一己一家ノ力ヲ尽シ、競動シ生計ヲ為スニ至ルベシ、右ノ如キ途開ケルトキハ、後生産大ニ蕃殖シテ、西洋各国ニ比肩スルニ至ルベシ、全体本邦ノ人ハ伶俐ニシテ、知覚鋭敏ナレハ、右通り教育シタラハ、新ニ發明ノ品モ必定出ルナラン、富国ノ本源ハ、産物多ク輸入少シク、輸出ノ多ニアルハ論ヲ俟ス、日本ハ氣候暢和寒暖度ヲ失ワス、人種敏健ニシテ、五大洲中比肩ナキ美良ノ国ナレハ、国人勉メテ生業ヲ怠ラス、文学ヲ勤ルトキハ、外国ニ冠タル富強国トナルハ明ナリ、願クハ当路ノ諸賢瞬間モ怠リ玉ワス、富国ノ途ヲ開カル、コト、真ニ即今急務中ノ急務ナラン、然リト雖モ寬急輕重ヲ弁シ、順序ヲ明ニシ、施行セラル、コト專一ニシテ、先ツ右ノ如ク、人々一家一己ノ生計ヲ初メニ開導シ、逸遊ノ徒民ナク、民恒ニ菜邑アルヲ要目トシ、而シテ後広大ノ業ニ手ヲ下タサルヘシ、然ルトキハ初終失欠損耗ナクシテ、後大ナル国益ナルヘシ、遊民ノ多キハ政事ノ欠典ニシテ、之レヲ減スルノ策ヲ建ツル、古ヨリ多シト雖モ、其実功ヲ見ルコト鮮シ、今西洋各国開化文明富強ノ国、都テ産物ニ富マサルハナシ、而シテ遠ク万里ノ波濤ヲ犯シ、販鬻ノ道ヲ盛ニシ、

兵威ヲ熾張シ、宇内ニ縦横跋扈スル者ナリ、其威力ノ盛ナル、其侵奪ヲ熾ニシ、其境域ヲ曠弘スル、其開化ヲ進メ文芸ヲ勉励スル、皆富饒ノ致ス処、其本源ハ理化ノ二学ヲ勤メ、事々物々道理ヲ明ニシ、而シテ物産ヲ増シ、国民富テ風俗正シキニ至ル、則チ衣食足テ後采ヲ知ルト云ヘリ、今我国ニ外国ノ物品輸入スルノ數凡細大一百八十余品、些少ノ者ハ幾千カ知ヘカラス、輸出スル數ハ凡六十余品七十品ニ上ラス、其一百余品ハ我ノ損耗ニシテ、膏血ヲ絞ラル、トモ云フベシ、僕カ所見ニテハ、一百八十余品ノ内、其八十余品ノ細物ヲ劬製シテモ、輸入夫丈ケ減シ、我ノ膏脂ヲ絞ラル、ヲ少フスル、巨大ノ国益ナルベシ、而シテ日ヲ重ネ年ヲ積ンテハ、ヲノツカラ施法手術モ練達シ、国用ノ外ハ却テ外国ニ輸出スルニ至ルヘシ、仮令輸出スルニ至ラストモ、在留ノ外国人仕用ニ売販スルモ国益ナリ、尤モ徒食ノ遊民少シニテモ減スルハ、政蹟ノ美ト云フベシ、故ニ政府勉メテ勸導セラルヘキハ此事ナリ、中ニモ大小礮、彈丸、硝薬ハ、国家保護ノ要品ナレハ、即今ノ如ク、外国ニ求ムルハ甚迂策ニシテ、穀塩ヲ他邦ニ仰求スルニ同シ、殊ニ發明モ月二年ニ盛ナリテ、利

器出レハ方今ノ世態是非求メサルヘカラス、求ムルニ中ツテハ、海内ノ兵員凡百万ト算シ、其価金夥シキ数ナリ、当今李佛戰爭ヨリノ發明ノ利器モ、種々出タル由ナレハ、近年中ニ之ヲ買ニ国財費ルノ非已ニ顯ワレタリ、之ハ兵部ノ諸官早く注目セラレテ、国製ヲ開カ、コト重要ナリ、或結社ノ力ヲ以テ、百物製造スルニ至ラハ、富国ノ元根初テ定テ、日ヲ追テ富強ノ途ニ赴キ、而シテ民ニ富豪ノ者輩出スヘシ、其時コソ民富君富ノ体定テ、官ニ非常ノ用費アルトキハ、国債ヲ為スノ良法モ立ツヘシ、右ハ些少枝葉ノ事ノ如シト雖モ、之ヲ海内一般又ハ数年ニ巨算スルトキハ、莫大ノ損耗、殊ニ人々竭力尽心シテ、出来セサル者ハ天度ト地味ノ異ナレルニアリ、因テ産セサル者ハ貿易ノ道アレハ、他ニ求メサルヘカラサルハ、自然ノ道理ナレトモ、人々心ヲ用ヒ、又ハ政府勸導行届クトキハ、後日西洋ニ肩双スルニ至ルハ疑ナシ、故ニ当路ノ官々深く心ヲ用ヒラレ、厚ク商議セラレテ、教授所ヲ設ケラル、コト、即今民政ノ急務ハ勿論、交際ニ就テノ要目ナラン、目前ノ利ハ素ヨリナシト雖モ、十年ノ後ハ、果シテ大ナル国益ヲ見ルニ至ルハ顯然ナリ、之レ大学校

ヲ設テ教化ヲ布キ、人才ヲ育生セラル、ト同ク、国ヲシテ宇内ニ冠タラシメ、治道ヲ正フシテ蒼生ヲ安ンセラレントノ外ナケレハ、之ト並ンテ浅民陋夫又ハ工商ヲシテ、生計ノ道ヲ勸導セラル、トキハ、上下共ニ各恒ノ産ヲ得テ、而シテ国家ヲ保護スルノ途立ト云フベシ、実ニ民政ノ大本ニシテ、此世態一日モ早く御設アラマホシキ事ナリ、御入費モアルヘケレトモ、如何ニモシテ御繰合セ、假令債財ヲ以スルトモ設ケラレ度、即チ之ヲ小ニシテ語レハ、子ヲ教育スルニ入費ヲ厭ワサルニ同シク、当今貧困ノ輩ヲ救育セラル、尤モ至仁ノ御事ナリト雖モ、姑息ニシテ右ニ論スル処大ナルハ、全国富饒安民ノ基礎トナリ、広ク宇内ニ并立交誼ヲ全フシ、国威ヲ海外ニ光輝スルニアリ、又小ナルハ一家一人其処ヲ得テ、廉節ヲ知り、国恩報酬ノ道ヲ知ラシムルニアリ、且都下ノ人情ヲ見察スルニ、何乎生業ヲ初メ、一己独立ノ活計ヲ営ンコトヲ企望スル者多シ、然リト云ヘトモ其方法ヲ知ラス、其書ヲ得テモ現施ノ試験ヲ為スコト能ワス、嘗ニ焦思消光スルノミ、中ニ毛片鄙遠境卑賤ノ輩ハ、尚更唯ニ志アルノミ、夫故国製スベキ生産モ増殖セス、其上輸入品ヲ倣造模製シ、

舶来ヲ逐却スルノ策未タ立タサレハ、速ニ此局ヲ設ラレテ、教授ノ道ヲ開カル、コト急務中ノ最モ一ニシテ、治国安民ノ本トモ云フベシ、就テ建局ノ体裁愚考スル処凡左ノ如シ、

一此局ヲ建設セラル、ハ、農工商ノ三民ニ各其職業ヲ勸導シテ、人々天稟ノ職掌ヲ竭シ、国恩酬報ノ途ヲ教誘スル目的ナレハ、弘ク宇内ノ良法ヲ採シ、或ハ土地人情ニ応シテ折衷シ、国益ヲ謀リ、逸遊ノ徒民ナキニ至ルヲ專要トシテ、規則ヲ設ケラルヘシ、

一此局ハ大学東南校ニ次テ、浅民陋夫ニ活道ヲ得セシムルヲ教導シ、或国産ヲ増シ、外国並立交際ヲ弘フスルノ基局ナルカ故、成ルヘクハ財費ヲ厭ワス、速ニ設ケラルヘシ、尤モ民政部ノ関轄相当ナラン、

一和漢生産ノ道細大共ニ製成ノ良カラサルヲ成シ、不開ヲ開製スルヲ專ニスベシ、

一洋学者ヲ置テ、諸芸術・専匠・製煉・物産・農耕・鉦山或ハ商売学ノ諸書等ヲ翻譯スベシ、

但訳文ノ体裁ハ愚夫・愚婦モ了解シ易ク、成ル丈ケ和語ヲ用ユルヲ要ス、中ニモ商法学ノ諸書ヲ蕃訳シ、商賈ヲシテ宇内商業ノ体裁ヲモ知ラシムヘシ、

一關係ノ人ハ洋学者ニ限ラス、和漢物産家或ハ水利・堤防・鉦山・農耕・租税・營繕等、一切人生必用ノ現事、或ハ心得アル者ハ、教官ニ置ラルベシ、

一日本從來ノ諸工芸或農耕・水利・堤防・租税、其他国体風土人情ニ適合シ行ワレ来リシ方法モ、即今ニ至リ一向ヲ洋法ヲ主張シ、固有ノ法廢絶スルモ計ルヘカラス、故ニ前章ノ如ク、從來ノ法モ教授或書類モ備ヘ置テ、旧法ノ宜キヲ採存シ、弘ク折衷スルトキハ、一種ノ良法モ建ベシ、

一何事業ニ依ラス、請教致度者ハ其局ヘ推參シ、身元国邑是迄ノ職業等詳記シ、何事業受教致度旨直ニ申立、其長官聞届、則ヨリ入寮為致現施示教シ、或ハ書ヲ以説講等至テ簡易ノ法ヲ設ケラルヘシ、

但入寮ノ規則、或ハ月俸等ノ諸事ハ、大学東南校等ニ法ラルベシ、

一事業教導ニ就テ、藥品其他ノ入用ハ悉ク官費タルヘシ、勿論受教ノ者ハ、自ラ其業事ヲ為サシムベシ、

一其出来ノ品物ハ、受教ノ者ヘ廉価ノ申受、又ハ局ヨリ望ミノ者ヘ申請サセルモ時宜ニ随フベシ、  
一諸器械ハ相当ノ価ヲ以申受サスヘシ、

一 雛形図面等ノ者ハ、何ニ依ラス製造シ、望ノ者ヘ相当ノ価ヲ以申受サスベシ、

一 鉛字版ヲ以テ、諸彙訳書ハ勿論、現施試験書等、何ニ依ラス人生必要経済ノ書類ハ、悉ク摺出スベシ、価ハ決テ高直ナルヘカラス、

一 農耕ノ弁利ナル器械、或ハ牧畜或伐木鋸断等ノ諸器、其他一切人生必要ノ者、雛形或ハ図面ヲ製シ、望ノ者ヘ申受サスヘシ、

一 洋籍之内理化ノ二学書或器械・農耕・植物・鉱山、諸専匠ノ芸術・布帛・紡績・諸染彩、其他何ニヨラス、人生ノ資用トスル書類、悉ク備ヘ置ルベシ、

一 和漢ノ書モ人生必要経済ノ書ハ、何ニヨラス新古ニ拘ワラス悉ク備ヘ置ラルヘシ、

一 民部省又ハ東京府ノ官々關係シテ、<sup>(總)</sup>信切ニ事ヲ裁扱シ、幼児ニ事業ヲ教導スル如ク、懇教スルノ趣意專一ナルヘシ、

一 何事ニ依ラス事業練熟シ、人生ノ用アル品製造スルニ就テ、社ヲ結ヒ盛大ニ取建ル者ハ、西洋ノ法ニ倣ヒ、年限ヲ定メ株式<sup>パテント</sup>免許セラルベシ、

一 何事業ニ依ラス受教セシ上、盛大取建ルニ付テ、尚ホ

指南ヲ受シカ為、教官其國所ヘ出張ヲ願フ者アラハ、

旅費ハ願人ヨリ半ハヲ官ヘ納メ、半バハ官費タルベシ、一 鉱山ハ山相ノ検査モアリテ、初ニ相山シ、或ハ鉱石分析採聚、又ハ善惡ノ見止等モ專一ナレハ、教官ノ出張ヲ願者アルニ於テハ、旅費前条同様ナルベシ、

一 何ニ依ラス、人生必用ノ器械・品物・書籍等發明或著出セシ者ハ、書籍四五部、品物ハ試倣ニ充ツヘキ文ケヲ民部省ヘ差出スベシ、格別ノ品ハ株式免許セラルヘシ、

但書籍ハ民部省・大学校并ニ教授所ヘ一部ツ、納メ置クヘシ、

一 此局ハ永年ノ設ニアラス、今ヨリ十四五年、或二十年ヲ限り、開化ノ途進タル後ハ止マラルヘシ、唯即今前論ノ如ク、輸入夥シク國家ノ損耗甚シキカ故、一日モ早く輸入ヲ減シ、且遊民ヲ少フシ富強ヲ謀ルノ階梯ナレハナリ、

一 洋人テコノロギリ一 註百工製造学、諸事練達ノ者一 課一兩人ツ、雇ワレ教師ニ置ルヘシ、

但雇人ニ就テ一課ノ者一兩年ヲ期シ、転替雇フノ目途ヲ建ツヘシ、

右粗其概略ヲ挙ク、細目ノ如キハ、当路ノ人ニアラサレハ、其当ヲ尽スコト能ワス、故ニ贊セス、

一右ニ論セシ如ク、國産多ク出ツルニ中テハ、素ヨリ売販ノ道モ弘ク、宇内ノ法ヲ取捨シ、民ニ利權ヲ与フルノ策ヲ立タスンハアルヘカラス、則西洋ニ行フ処ノ如ク、輸入品ノ税ハ必ス高クシ、輸出品ノ税ハ易フシテ、民ヲ利スルノ權道ヲモ用度事ナリ、然ルトキハ輸入ノ品ハ自ラ高直ニシテ、国人之ヲ買フコトヲ厭フ、輸出品ノ税ナキトキハ、其税丈ケ易ク売出シテ、買フ者多乎或ハ利多キ乎、故ニ生産益進ミ、随テ鬻売ノ道盛ナルノ道理ナリ、西洋ニ於テモ、此法ハ公法ニ非ストノ論モアリト雖モ、即今我國ノ況勢ヲ以考フレハ、姑ク如此ノ權道ヲモ用ヒ、輸入ヲ減シ我國産ヲ増シ、民ヲ利スルノ法ヲ用ユルニアラサレハ、富國ノ本立ツテ、國民ヲシテ開化ノ域ヲ踏マシムルコト不能ベシ、方今我國ノ急務ハ、富國強兵ト教化ノ三ツニアリ、教化ノ中ニ此教授局ヲ設クルコト、尤モ速ナルヘキナリ、又三策ノ中ニ片時モ怠息放置スヘカラサルハ、富國ノ策ヲ一ニシテ、而シテニ教化・強兵ト順序ス、富國ノ本ハ遊逸徒食ノ民ナク、匹夫・匹婦モ生業ヲ勉強シテ

産物ヲ増シ、輸入ヲ減シ却テ之ヨリ外國ニ出シ、彼ノ膏油ヲ我ニ台ムル策ヲ用ユルトキハ、自ラ國富民饒、

(管九)

随テ兵強器械充具威力熾挙、宇内ニ冠タル威力備リ、真ニ並立交際ノ典初テ立ツベシ、然ラサレハ即今ノ況勢ニテ如何ニ刻苦焦慮、闔國ノ人民同協勸心シ、並立交際ノ策略ヲ施スト雖モ、輕侮ヲ受サル道恐ラクハ立難ラン乎、故ニ当今ノ急務ハ、饒民富國ノ二ツヨリ急ナルハナク、而シテ逸惰徒食ノ民ナク、産物盛殖シテ富饒ナルハ論ナシ、其時ニ至テ政府益民ニ臨ムニ信誠ノ二字ヲ以シ、國債ノ法ヲ行フニ至ラハ、如何ナル不虞ノ變災アリテモ、官庫空虚一円金ノ貯蓄ナシト雖モ、素ヨリ憂フヘキコトニ非ス、西洋各國多少國債アラサルハナク、非常ノ費用ハ總テ國債ヲ以弁スト、実ニ民富ハ政府富ムノ現蹟ニシテ、流賊奸吏ヲ制駁スルニモ、外寇仇敵ヲ討征スルモ、皆国内四民挙テ竭力シ、兵ハ鋒鏑彈丸ヲ浸シ、農工商ハ財貨ヲ償出シテ用費ニ充テ、全力ヲ以スルノ法真ニ良法ニアラスヤ、願クハ我國モ之ヲ倣テ、國威ヲ海外ニ輝スノ元基ヲ建ラレンコトヲ企望ス、

一西洋各國ニモ農耕或百物製造ノ学校ヲ設ケテ、所好ノ

者へ教授スルノ設アリト、彼開化ノ域モ如此ナルニ於テハ、今我國ノ況勢ニテハ、尚更此ニ倣テ速ニ設ラレテ、一日モ早く国民生業ノ道蕃殖スルノ御所置アラマホシキ事ト存候、

一右ノ如ク生業トスヘキ事ヲ勸導スルニモ、開化文明ヲ進ムルニモ、国体ト人情時勢トヲ審察シ、寛急輕重ヲ弁シ、順序ヲ經テ教導セサレハ、却テ害ヲ生スル者ニテ、海外諸邦ニモ其例往々尠ナカラス、素ヨリ此教授局ハ浅愚卑陋ノ人ヲ教誘スルコトナレハ、幼児ヲ教育スルト同シク叮嚀懇篤ニ示教シ、局ノ規則モ簡易便捷ヲ旨トシ、人ヲシテ倦勞セサラシムルヲ要スベシ、

一此程ヨリ授産所召建ラレ、紡績染彩縫工等ノ諸業教授ノ設アル由ニ聞ユ、如何ニモ良法ナレトモ、伝聞スル姿ニテハ、全ク從來ノ方法ノミニテ、普ク全国ニ及シ、輸入品ヲ倣造模製シ、民饒富國ノ大策ニハ未タ至ラサル哉ニ聞ユ、因テ爰ニ論スル処、前説ノ如クナレハ、專ラ理化ノ二学ニ基キ、千緒万方人生必要ノ品物、人力ニ罹リテ調成製立スベキ者ハ悉ク造成シ、人力ヲ竭ストキハ、渠ニ并肩スルコト能ウヘキナリ、願クハ当路ノ人々爰ニ注目アラマホシキ事ナリ、

一当分東京中ニテ、諸製造品等産業トスベキ事ヲ心得タル者、或洋学者等ニ伝習ヲ講スルニハ、過分伝授料ヲ出ササレハ、教ヘサル惡風アリト聞ユ、伝聞スル処ニテモ、牧牛会社地内ニテ馬鈴薯酒ヲ製スルニ、其伝授金百五十円ツ、ヲ出サシムルト、近頃ヨリ名ヲ替テ修業中器械料ト名ケテ、一月廿五円宛ヲ出シ、凡六ヶ月ニシテ皆伝シ、夫ノミナラス、入塾中ノ月俸五円宛ナリト社頭岡部文藏ト云者ノ所、為ト聞ニ本群和田ノ藩士、或唐芋焼酎ノ製醸ハ、湯島天神辺ニ居住何某トカ云者伝習ノ売法ヲ為ス由、之ハ二百五十円ヲ出サセ、既ニ五六人ニ教ヘシ由本静岡藩竹中某ナル者ハ、三百五十円ヲ出シテ、既ニ伝習セシ由、或ビール・ブランテン其他洋酒製醸方ハ、品川駅本仙臺邸ニテ伝習スル者アル由、之ハ一種ノ伝授料一百円宛ト定価シ、皆伝ノ上モ三ヶ年間ハ謝金ノ約束モ証書ヲ出スト佐土原藩者モ伝習ヲ講セシニ、此説ヲ聞テ恐レテ止メタリト、其外舶來ノ諸細品等皆如此ノ惡弊アリト聞ユ、右通人々稼業ヲ開カントスレトモ、伝授料ヲ出シ、其最后一店一業ヲ開クニモ本手金ノ入用旁才覚調兼ネ、適々志アリテ、生業ヲ管ント欲スト雖モ、為スコト能ワサルアリト、如此ノ惡弊アリテハ、輸入品ヲ倣製シ、淺民愚夫モ活道ヲ得ルコト能ワサルノミナラス、輸入品ヲ減シ、国家



ノ損耗ヲ防クノ道ヲ閉塞ス、唐芋焼酎サヘ右ノ如キ過分ノ伝授金ヲ取ル、実ニ笑フニ耐ヘサルコトナリ、況ヤ洋品ノ製造ハ甚シク秘密ニスト、此一細事ヲ以テモ、右通リノ悪弊アリテ開業ノ妨ヲナス、罰スヘキ山子<sup>(第九)</sup>ニ非ラスヤ、少シク理化ノ二学ニ罹レル者ハ、押シテ知ルヘキナリ、依テ一日モ早く教授局ヲ開カレンコトヲ禱ル、之レ人民ニ活道ヲ得セシムル要事ニシテ、經濟ノ基本ニアラスヤ、

一 英国・和蘭等ハ、元来土地瘠瘦産物少シ、故ニ商業ト工職ヲ以テ建國スト、米・佛・伊・太・利・亞等ノ如キハ、産物ヲ以テ建ツト、何レノ國ト雖トモ、生産ト商法ノ二ツヲ以建國スル者ナリ、我國ハ土地肥沃、氣候良和、産物豊饒、人種敏健ニシテ、実ニ天賦ノ良國ナレハ、此上人々文学ヲ勤メ、生業ヲ勉強スルトキハ、國富ハ勿論ナリ、如此美良万物備具セル國体ナルニ、貧困ニシテ百事アカラサルハ教化足ラス、人々職業ヲ勉強セサルニアリ、其教化ノ足ラサルハ政府ノ責、人々怠慢ナルハ、又教化ノ密ナラサルニ依ル、爰ヲ以テ大学校ト此産業教授局ヲ設クル、実ニ興國ノ盤礎ニシテ、海外並立ノ基本ト云フベシ、

一 開港以來我國ノ況勢ヲ考フルニ、前説ノ如ク輸入夥シク輸出尠ク、國家ノ損耗日ニ幾千乎知ルヘカラス、之ヲ以テ見ルニ、國ヲ損害スル多クハ商売ニアリ、其目ヲ挙クルニ、本邦ノ商売ハ、一己一家ノ才覚ヲ以商売スルニ由テ、時価ノ高低等ニ付、致サル、コト勝ナリ、依テ外國人ト商法スル者ハ、社ヲ結ンテ為スニ非サレハ、第一本金ニ苦ミ、第二ニ弘ク耳目ヲ注テ、時価ノ高下ヲ計ルコト能ワス、第三一己一家ノ力ニテハ外國人ト利ヲ争フコト能ワス、却テ國人ト拮抗シテ時価ヲ妨クルアリ、第四時価ノ出役ニ驚キ、時ヲ俟テ、或ハ価ヲ高クスルノ術ヲ謀ルニ氣力ナク、第五新ニ産物ヲ開テ、輸入品ヲ逐却スルノ道ヲ知ラス、唯來ノ品物ノミニ拘泥シ、日新開発ノ途ヲ知ラス、第六在來ノ品モ一時利少キトキハ、之ヲ保ツコト能ワス、或ハ釐製シ、或ハ余物ヲ交錯シ忤シテ小利ヲ貪リ、終ニハ名目ヲ失テ荅落止業ニ至ル者往々尠ナカラス、之レ弘ク宇内ノ商業ニ注カサルト、或商業ノ法度ヲ知サルト、或本金ニ乏シキト、或社ヲ結ハスシテ一己獨立ナルト、或ハ産物ハ何ニ依ラス、皆製造耕耘ニ出ル者ナレハ、其理ノ概略ヲモ知ラサル等ノ故ナリ、第七海外各國ニ

出商スルコトナク、嘗ニ開港場限りニテ、時価ハ是ヨリ定ルコト尠ク、多クハ渠等ニ定メラレル者ナリ、其他些少枝末ノ事ハ枚挙ニ違アラス、將タ国家ノ一大重事ニ關係スルハ、開市場ノ奸商等一己ノ利ニ迷ヒ、邪教ニ陷溺スルモナキニ非ルヘシ、是一ナリ、或阿片烟ヲ嗜ムモノアリト、英人ハ狹黠多欲ニシテ、既ニ支那ニ流毒シ、終ニ即今ノ況勢ニ立至レリ、此二目ハ実ニ国家ノ重事件ナレハ、預メ遠ク慮リ禁絶ノ法確立アラマホシキ事ナリ、

一 当今国家ノ損耗量ルヘカラス、其他輸入ノ夥シキ、今形放置シテ六七年モ過シナハ、我ノ膏血ハ悉ク外国ニ絞縮セラレ、貧困ヲ極ムルニ至ランモ知ルヘカラス、願クハ早く心ヲ用ヒ玉ヒテ、結社ト外国へ出商ノ二目ヲ允サレテ、彼ニ致サレサルノ措置アラマホシク、伝聞ク、近頃横濱在留外國商賈ノ中ニ、朝鮮ト歐羅巴ノ戰端開クルノ兆ヲ察シ、彼ノ国ニ移転ノ手當ヲ為ス者アリト、朝鮮ハ今迄外国ノ情態ニ疎ク、商業ニモ馴練セサレハ、利ヲ得ルノ目途多ク、既ニ横濱ノ商事ハ取縮ル者アリト、外國人ノ利ニ銳キコト如此、我國商モ宜シク心ヲ用ヘキ事ナラスヤ、我商賈ハ一己ヲ利シテ、

国家ノ益ヲナスコト尠シク、利ヲ得タル者ハ、一家ノ榮耀奢侈ニノミ費ス、故ニ株立タル品ヲ以テ外國人ト売買スル者ハ、結社セサレハ為サシメサルノ法ヲ設ケラルヘシ、之レ政府商賈ヲ保護スルノ法ニシテ、彼ニ致サレサルノ一策ナリ、而シテ後國家ニ非常ノ費用アルトキハ、國債ヲ行ワルニ就テ大ニ弁ナルヘシ、然ルトキハ即チ民富君富、四民協力、国家ヲ保持スルノ道定マルト云フヘシ、

一 輸入品ノ税ヲ貴フシ、輸出品ノ税ハ賤クスル乎、或品ニ依テハ、無税ニスルノ法モ立ラレ度事ナカラ、之ハ前論ノ如ク我ニ産物蕃殖シ、或輸入品ヲ倣製シ、淺民愚婦モ、生業ヲ勉強スルノ途ヲ開カレタル後ナラテハ、行ワレ難キ事ナレハ、早く手ヲ下サルヘキハ、此教授所ヲ設ルルニアラン乎、將人生ノ必用片時モ欠クヘカラス、瞬間モナクテハ叶ワス、百端ノ事業ニ就テナカルヘカラサル者ハ、鉄・銃・鋼ノ三品ナレハ、何ヨリ先シテ國用ヲ足シ、外國ニ購求セサルヲ要セサルヘカラス、依テ製鉄ノ法如何ニモ懇篤ニ示教スヘキコトナリ、

一 西洋ノ人ハ百事怠倦ナク勉強シテ人生ノ業ヲ勤ムル、

実ニ我国人ノ及フ所ニ非ラス、或愛國ノ情信切ナル、  
 貴賤共ニ官職ノ有無ニ拘ルコトナシ、之我國ト少シク  
 趣キヲ異ニスルナキニ非ラス、或細大共ニ心ヲ竭シカ  
 ヲ勞シ、勉メテ富國ノ業ヲ勤ム、此モ又我国人ノ倣ヘ  
 キノ一ナリ、如此心ヲ用ユルトキハ、利ヲ他邦ニ占ラ  
 ル、コト尠シク、我ヲ利スルノ策ヲノツカラ立テ、國  
 民生計ノ途ヲ得、富國ノ策定ルト云フヘシ、婦女子モ  
 夫々稼穡ヲ勤ムルトキハ、都下ハ素ヨリ旧染習風汚惡  
 ノ醜体ニ陥没スル者鮮ク、風俗モ正シクナルヘシ、依  
 テ女稼ノ道モ、紡績縫工ノ外諸細工物等ノ教授モ開カ  
 ルヘシ、

一 教授局ハ初ヨリ盛大ナルヘカラス、其所以ハ、即今ノ  
 洋学者多クハ學問上ノ人勝ニテ、現ニ人生必用ノ術ヲ  
 施ス者鮮ナク、殊ニ寬急輕重ノ弁國態相応否ヤノ別ナ  
 ク、直ニ開化域中ノ盛大ナル仕掛ヲノミ行ワントスル  
 ノ僻ナキニアラス、故ニ前ニ覆論シタル如ク、一家一  
 己生計トナルヘキ事ヲ初ニ開キ、而シテ後重大ノ事ニ  
 進歩スルノ目途ヲ立ルヲ以、富國ノ磐礎ト云フベシ、  
 右ニ就テ愚考スルニ、先ツ一小局ヲ開キ、前説ノ如ク  
 繭紙等ニテ手近キ物品ノ製造示教ヲ為シ、而シテ其道

ニ心ヲ用ユル人四五名ヲ択シテ、歐羅巴諸州ニ遣シ、  
 普ク彼國ノ諸製造所、或ハ辺鄙僻村等ノ工作所、或ハ  
 民法制度現施ノ次第、或ハ耕耨收採ノ現事、或商賈ノ  
 風習現際ノ事情、其他工芸專匠ノ一般、民政ノ事務現  
 ニ行ワル、処ヲ、見聞ノ為ニ遣ワサレ、一兩年ニシテ  
 歸國ノ上、其者共見込ヲ以、本邦ノ風土・人情・國體・  
 況勢等ニ折衷シ、大ニ建局シ、示教ヲ初メラルヘシ、  
 尤モ民政ノ事務ハ、素ヨリ人情國態ニ基カサレハ、行  
 ワレサルハ勿論、却テ害ヲ生スル者ナリ、即今洋航セ  
 シ者鮮カラス、或ハ書籍モ百般ノ者アリト雖モ、現事  
 ト書籍上ノ論説ト相違シタルモ多ク、現事ハ人情ノ赴  
 ク処ヲ以テ行ワル、者ニテ、勿々筆頭紙表ニ尽スコト  
 能ワサルハ、倭漢洋同様ナレハ、親シク其事情・施設・  
 行事ノ体裁ヲ見聞シ、而シテ後書ニ基キ行フヲ要セラ  
 ルベシ、之レ即今ノ捷徑ナラン乎、宜シク御商議アラ  
 マホシキ事ナリ、

一 伝聞ク、英吉利ノ本國ハ、周圍広縦大概日本ト等シク、  
 人口モ稍同様ナリト、然レトモ土地疲瘦産物少シク、  
 唯産スル者ハ、石炭・銅・鉄・鉛・錫等ニテ、人生必用  
 ノ穀類・棉・絹・諸材・煙草・蚕糸葉等ニ乏シク、総

テ他邦ヨリ輸入シ用ヲ足セリト、如此ノ国体ナルニ、  
我国ノ如ク勉勵勤強セス、徒食ノ遊民多キトキハ、宇  
内ニ跋扈ノ勢ヲ保ツコト能ワサルハ論ナシ、然ルニ今  
五大洲中ノ一強ト称セラル所以ヲ考フルニ、国人愛國  
ノ情信切ニシテ、開化文明日ニ進歩シ、富民強兵ノ二  
目怠慢倦勞ナク競勤スルニアリ、本国ノ体ハ我ト同シ  
ケレトモ、土地ノ瘦肥ハ我国ニ戻レルコト遙下ニシテ、  
同年ニ語ルヘカラス、国力ノ盛大強熾ナル、又彼ハ我  
ト同日ニ語り難キナリ、其所以ハ弁利ノ器械ヲ發明シ、  
生産ノ蕃殖スル一年ハ一年ヨリ多ク、然シテ四方ニ航  
海シ、利ヲ得ルコト夥シク、其器械ノ力、国内ノ総計  
ヲ算スルニ、凡七億万人ニ匹敵スト、加之ニ現密ノ人  
口二千九百三十二万一千余人、此中ヨリ五十三万四千  
人ヲ兵トシ、一百万人ヲ遊民徒食ノ者トシ、二千七百  
万人余ハ恒ノ産アル民トシ、而シテ七億万人ニ匹敵ス  
ル諸器械ノ力ヲ合セテ、七億二千七百万人ノ国力ナリ、  
本邦ハ二千五百四十七万余人ノ総人員、華・土族・卒  
一百八十九万二千余人、庶人二千三百五十八万四千余  
人、此内英国ト同様一百万人ヲ遊民徒食ノ者トシ、二  
千二百五十八万四千人ヲ現ニ耕耘稼穡アル者トシ、其

内老幼廢疾男女モアレハ、漸ク三分ノ一二過キス、一  
人ノ力ヲ以テ十人ヲ養フノ算ニ稍当レリ、英国ニ比ス  
ルニ雲泥霄壤ノ違ナラスヤ、爰ヲ以テ本邦ノ勢力未タ  
真ニ海外ニ比肩スル能ワサルノ一ナリ、歐羅巴諸洲ノ  
風習逸遊ノ民鮮ナクシテ、各恒ノ産アリ、随テ器械其  
他工芸ノ産多ク、國民ニ利権ヲ与ヘタルヲ以テ、非常  
ノ費用アルトキハ國債ヲ為シ、更ニ政府ノ財用有無ニ  
苦ムコトナシ、之レ国力ノ強堅ナル所以ニシテ、全国  
人民ノ総力ヲ以テ、護君保國ノ政体トナレリ、実ニ良  
法ト云ワサルヘケンヤ、我国モ之ヲ目途トシテ勤メ励  
ンデ、富強ノ道ヲ謀リ、貴賤・愚夫・愚婦ニ至迄逸惰  
遊食ノ民ナク、各生業ヲ勤メ、竭力尽心シテ國恩報酬  
ノ義ヲ知り、真ニ愛君愛國ノ情厚キニ至ルトキハ、年ナ  
ラスシテ海外各國ト比肩并立ノ日ヲ見ルニ至ルヘシ、  
願クハ当路ノ人々爰ニ注目シ玉ヒ、瞬間モ放置セサル  
ヲ禱ル、又一体ノ政蹟ハ魯西亜ニ着眼セラレ、其宜キ  
ヲ採採取捨アラマホシク、彼ハ立君独裁ノ國ニシテ、  
我国ノ体裁ニ同シク、又風俗俊朴勉勵強競勤スル、百事  
米・英ニ讓ラス、其他宇内各國ノ所長ヲ取テ、我短拙  
ヲ補充スルノ趣意ヲ以テ、広ク事ヲ求ムルヲ要シ、先

明治4年(1871)

ツ最一ニ富民饒國ノ途ヲ確然堅立スルトキハ、オノツ  
カラ威力強熾、宇内ニ冠タル 皇國ノ実名真ニ確立ス  
ベシ、

明治四年辛未四月 日 市來廣貫

産業教授局教官、又ハ俗務ニ充ツヘキ人名、見聞ス  
ル処左ノ如シ、

海軍兵学寮大助師兼動ヲ命セラルベシ  
以下皆兼動ト略記ス

赤松大三郎

同藩本邦水利学

上條元平

鉾山司権正兼勤

大島惣左衛門

同藩本草学

栗元瑞軒

南校大助教混ト掛リ命セラルベシ  
以下皆混ト略記ス

宇都宮三郎

同藩本邦民政農学

秋葉金十郎

南校少博士物産掛兼勤

伊藤圭介

同画学

川上萬之助

同出仕兼勤

田中芳雄

同画家

前田又四郎

大坂兵学校小教授混ト

市川逸吉

同本邦民政農学

相原安四郎

静岡藩

杉亨二

同本邦民政租税長

森四郎二郎

佐賀藩

佐野榮壽左衛門

外ニ榎本釜次郎(武徳)

大鳥圭介(純彰) 澤太郎左衛門(貞純)

東校大助教順席混ト

辻新二

此三名ハ、宥罪ノ上ハ教官ニ被命度、イツレモ理化

土木頭造船掛混ト

肥田濱五郎

ノ二学ニ所ナリ、

静岡藩

柏原甚平

同藩 阿部潜 榎本亨造(道重)

壬生藩

友平 榮

右ノ二名ヲ以テ教授所俗務ノ長官トシテ、局中ノ事務

静岡藩

小林勇蔵

ヲ統轄セシムルニ的当ノ人物ナラン、尤民部省ノ官員

土木権正鉄道掛兼勤

佐藤與之助

ニ列テ關係スルヲ要ス、

南校大助教順席兼勤

緒方 正

菲山県

安井晴之介

同

長澤房五郎

東校大助教順席混ト

桂川甫策

静岡藩海軍方出仕混ト

山縣十三

同藩

織田賢司

右ノ人員ハ、此局ノ事務ニ就テ其任ニ堪ヘタルヲ、兼テ見聞スル処ヲ以テ記ス、素ヨリ他局故障ノ有無等ヲ知ラサレハ、妄リニ意ニ随テ之ヲ記ス、

〔表紙〕

忠義公史料 明治四年五月

八七 参議大久保利通山口藩ニ発途ス

明治四年五月三日、参議大久保利通山口藩ニ発途セリ、

(記)

本月二日、大久保ハ忠義公ニ見へ、山口藩使命ノ旨ヲ申ベヌ、公山口藩知事江上京尽力ノ旨ヲ囑セラル、本日大久保ハ、西郷道・岩下平方 同伴、横濱ヨリ米国飛脚船ニュウニ乗船、神戸ニ向ヘリ、同五日神戸ニ着船、大坂ニ行ケリ、

【参照一】

大久保利通日記四年五月

二日

一不参、十字御邸へ参、知事公へ謁、長州行之事ヲ申上、西郷子へ訪婦、山縣子・井田子・小西郷子入来、博多鎮台出兵等ノコト議論有之、福岡御処置ニ付、長薩出兵云々ヲ決ス、尤モ小西郷子山口藩ヨリ一時鎮台へ出張、時宜ニ依帰藩ノ筋ニ治定ス、今夕吉井子・川村子・海江田子・松方子入来、

三日

一今日長州行出發、七字小西郷子同馬車、十二字横濱着、大山子・小岩下子・寺田子旅宿へ入来、大隈子・吉田子入来、外国商店為一覽步行、四字飛脚船ニユイロク開帆ニ付、三字ヨリ小西郷子・岩下子同道乗船、五字解纜、

四日

一天氣平穩、終日航海、

五日

一十二字神戸着船、上陸前大坂行飛脚船出帆故乗船、五字着、大平所江参、税所子・岩下子・得能子被参居候、各退出、税所子同宿、

【参照】

寺師宗道日記五月

同三日 晴少雨

出席ス、泊り番也、出張局鈴木壮七泊りニテ、咄ニ至ル、東京之逆謀与徒ニは奏任以上も多有之候由、又長崎ニおひて薩軍と聊争角相及候由巷説アリ、ミニヘル弾薬差廻方問合アリ、二千発也、

八八 藩庁島津忠義ノ東京着ヲ報シ、賀詞ヲ申

フヘキコトヲ達ス

明治四年五月三日、藩庁忠義公東京着ヲ報シ、賀詞ヲ申フベキコトヲ達セリ、

一従四位様御儀、先月廿一日品川沖江御着船、鮫州江

御上陸、同日八ツ時過 御機嫌能被遊 御着邸候段申

来候、依之嶋津珍彦殿一列并二等官以上、明四日登

城、家令江相付

従四位様

従三位様江恐悦可被申上候、

但御裏江兼て恐悦被申上来候面々は、仕来通可被申

上候、

一八等官以上任職之面々同断登 城、伝事江相付恐悦可

申上候、

但改服、

右之通向々江可致通達候、

辛未五月三日

知政所

八九 岩倉具視訪問島津忠義対謁ス

明治四年五月八日、岩倉大納言訪問忠義公対謁アリ、

(記)

本年一月、藩地滞在中ノ礼詞アリ、兼テ上京ノ勞ヲ問ハレタリ、

【参照】

当日ノ順序ヲ記セル文アリ、左ニ載ス、

五月八日

今朝八字比岩倉大納言様御見舞有之候事、

右ニ付御本門マテ御取次番罷出、御式台迄御先立、夫

ヨリ家令御先立、御書院二之間迄御出迎、御客間上之

間へ御引受、暫時御対顔、御立之節御式台迄被遊 御



送候事、

五月十二日

一 五字三輪惣ニ至リ、大久保・西郷ヲ訪フ、互ニ東西之情実ヲ語ル、九州出兵延引等之事ヲ大久保弁解、知事公次ニ余等之東上ヲ切迫ニ促セリ、條・岩二卿薩知事殿ヨリ之御伝言モ有之、

ヲ達セリ、

一 長田神社

右御祭日

六月・十二月十一日

十一月中卯日

右之通御祭日被定置候條、神主代へ申渡、可承向江も可申渡候、

辛未五月十日

知政所

九〇 藩庁紡績方ノ管轄ヲ生産方ニ移スコトヲ達ス

(記)

明治四年五月十日、藩庁紡績方ノ管轄ヲ生産方ニ移スコトヲ達セリ、

四年四月二十五日、福ヶ追誠訪神社ノ社号ヲ、長田神社ト改称スルコトヲ達セリ、是ニ於テ其祭日ヲ定メタルナリ、

一 紡績方之儀、是迄製造方より被掛置候得共、以来生産方管轄被仰付候條、會計総裁江申渡、可承向江可申渡候、

辛未五月十日

知政所

九二 大久保利通、木戸孝允・井上馨ニ日田県事件ヲ説キ上京協力ノ事ヲ談ス

九一 藩庁長田神社ノ祭日ヲ定メタルヲ達ス

明治四年五月十二日、大久保山口ニ至リ、木戸<sup>孝允</sup>・井上<sup>馨</sup>ニ面シ、日田県ノ事件ヲ説キ、上京協力ノ事ヲ談セリ、

(記)

明治四年五月十日、藩庁長田神社ノ祭日ヲ定メタルコト

本月八日、大坂ヲ発シ神戸ニ着、同九日西郷同伴廻漕方

汽船<sup>千里</sup> 二乗船ス、同十日三田尻ニ着、同十一日山口

ニ着、同十二日旅舎三輪惣ニテ、木戸・井上ニ面談シ、

日田県ニ於ケル本藩出兵延遲ノ情況ヲ陳疏シテ、之ヲ

慰解シ、尚藩知事及木戸ノ上京ヲ勸メタリ、

【参照】

大久保利通日記四年五月

八日

一早朝旅宿帰、二字ヨリ発、運上所ヨリ小西郷子同道、

川蒸汽乗船、六字頃神戸着、

九日

一三字廻漕方千里船へ西郷子一同乗船、五字発船、海上

平穩、終日航海、

十日

一終日航海、今晚十二字三田尻着、則上陸、

十一日

一四字ヨリ発足、入夜山口藩へ着、

十二日

一今朝木戸子・井上子入来、奉命<sup>ノ</sup>趣且日田表大山云々

齟齬之事一謝ニ及、知事公ハ勿論、木戸子・井上子速

ニ上京相成候様演説ス、尚知事公へモ申聞可致返詞ノ

コト、

九三 神社ノ班位ヲ定メ祠官ノ世襲叙爵ヲ停ム

明治四年五月十四日、神社ノ班位ヲ定メ、祠官ノ世襲叙爵ヲ停メラル、

〔第二百三十四号〕五月十四日（布）

神社ノ儀ハ、国家ノ宗祀ニテ、一人一家ノ私有ニスヘキニ非サルハ勿論ノ事ニ候処、中古以来大道ノ陵夷ニ随ヒ、神官世家ノ輩中ニハ、神世相伝由緒ノ向モ有之候ヘ共、多クハ一時補任ノ社職其俛沿襲致シ、或ハ領家地頭世変ニ因リ、終ニ一社ノ執務致シ居リ、其余村邑小祠ノ杜家等ニ至ル迄総テ世襲ト相成、杜入ヲ以テ家禄ト為シ、一己ノ私有ト相心得候儀、天下一般ノ積習ニテ、神官ハ自然士民ノ別種ト相成、祭政一致ノ御政体ニ相悖リ、其弊害不尠候ニ付、今般御改正被為在、伊勢両宮世襲ノ神官ヲ始メ、天下大小ノ神官杜家ニ至ル迄、精撰補任可致旨被 仰出候事、

〔法令全書にて補正〕

九四 新痘種ヲ府藩県ニ頒タル

明治四年五月十四日、新痘種ヲ府藩県ニ頒タル、

【第二百三十六】五月十四日

今般種痘ノ新苗渡来、感受ノ効旧伝ノ苗ニ大ニ相勝候  
ニ付、府藩県へ頒布相成候間、大学東校へ申出分苗可  
相受候事、

〔法令全書にて補正〕

九五 大久保利通山口藩知事ニ見ユ

明治四年五月十四日、大久保山口藩知事ニ見ユ、

(記)

本月十二日、山口ニ於テ木戸・井上ト談スル所アリ、  
同十三日、藩知事訪問アリ、知事ハ本月二十四五日発  
途、木戸・井上ハ同行上京スルコトヲ約シタリ、同十  
四日藩庁ニ出テ、藩知事ニ見ヘテ答謝ニ及ヘリ、

【参照】

大久保利通日記四年五月

十三日

一今朝高杉子入来、当 知事公入来、昼后木戸子・杉子

入来、 知事公、来ル廿四五日発船、木戸・井上十六  
日相発、拙子同行可致ノ返詞承ル、兩日炎氣如蒸頗ル  
不堪、晚来一大雨過覚涼氣、阿部子庭前有老松、世ニ  
所伝一首ヲツラス、

涼しさをのきハのまつに残し置き

ひとむらすくる夕立の雨

十四日

〔毛利元徳〕

〔同敬親〕

一十字ヨリ藩庁へ出知事公へ謁候、次ニ故従二位墓前参  
拜帰ル、今日井田兵部大丞着入来、今夕於客館御馳走  
有之、

九六 島津忠義麝香間祇候ヲ命セラル

明治四年五月十七日、忠義公麝香間祇候ヲ命セラル、

記文・参考ハ本年六月五日、藩庁布達ノ条〔番号一  
一号〕ニ載ス、

九七 島津忠義参内ノ日時ヲ伺フ

明治四年五月十七日、忠義公参内ノ日時ヲ伺ハル、

所勞順快仕候付、近々參

内仕

天氣伺且御礼申上度奉存候、此段御執奏奉冀候、以上、

辛未五月十七日

鹿兒島藩知事御名

弁官御中

右之通御伺書御差出相成候處、御張紙ヲ以御達相成候旨、伝事ヨリ申出候事、

張紙

來ル十九日第十時參

朝可致候事、

九八 藩庁砲台發射ノ際国旗ヲ揚ケテ船舶ノ通

行ヲ停ムルコトヲ達ス

明治四年五月十七日、藩庁砲台發射ノ際、国旗ヲ揚ケテ船舶ノ通行ヲ停ムルコトヲ達セリ、

一各砲台より試験射之節、以來国旗を揚ケ候節は、船通

行不相成段、屹と差留有之度、向々江不洩様被仰渡度、

此段申出候、以上、

五月十七日

軍務局

右之通被仰付候条、向々江不洩様可申渡候、

辛未五月

知政所

九九 島津忠義參内勅使下向ノ奉謝ヲ奏ス

明治四年五月十九日、忠義公參内、勅使下向ノ奉謝ヲ奏セラル、

先般 勅使御下向、実父久光

宸翰拝戴被 仰付候處、病痾順快不仕候付、当秋迄上

京御猶予願之通御許容被成下、且又照國社へ 御劍御

納被下、重畳難有次第奉存候、御礼

天機伺旁トシテ參

朝仕候、

辛未五月十九日

鹿兒島藩知事嶋津忠義

(記)

忠義公去四月二十一日東京ニ着、所勞ノ為メ延日ニ及ヒシカ、本月十七日參内ノ許允ヲ請ハル、同十九日參内ノ命ヲ伝ラル、同日午前八字參内、小御所ニ於テ謁見ヲ賜ヒ、更ニ麝香間ニ於テ内謁ヲ賜ヒ、厚渥ナル勅命ヲ奉承セラレ、御菓子ヲ奉戴セラル、了テ退出、宮

内省ニ出頭シ御礼ヲ申上ラレ、帰途三條・岩倉兩大臣ヲ訪問セラレ、全十一時ニ帰邸アリタリ、

【参照】

当日ノ順序アリ、左ニ載ス、

五月十九日

今朝八字御供揃、御直垂被為 召、御式合ヨリ御本門御出、辰之口和田倉御門御通行、坂下御門被為 入、

裏御門前ニテ 御下乗、麝香之間へ 御通り、宮内省へ

御礼御届相成候処、 小御所ニヲヒテ、

天顔被為 拜、畢テ麝香之間へ 御扣、再 御学問所

へ御通、 御内輪拜

顔被為 在候上、御懇々之

上意被為 蒙、 御菓子 御頂戴、終テ麝香之間へ御引取、右御礼宮内省へ御申上御退

朝、大手御門内中辻ニテ 御乘輿、右衛門ヨリ 御出、

外櫻田御門霞ケ關 御通行、右へアタラシ橋内三條様

へ御見舞、夫ヨリ調練場脇道 御通行、日比谷御門・

馬場先御門被為入、岩倉様へ 御見舞、和田倉御門辰

之口

御通行、 御出口之通、十一字過被遊 御帰邸事、

一〇〇 藩庁城下附近各村合併ノコトヲ達ス

明治四年五月二十二日、藩庁城下附近各村合併ノコトヲ達セリ、

鹿兒島

原良村

右永吉村江合併

華野村

右岡之原村江合併

下田村

右坂元村江合併

皆房村

右比志島村江合併

草牟田村

右下伊敷村江合併

花棚村

右川上村江合併

右は此節大御支配ニ付、鹿兒島近在之内右之通合村被

仰付候条、此旨民事局江申渡、向々江も可申渡候、

辛未五月廿二日

知政所

一〇一 寺院地境内外ノ区域ヲ定メ其境外地ノ六

ケ年間ノ税額ヲ録上セシム

明治四年五月廿四日、寺院地境内外ノ区域ヲ定メ、其境外地ハ六ケ年間ノ税額ヲ録上セシメラル、

府藩県へ御達書

諸国寺院現在之境内ヲ除キ、一般上地被 仰出、収納現石高平均取調方相達置候処、境内之區別調方一定不致向モ有之、不都合ニ付、従前之坪数反別ニ不拘、相当之見込ヲ以境内之區別相定、其余田畑山林ハ勿論、譬へ不毛之土地ニ候共、墓所ヲ除之外上地之儀、御布告之通相心得、總テ收納有之分ハ、六ケ年平均取調、兼テ相達候期限迄ニ可差出事、

但境内地之區別、今般相達候趣意ニ反シ、取調差出候向ハ、早々再調之上可引替、尤調達無之分モ其段可届出事、

一〇二 漂尸ヲ埋葬セシメ其告ル者ニ錢ヲ与ラル

明治四年五月二十五日、漂尸ヲ埋葬セシメ、其告ル者ニ錢ヲ与ラル、

府藩県御布告

三府下川々溺死人有之節、見当次第速ニ其筋へ可届出候、等閑ニ見過候類間々有之趣、無謂事ニ付、自今溺死人見当り候ハ、直ニ人夫相雇引揚置、其段所役人へ申出、所役人ハ右死骸最寄寺院へ仮埋イタシ、其管轄庁へ可届出候、尤見当人へハ士民ノ差別ナク鳥目拾五貫文差遣、人夫雇料・埋葬料等ハ官費ニ相立可申候、自然等閑ノ儀有之於ハ、其所役人ノ越度タルヘキニ付、屹度可相心得事、五月二十八日藩県へ御達書、三府下川々各地方管内ト書ス (天政官日誌にて補正)

一〇三 鉾山所在採掘量申供ヲ督令セラル

明治四年五月廿五日、鉾山所在採掘量申供ヲ督令セラル、

藩県へ御達書

各藩県管内金銀銅之鉾山并年々掘出之数量、其外石炭・鉛・硫黄・薬石類産出之場所等取調、見本品相添可差出

旨、兼テ御布告相成候処、今以不差出向モ有之、不都合ニ付、至急取調有無共可届出事、

一〇四 華・士族・卒逃亡者収禄ノ制ヲ定ム

明治四年五月廿八日、華・士族・卒逃亡者収禄ノ制ヲ定メラル、

御布告

是迄華族・士族・卒等脱籍逃亡シ、本貫ニ復歸候者歳月ノ多少ヲ不問、律ノ閏刑ニ処シ、原禄ヲ給シ候処、自今逃亡後収禄ノ日限被定候条、各所管ニ於テ左之例ヲ照準シテ所置可致候事、

逃亡五十日以内ニ歸ル者ハ、律ノ如ク処シ、五十日以外ニ及ンテ歸ラサレハ、禄ヲ収メ家屬ヲ民籍ニ編入シ置キ、本犯復歸スレハ庶人ニ下スニ止ム、右之通ニ候条、此旨相達候事、

一〇五 家禄下付方ノ手續ヲ令セラル

明治四年五月晦日、家禄下付方ノ手續ヲ令セラル、

御布告

府藩県貫属之者管轄替相成候節、家禄渡方之儀、府県貫属之分ハ、渡济期限等巨細新管轄庁へ申送り、其段兩庁ヨリ大蔵省へ相届、藩貫属之分ハ、当分之内元藩ヨリ新管轄庁へ引渡候共、又元藩ニ於テ直ニ相渡候共、兩庁申合次第可為勝手事、

但多人數一纏ニ管轄替相成、元藩遠隔之場所ニテ、家禄引渡方不都合之向ハ別段、其余ハ、先般大蔵省へ納方相達置候分ト雖モ、本文ニ准シ取計可申事、

一〇六 藩庁旅費定則ヲ改正スルコトヲ達ス

明治四年五月、藩庁旅費定則ヲ改正スルコトヲ達セリ、一兩京・大坂其外他邦江士族以下被差遣候節、被相渡候道中御賄料之儀、一昨巳年官等ニ応シ定則被究置、前之濱出帆蒸氣船より被差越候節は、右定則半減之御治定ニ候得共、以来定則通可被相渡候、尤至急之御用筋は別段之事候得共、可成靜ニテ被差立、蒸氣船より被差立候節は、至急之御用向ニても、都て靜料可被相渡

筋被充置候条、会計局江申渡、向々江も可申渡候、

辛未五月

知政所

一〇七 大久保利通山口藩ヨリ帰京出邸ス

明治四年五月三十日、大久保山口藩ヨリ帰京出邸アリ、

(記)

本月十六日、山口ヲ発、全十七日乗船、上ノ關ニ碇泊、  
全十八日乗船、御手洗ニ碇泊、全十九日兵庫江着船、  
全二十日ヨリ全二十三日迄大坂滞在、全二十四日神戸  
ヨリ乗船、全二十六日横濱着、全二十七日帰京アリ、  
本日出邸忠義公ニ見談アリタリ、

一〇八 当今街説

一土州人ノ説ニ、我国ノ万国ニ並立事能ハサル、其源四  
民ノ別アルカ故ナリ、爰ヲ以人材ノ輩出セス、能芸所  
長ノ人生育セス、從テ百事挙ラサルナリ、宜シク速ニ  
四民ノ別ヲ廢シ、悉ク平民トナシ、其材能ニ随ヒ拔擢  
スルヲ要ス、先ツ脱刀ノ令ヲ布クヘシ、是其手初ナ

リ、故ニ管轄内ニ布キ試ミ、然シテ後天下ニ行ハント欲  
ス、藩内既ニ行事ヲ得タリ、是ヲ規本トシテ天下ニ行  
フノ法ナリト云々、

一長州人ノ説モ稍同様ナリ、然レ共藩内約マラス、トテ  
モ即今ノ勢一定布告スル事能ハサル様子ナリ、國中半  
以上脱刀ヲ好マサルアリ、好ムモノハ今用ラル、輩ノ  
ミニテ、阿諛ノ族ノミナリト云々、

一薩州ハ右ノ二藩ニ反シテ、近比ハ殊更剣法ヲ学ヒ、長  
大ノ刀劍ヲ好ミ、皇國ノ玄機ハ、神世ノ昔ヨリ劍ヲ以  
テ至重シ守トシ、則三種ノ御宝王尊ノ至重セラル、  
爰ヲ以テ之ヲ廢スヘキニ非ラサル、或ハ四民ノ別ヲ廢  
スル、素ヨリ其論ナキコトニテ、西洋各国モ士官タル  
モノハ劍ヲ帶サルナシ、我国ノ刀劍ト其形状ヲ異ニス  
ルノミナト、確乎トシテ一藩一同動ク事ナク、殊ニ西  
郷トイヘル人ノ宅ニ行キ、応接スルニモ短刀ヲ膝辺ニ  
置テ、如何ニモ

皇國ノ体裁ヲ失ナワサル故、土・長如何ナル説ヲ立ル  
ト雖トモ、決シテ薩ノ力ヲ以テ脱刀ノ命ヲ布クニ至ラ  
サルヘシ、

一三藩如斯異説ナレトモ、薩ハ兵力充実、國論一定人情



正直、少シノ異論有事ナク、藩主ヲ補佐シテ、勤王之志確乎トシテ動カス、土州ハ少シク兵力アルニ似タリト雖、藩内合一セス、人材乏キ長州ハ、藩内紛擾異論喧々、兵力アルニ似タリト雖、実ハ論スルニ足ラス、今度ハ三藩力ヲ国ニ尽スニ当テ、二藩ハ全ク蛮夷ノ政体ヲ墨守シ、皇國ノ玄機ヲ抽廢スルニナンノトス、薩藩独リ二藩ト合論シ、ナスヘキハナシ、為スヘカサルハ確乎トシテナサス、皇國ノ体ヲ堅ク存シテ、強兵富國ノ道ヲ謀ル、実ニ我國ノ柱礎也、宜ク薩ニ志ヲ合スルノ藩多カラシテ企望ス、之レ皇國ヲ皇國ト立置テ、天子ヲ天子タラシメンノ基ニシテ、國ヲ思フノ人ハ深ク心ヲ用ユヘキノ時ナリト、是説草莽間ノ説当今紛々タリトソ、

一薩人ハ古ヨリ人種固隘ニシテ、衆説ヲ容裁スル事ナク、独リ力ヲ頼ンテ海内ニ跋扈スト雖、近代其弊全ク變シテ、弘ク宇内ニ目ヲ注テ、普ク天下ノ人ニ交リ、少シモ隔心ナク、藩内ニ立入事サヘ昔ハ拒ミタリシカ、今ハ少ニテモ自由ニ出入サセ、政体モ陰ス事ナク、何國ノ人モ朋友ノ如クナス、是レ全ク先君ノ治道風俗ヲ一變セラレシヨリノ事ナリ、豈大力ニアラスヤ、即今ニ

至リ益其意ヲ忌布スル事ナク、海内一致同和ヲ好ミ、殊ニ此度大兵ヲ召シ出張セシニ、己ヲ高フスル事ナク、衆説ヲ容レ衆材ヲ採リテ、天下治安ノ策ヲ建ル信切也、兵卒ニ至ル迄<sup>協カ</sup>同協規則ノ嚴重驚ヘキナリ、長・土二州ノ如ク独權ヲ以テ事ヲ取ルノ意ナク、此時ニ当リ長・土二州モ同心戮力シテ尽サスンハ、國家ノ興廢愛ニアルヘシ、薩ノ開化ニ趣キタルハ、先年英國ト戦ヒシニアリ、其後弘ク宇内ニ耳目ヲ配リ、幾多ノ諸生ヲ海外ニ出シ、文明ニ心ヲ尽ス、殊ニ兵ノ強キ海内ニ独歩セリ、弘ク富國ニ心ヲ用ヒ、種々ノ器械ヲ建テ材用ヲ兵制ニ費ス、歳入ノ半以上ニ及ヘリ、加之門閥ヲ廢シ至重尊大ノ風ヲ清洗シ、高官身柄ノ者モ一僕ヲモ携フルコトナク、自ラ事ヲ取テ、殆ント西洋ノ文明域ニ、薩ノ改革ニ則リ大政一變アラハ、誰力はヲ非トスヘキ、草莽式憂國ノ徒談称スル処也、

一薩ノ改革ハ為スヘカサルヲ為シ得、実ニ万人ノ驚怖スル処ニシテ、各藩ノ改革ト同日ニ語ルヘカラサルナリ、今東西并浪花辺ノ人情ハ、久シク泰平ノ化ニ浴シ、驕惰安逸ヲ好ミ、上下共ニ國ヲ憂フルノ情薄ク、薩人ノ如ク憂國ノ情厚ク、朴質儉素ナル時ハ、百事拳ラサル

ハ非サルヘシ、薩ノ改革ニ倣フテ断然ノ所置アラハ、不服ノ者アラサルヘシ、唯ニ不服アルハ朝官人而已ナラン、随テ佐賀藩ハ不平ノ説ヲイル多シト雖トモ、素ヨリ天下衆人ノ知所ナレハ可憂ニアラス、官員ノ説ニ、今度三藩ヲ<sup>(三)</sup>徵シテ改革ヲ為ス、実ニ天下ノ權ヲ興スノ所為ニシテ、年ナラスシテ薩再ヒ霸府ヲ京攝ニ開ンモ知ルヘカラン抔ト紛々唱フルモ、之又有志人ノ説ニ、己ノ身ヲ上ニ私心アルカユヘニ、斯ク唱フルモノニシテ、薩人如何ニ不知盲目ナルト雖トモ、今日ニ至リテ其意ナルハ明ナリ、可笑ノ迂説ナリト云々、

一改革ニ当テハ一省一局、勅・奏・判ノ三任官薩人両三名出仕為致改革ヲ初度事ナリ、左モナケレハ旧算ヲ洩出シ、私利ヲ謀リ或書画遊蕩ニ配ルナト、即今ノ弊サヘ除事難カルヘシ、諺ニ薩人ハ金ノ番ヲ為サシメヨト、又憂國ノ鬼神ナリトモ云ヘリ、又尊大至重ノ風少シモナク、高官高位ノ人ト雖、推參シテ拝面ヲ乞ヘハ無異議面接シ、聊言路ヲ閉事ナシ、一体沈着ニシテ議論スル事ニ信切ナリ、又奥羽其他ノ賊藩ト雖トモ、今日ニ至リ旧惡ヲ問ハス愛遇シテ志ヲ陳進ス、旧庄内ノ如キ旧友同朋ノ如シ、是人種俊直ナル所以也、長・土二州

ト比較スルニ雲泥也、爰ニ以テ各省毎局多少用ラル、ヲ以テ初テ公平ノ所置行ハル、ニ至ルヘシ、其時ニ當テ薩人従来ノ意ノ如ク、避讓謙遜ニシテ仕官セサル時ハ、此度改革モ有名無実ナルニ疑ナシ、其氣味ヲ見ル時ハ、有志ノ人ハ野ニ退テ世ヲ見サルニシカヌト云々、一西郷ハ謙遜ニ過キ、仕官ノ意ハ決シテナキ人物ナリ、随テ藩士モ材能所長ノ人多シトイヘトモ、悉ク西郷ニ倣テ謙退シテ、陽ニ尽スコトヲ為サス、陰ニ尽スノ策ナラン、薩如斯ナル時ハ、此度ノ改革有名無実、今日ヨリシテ見ルカ如シ、夫而已ナラス、兩輔相公・參議辺ノ所モ此度改革ノ意スクナク、唯欲スル処ハ三藩ノ兵ヲ常備ニシテ、脱士暴徒ヲ压制シ、不虞ノ變ニ備フル迄ノ意ニ疑ナシ、薩其氣味ヲ察シタルヤ否ヤ知ラス、サレトモ果シテ未タ知ラサルヘシ、

一薩ノ世ヲ憂フルノ意深キハ、各藩有志ノ人鹿兒島留在シテ、親シク國人ト論談親聞スル処ナレハ、此度ハ兵隊ヨリ起テ、積日ノ憂念ヲ發表スルニ疑ナシ、西郷ト云フ人ハ愛友信節ノ人物ニテ、意表果決アル人物ナレハ、未時至ラサルヲ察スル欵、或ハ官人中ノ氣味ヲ察シテ、妄ニ論説ヲ容レス、唯常備ヲ置テ威力ヲ逞シ、

朝権ヲ実着スルノ仕置而已爲シテ、三四ヶ月ノ間ニ知事ヲ奉シテ、卒然帰藩スルニ出ヘシト云々、

一長・土二州ノ人ハ仕官ヲ欲スルノ情ナルカ故ニ、内ニハ仕官ヲ欲シ、終ニ権ヲ握ルニ至ルヘシ、今年ヨリ半年乃至一年計ニシテ、彼ノ心底顛ルヘシ、長州ハ奸黠多欲ニシテ再ヒ木戸ノ如キ者モ輩出スヘシ、土州ハ頑固ニシテ、少シク奸猾ナレハ、退テ傍觀スヘシ、薩兵ヲ以テ、

朝廷奉護ノ一途ニ出テ、政体ノ傍觀ハ示前ノ如クニシ、独立スルニ至ルヘシ、此度老公出京ナキハ能々往事ヲ察シテ、出サルナラント云々、

一人情如斯ナルカ故ニ、日本ノ衰頹兎角救フヘカラスト雖トモ、薩西国ニ突立シテ 皇国ノ玄機ヲ保チ居ル、未タ日月地ニ墜チサルト云者ナラント云々、

一此度三藩同心イツ迄モ隔心ナク、大藩是ニ同致シ改革ニ尽力スル時ハ、

皇国モ年ナラスシテ、万国ト并立ノ基立ヘシ、然シ込モ三藩ノ内長・土二州ヨリ隔心ヲ曳出ス疑ナシ、即今ノ人情薩ハ王家ノ為ナレハ、恥ヲ忍ヒ苦ヲ好テ尽力ノ意ハ果シテアルヘシ、其他ノ能・廣・紀・尾・水等ノ

如キ、基ヨリ異論ナク尽スニ至ルヘシト云々、

一薩ノ改革ニ倣テ為サシメ度ハ、百事悉ク也トイヘトモ、是ヲ區別シテ為サシメ度ハ、寺院廢毀ト兵部或ハ外務此三事ヲ委任シ度事ナリ、此事西氣ヲ挽回スルハ全ク任度事也、

一薩人ハ物毎勉強スル性アリ、今本邦ノ形勢信勉強ナリ、サレハ百事拳ラス、万国並肩ノ目ヲ見ル事ナカルヘシ、即今ノ朝官ノ給金取ノ風俗ニシテ、憂國ノ情少シモナク、威権ヲ以テ下ヲ押カ故ニ、下情上達セス、故ニ人心ノ紛擾爰ニ生ス、タトヒ憂國ノ情有モノ、集議院ヨリ建白スルニ、全ク内証咄ヲ出シタル上、建言セシ者ハ拙策ニ似タル事ナリトモ御採用アリ、亦内証ニ諸官ニ打真セタルコトハ、猶更其吏其人迄モ御登用アリ、公平ニ布告ノ趣ヲ信用シテ、献言セシ事ハ、タトヒ良策ト雖トモ放擲スルノ向ナク、如斯人情可歎事ナリト云々、

一市中ノホリス市中ノ取ヲ薩ヨリ全ク引受ケ、米國ノ法ヲ以テ、下民保護ノ趣意ヲ以テスルト聞ユ、薩ノ兵隊ナレハ規則嚴重ニシテ、人民ヲ妨ケルヨフノコトニハ至リマシク、実ニ市民ノ幸ナルヘシ、既ニ西ノ丸御門警

衛ノ兵、高官高位ノ人印鑑ナシニ通行スルトキハ、更ニ恐レ懼ルル処ナク大声ヲ發シテ違令ヲ糾シ、少シモ屈スル色ナキヨシ、下民体ノ人違令或ハ印鑑ナシニ通行スルトキハ、愆意ニ教示シテ指返ストソ、其挙動ノ美ナル可称ニアラスヤ、如斯シテ市中ノ（ホリス）ヲ立タラハ、安堵シテ生業ヲ為スヘシ、

一薩ノ兵隊ハ各藩ト異ナリテ、卒族等ヲ用ユルコトナク、皆士族ノ中ヨリ精撰シタル者ニテ、或三千石以上モ取タル門葉ノ人アリト、右ノ如ク輦輦ナラサル故、規則モ能行ハレ、昔日ノ薩人ニアラス、各モ薩ノ規則ニ倣ヒ制ヲ建タラハ、本邦ノ其機立ツト云フモノナルヘシ云々、

一東都モ改革既ニ為セリ、随テ第一ニ教化ノ改革ナカルヘカラス、薩ハ既ニ三学兼備ヲ治メタル着目ノ速ナルカ賀ナリ、老公ハ学向安カル人ナレハ、和漢洋ヲ斟酌シテ、一法ヲ設ケタルハカナラスヤ、大学校モ薩ノ学規ニ則リ、速ニ改革アリタシト、南校辺ノ中等ニテ論スル事ナリト云々、

一諸県毎ニ一兩人ツ、薩人ヲ置レタシ、当今薩人ノ出仕シタル県々ハ、下民疾苦ヲ言フ処ナシ、是下ヲ憐ミ上

ニ強キ故ナリト云々、

一東京府ハ惣國ノ目的トナル局ニテ、府下ノ民心サヘ安ンシ、生業ヲ棄ミ風俗正シキニ至ラハ、藩県是ニ則ルヘシ、薩人両三人当分出仕ストイヘトモ、未改革ヲ初メサル衆人ノ疑処ナリ、今弊風等ヲ傍觀シ居ルモノ歎、又改革スルノ力ナキ人カ府下ニ初ニ改正シ、民心ヲ安シタラハ、全国ノ制度モ是ニ法ルヘシ、

一東京ノ風俗ハ久シク昇平ノ化ニ浴シ、欠字ノ非輩ハ昔

ニ帰ランコトヲ企望ス、是甚タ過タルノ説ナリ、如何ニ賢人君子ノ揃ヒタリト雖トモ、素ヨリ今日ニ至リテ、旧時ノ有様ニ復スヘキニアラス、又復スヘカラサルモノ也、宜ク時態ニ応シ乱臣賊子ノ潜伏暴行ヲ戒メ、遊民ヲ黜フシ、各生業ヲ勉強スルヲ世話セラレテ足ルヘキヤ、最上ヨリ下ヲ庄スルノ所置ナキヲ專要セラルヘシ、一即今改革アルニ当ル故、水野越州カ為セシ如ク、断然毀誉ニ拘ハラズ、時態ニ応シ施行アラマホシク、越州ハ稀世ノ英雄ニテ、極盛ノ至治最修驕惰言フヘカラサルノ時ニ当リ、改革ヲ初メタルハ、治世尔来ノ一人ナリ、併シ為セシコトニ過不及ノ所置最多シ、一々倣フニハ素ヨリアラサレトモ、越州デスラ如斯、今ノ世ニ

当ル人心モ改革ヲ企望スル故、爰ニ於テ百事大断アラ  
マホシクト云々、

一即今ノ時勢困ヲ損傷スルモノハ、必商売ニアリ、商売  
トイヘトモ知ラス識ラスシテ損害スルモノナリ、故ニ  
弘ク宇内ノ商律ヲ酌テ維持ノ法ヲ設ケラレスンハ、相  
濟サルノ時ナリト云々、

一昨日迄薩人ヲ誹謗セシモノモ、近比ニ至リ甚敷称赞阿  
諛ノ語ヲ咄スモノ殆ント満朝ナリ、是則薩ノ勢ヲ町人  
ヨリ見テ論ヲ変シ、色ヲ替ヘタル輩ニテ、奸ノ最モ甚  
キトイフヘシ、此後薩人ノ欺カレサルヲ祈ルト云々、  
一官員ノ人々三藩政事ニ関係スルヲ忌嫌ス、中就テ佐賀  
ノ如キハ尤甚シ、中ニモ西郷・伊集院等ヲ悪ム実ニ甚  
シト云々、

一薩ノ知事公ハ着京ヨリ相応ノ日数ヲ経タリ、然ルニ未  
タ一ツノ建議アルヲ聞カス、三藩会日ノ後大議ヲ初ム  
ヘキ歟、其疑ヲ容ル、大久保ナルモノ長州ニ下向スル、  
長ハ狐疑シテ、勢ヲ見テ速ニ上着セサルモノナラン、  
如斯ナレハ、此度モ果シテ一昨年ノ如ク議論一定セス、  
改革ノ運ニハ至ラサルヘシ、日本興廢此度ニアリ、嘆  
事ナリト云々、

一市中街ノ説ニモ、薩ノ改革ヲ為サントスル早三年ノ今  
日ニ至リ、是迄飽迄天下人心ノ帰嚮得失、官人ノ善惡  
無残所取調タル由、如斯事ヲ精ニシラヘタル故、此度  
改革ヲ初メ西郷其他ノ人々モ事ヲ取ラセタラハ、無遺  
漏所置可調、即今出頭ノ薩人改革ヲ始者少キカ故、是  
ト結ンテ異論ヲ建ンニ当テハ、又閉塞ヲ生スヘシ、兎  
角此度ハ十分之改革ハ調フ間敷ト云々、

一奥羽其他北越等ノ諸所或ハ転封セラレシ藩々、疲弊云  
フヘカラス、此度改革ノ上愛憎ナク所置ノ救助モツク  
ナルヘシト、是各藩日ヲ数ヘテ相待勢ナル由、

一奥羽・北越等ノ賊藩ヲ愛撫スルノ跡ヲ建ル、薩ト土ニ  
アリ、長ハ滅庄ノ意アリ、薩ハ強力シテ戦争ノ時分ニ  
恐ル、所ナク、既ニ大泉・静岡ノ如キ原前讐仇ノ藩ト  
イヘトモ、今日ニ至リ朋友ノ如ク薩ニアラサレハ、為  
得ヘカラス、兵力強カラサレハ為シ難キ也、仙臺等ノ  
如キモ薩ノ事今日ニ至リ企望スト云々、

一此度薩ノ立論行ハレサルトキハ、果シテ兵力ヲ以テ迫  
リ、府下騒動ヲ成スヘシ、是薩ノ得意ナリ、当年中ニ  
果シテ府下ノ混乱アルヘシ、心ヲ用ヘシト云々、

右辛未五月中旬比東京府門前江落居候由、

〔表紙〕

忠義公史料

明治四年六月

一〇九 藩庁朝官ニ列スル者ノ履歴録上ノ令ヲ達ス

明治四年六月二日、藩庁朝官ニ列スル者ノ履歴録上ノ令ヲ達セリ、

一御記録御編輯御用ニ付、御一新以来士庶人ニテ、

朝官拜命之輩履歴事実、左之通分部記載可差出候也、

但死亡致候者は、其親類より取調可差出事、

一姓氏・実名・年齢并父祖名、

一叙任并奉職之始末、又は別段御用向相勤候次第、

一建白并緊要之願伺届等大意御附紙共、

一文武技芸或は著述等、

一在藩之節履歴概略、

以上

庚午十二月(欠)

弁官

御記録御編輯付、別紙之通

朝廷より被仰渡候間、御一新以来士庶人ニテ朝官拜命輩、銘々御箇条ニ基キ、事実無違漏取調差出候様被仰付候条、御当地は徇達、外城は地頭より、当月中無間違取揃、伝事江相付可差出候、此旨御藩内不洩様早々可被申渡候、

辛未六月二日

知政所

一一〇 藩庁町名改称ノコトヲ達ス

明治四年六月三日、藩庁町名改称ノコトヲ達セリ、

上町之内

地藏町之事、

一榮町チヨウ

向築地之事、

一向江町

右之通唱被相替候条、民事局江申渡、向々江も可申渡候、

辛未六月三日

知政所

一一一 藩庁忠義麿香間祇候ヲ命セラレタルニヨ

リ、諸士祝賀スヘキコトヲ達ス

明治四年六月五日、藩庁忠義公麿香間祇候ヲ命セラレタルニ由リ、諸士ノ祝賀ニ及フベキコトヲ達セリ、

鹿兒島藩

知事島津忠義

麿香間祇候被

仰付候事、

辛未五月

太政官

從四位様御儀、先月十九日

天氣御伺且御礼旁として御参

内、麿香之間江御扣、宮内省江御礼御届相成候処、於

小御所

天顔 御拝、畢て麿香之間江御通、御内輪

御拝顔被為 在候上、

御懇之被為蒙

勅命、御菓子被遊 御拝戴、畢て麿香之間江 御引取、

右御礼宮内省江被仰上、無御滯 御退

朝被遊候段御到来候、依之嶋津珍彦殿一列并二等官以

上、明後七日四ツ時登 城家令江相付、

從四位様

從三位様江御祝儀可被申上候、

一三等官以下御当地士族之面々、同断伝事江相付、御祝

儀可申上候、

右之通向々江可致通達候、

但改服、

辛未六月五日

知政所

一一二 藩庁参政橋口與一郎ニ上京ヲ命ス

明治四年六月十日、藩庁参政橋口與一郎ニ上京ヲ命セリ、

一 橋口與一郎

右は東京江御用有之、急ニて被差越候条、向々江可申渡候、

辛未六月十日

知政所

一 橋口與一郎

右は上京被仰付置候付、来ル十八日出艦三邦丸より長崎迄被差越、夫より急ニて東京江被差立候条、向々江可申渡候、

辛未六月

知政所

一二三 藩庁照國神社ノ祭期改定ヲ達ス

明治四年六月十日、藩庁照國神社ノ祭期ヲ改定スルコトヲ達セリ、

二月十一日

九月廿八日

右は

照國神社御祭、改て右之通被定置候条、向々江可申渡候、

辛未六月十日

知政所

一二四 藩庁生徒水泳場ヲ定ムルコトヲ達ス

明治四年六月十日、藩庁生徒水泳場ヲ定ムルコトヲ達セリ、

一大門口より南御台場角迄之間

右南水泳場

一病院下舌出地より北新築地通角迄之間

右北水泳場

右は小学校・郷校諸生、毎年六月十五日より七月晦日迄、水泳修行場被定置度吟味仕、此段申上候、以上、

但諸生等級之標木等召建儀も可有之、此段申上置候、

六月十日

本学校

右之通被仰付候条、本学校江申渡、向々江も可申渡候、

辛未六月十日

知政所

一二五 島津忠義三條實美ヲ訪フ

明治四年六月十日、忠義公三條大臣ヲ訪ハル、

六月十日 晴

三條様ヨリ御招ニ付、夕五字ヨリ被為入、九字被遊



御帰館候事、

一一六 藩庁諸郷士飛地所有交売手續ヲ達ス

明治四年六月十六日、藩庁諸郷士飛地所有交売手續ヲ達セリ、

一鹿兒島諸郷共他郷江自作地致所持候儀不相成候付、当未七月限其所士族江相当之直成を以売渡候様、左候て売払候高員数文は、御蔵入高より代銀上納申受にて返高被成下候旨、去ル午八月被仰渡置、且又鹿兒島并諸郷士族共四町限ニ被相定、他郷掛持は勿論、鹿兒島近在此節御竿入余地之儀、御制度通追々売払、右ニ付近在四町余地之儀は、鹿兒島士族互ニ売買、諸郷士族他郷江掛持は郷士族互ニ売買、殊ニ諸郷は外浮免地等も有之候付、返高不被成下、鹿兒島より掛持其所江売渡候へハ、於郷々は夫丈士族高相重、鹿兒島持高前過分相減候付、其分返高被成下候旨、右之趣猶又向々江被仰渡度候、

未四月十四日

民事局

右之通被仰付候条、向々江申渡、諸郷地頭江も可申

渡候、

辛未六月十六日

知政所

一一七 寺院ノ御所・門跡等ノ旧称ヲ廢ス

明治四年六月十七日、寺院ノ御所・門跡等ノ旧称ヲ廢セラレ、

(記)

仁和寺・大覺寺以下諸寺院、御所・門跡・院家・院室等ノ名称ヲ廢シテ、悉ク地方ニ貫シ、其封戸アル者ハ代ルニ廩米ヲ以テシ草高百石規米二千五石ノ率ヲ用テ、公卿・執奏及ヒ進獻物品等ノ旧例ヲ停メ、其臣隸三世以上ハ士卒ニ編籍シ、坊官・候人等ノ名称ヲ廢シテ蓄髮セシメ、並ニ之ヲ地方官ニ隸セリ、

〔圖二〇八十七〕六月十七日(布)

今般御改正ニ付、仁和寺・大覺寺等ヲ始メ、御所号・門跡号・院家・院室等ノ名称悉皆被廢止、地方官管轄被 仰付候事、

但寺祿ノ儀ハ、追テ祿制ヲ以テ下賜候事、

一坊官・候人等ノ名称ヲ廢シ、蓄髮ノ上、都テ地方官

貫屬士族卒へ被差加候事、

一 諸門跡・比丘尼・御所・院家・院室ノ家士、三代相

恩ノ者、都テ地方官貫屬士族卒へ被差加候事、

但二代以下ハ各其旧籍へ可為復候事、

一 諸寺院、都テ地方官管轄被 仰付候事、

一 諸家執奏ノ儀、總テ被廢候事、

一 御撫物被廢候事、

一 祈禱卷數並諸献上物等總テ被停候事、

一 自今僧尼ト相成候者ハ、地方官庁へ願出可受免許事、

(法令全書にて補正)

一一八 藩庁伶人ノ役職ヲ置キ、其給俸ヲ定ム

明治四年六月十七日、藩庁伶人ノ役職ヲ置キ、其給俸ヲ

定メタルコトヲ達セリ、

一一等伶人 貳人

俸禄四拾俵

一二等伶人 貳人

俸禄三拾俵

一三等伶人 三人

俸禄貳拾俵

一四等伶人 三人

俸禄拾五俵

一五等伶人 貳人

俸禄九俵

右此節新ニ被召建、右之通定員・俸禄被定置候条、向

々江可申渡候、

辛未六月十七日

知政所

(記)

神事祭典ノ挙漸次行ハル、ニ由リ、特ニ伶人ヲ設ケテ

其式法ニ就カシムルカ為ナリ、

一一九 藩庁第七郷校直営ノコトヲ達ス

明治四年六月十八日、藩庁第七郷校直営ノコトヲ達セリ、

一一九ノ  
一第七郷校

右は内之丸郷校、右之名目ニテ官校ニ被召建、本学校

管轄被仰付候条申渡、可承向ヘモ可申渡候、

辛未六月十八日

知政所

(記)

内之丸トハ、城下上方限ノ一郷区ナリ、

一九〇一 寺師宗道日記六月

同十三日 晴

〔上略カ〕  
上之園・高麗町・上荒田合併郷校取建ニ付、三方限より軍役高・俸禄等一石ニ付八百文ツ、の出銅、来ル廿五日程差出候やう、尤校ハ奈良原小五郎宅地ニて、家之住居替等ニ付入目料之由、井上直左衛門所江出揃候由通達也、

一三〇 華族ノ家令・扶従犯罪擬律ヲ定ム

明治四年六月十八日、凡ソ華族ノ家令・扶従其犯罪擬律  
假ニ士族ニ準シ、士族ノ僭従ハ卒ニ準セラル、

【参照】

一華族ノ家丁ハ卒ヲ以テ可扱哉、

一勅・奏・判有位・無位士族ノ家ニ役使スル奴婢ハ、帯  
刀スルモ有リセサルモ有リ、此帯刀人ハ士族ヲ以テ扱  
候哉、卒ヲ以テ扱候哉ノ事、  
右奉伺候也、

辛未五月

刑部省

弁官御中

(附紙)

追テ一定ノ御規則可被仰出候条、令・扶従トモ当分ハ  
士ニ准シ可取扱、且士族ノ家ニ役使シ帯刀スルモノ卒  
ニ准スヘク、閏刑ヲ用候儀ハ伺之通候事、

但シ其者士ニ候ハ、本籍ヲ以テ可扱事、

辛未六月十八日

〔法令全書にて補正〕

一三一 大参事西郷隆盛参議ニ任セラル

明治四年六月二十五日、大参事西郷隆盛参議ニ任セラル、

一三二

鹿兒島藩

大参事

西郷隆盛

任参議

右

宣下候事、

辛未六月廿五日

大政官

(記)

初メ西郷ノ上京アルヤ、従前ノ情弊ヲ裁断シテ、即時ニ改革ヲ遂クルノ予想ナリシモ、実勢煩雜事容易ニ断スベカラス、遂ニ大久保山口ニ赴キ、木戸ヲ説キ同伴上京シ、自ラ木戸ヲ推シテ全權ヲ掌ラシメ、以テ政務ヲ処断スル所アラシメントシ、之ヲ西郷・板垣ノ兩人ニ説キ、更ニ三條・岩倉兩大臣ニ説ク所アリ、終ニ木戸ニ説クモ肯ンセス、百方之ヲ促カスモ応セス、是ニ於テ西郷ヲ説キ、木戸ト並立シテ尽ス所アランコトヲ促カス、西郷之ヲ諾ス、仍テ此日任命アリタリ、

全日罷官

- 中山神祇伯兼教長官  
兼神官祭主(忠能)
- 近衛神祇大副(忠房)
- 石福羽神祇少副(美静)
- 長山形兵部少輔(有朋)
- 九條彈正尹(道孝)
- 萬里小路宮内卿(博房)
- 大久保参議(利通)
- 大隈参議(重信)
- 齊藤参議(利行)
- 佐々木参議(高行)

同日任官

- 木戸参議(孝允)
- 有栖川兵部卿(熾仁親王)
- 井上大蔵少輔(馨)
- 宍戸刑部少輔(璣)
- 大木民部大輔(喬任)
- 烏丸宮内大輔(光徳)

全二十七日任官

- 参議 西郷隆盛
- 右同 木戸孝允
- 神祇伯兼勲宣教長官 三條右大臣
- 大蔵卿 大久保利通
- 大蔵大輔 大隈重信
- 神祇少輔兼宣教次官 福羽美静
- 宮内大輔 萬里小路博房

三三二

大久保利通日記六月

朔日

- 一不参、木戸子・山縣子へ相訪、西郷氏入来、大政一途
- 二出ルハ、根本一ナルニシカス、根本一ナルハ一人ノ

人ヲ立ルニシカス、仍テ木戸ヲ押立、合力同心相助テ  
ヤルヘシト遂示談候(二百ノ十二日省略)

十三日

所勢不參  
一同断、老西郷子入来、木戸ヲ押立候事件、板垣ヨリ同  
意之旨返答有之、井上・山縣へ西郷ヨリ示談ノ処、兩人  
共異議無之趣承リ、誠ニ大慶之至也(十四日ノ十六日省略)

十七日

一不參、今朝山縣子入来、三字岩公入来、今朝西郷・板  
垣両大参事言上之次第ニ付、右府公ト共ニ木戸子へ御  
論シ有之候処、同人肯ハス云々ノコトヲ承ル、仍テ十  
分愚論切迫ニ申上候(十八日ノ廿日省略)

廿一日

不參、十二字西郷子入来、木戸一条ニ付種々示談、小  
西郷子モ入来、今朝岩・條両公政体御変革ノ一条御示  
談ノ上、岩公ヨリ御書面到来、明夕三職會議云々ノ趣  
也、

廿二日

一早朝條公へ參上、今夕會議無益ニ付、是非両公任シテ  
木戸御説得異論ナキヤウ、是迄ノ行掛リ御談被下度云  
々相願候、夫ヨリ參朝、猶條公・岩公御談ノ上、今

夕木戸御呼御説得可被成トノコト也、二字退出、

廿三日

一七字參朝、昨夕木戸御談不十分、小子ヨリ此上懇談  
セヨトノコト也、二字退出、小西郷子・大山・川村等  
入来、六字ヨリ西郷へ訪、木戸兩人參政ノ本ニ立、其  
余諸省ニ下リヤルヨリ外ナシ、然レハ木戸ニ於テモ異  
存無之ト存シ候、西郷子任シ呉レラルヘク及談合、終  
ニ同意有之、大ニ安心、則岩公江參上形行申上、此上  
ハ御引受可被下、木戸へ明朝參リ受合テ懇談可仕ト申  
上ル、別テ御大悦也、

廿四日

一七字木戸へ參、反覆論談愚意具陳ノ処、更ニ異論ナシ、  
歸ル処、參議兩人云々木戸子・西郷ノ処御居ヘナルノ  
事ヲ談ス、一身ノ処ニ付、少々謙遜モ有之候得共、同  
意有之候、十字比ヨリ參朝、條公・岩公へ申上、前  
条ニ御治定、明日ハ諸省少輔以上參議迄庭官、新參議  
木戸・西郷兩人即日被仰付、其上政府ニテ御人撰少輔  
以上ヲ任セラレ候様、切迫申上候、二字退出、小西郷  
子・川村子・大山子入来、

廿五日

一七字參 朝、今日御發令ノ処、木戸子不承知ノ論有之、  
彼是六ヶシク候得共、漸ク御發表有之候、

參議一同免職

木戸・西郷參議新任

諸省少輔以上免官

二字退出、松方子入來、同行汐留ヨリ乗船、兩國辺納  
涼イタシ候、

二二ノ三

西郷隆盛桂四郎ニ与ル書

芳翰難有拜誦仕候、残暑酷敷御座候得共、弥以御壮栄  
御勤務之段恐悦之至り奉存候、随て小弟無異儀罷在候  
ニ付、乍憚御放慮可被下候、陳は先月下濼、三藩出揃  
相成候処、初此方よりは三藩戮力同心と申儀、只立会  
迄にては志氣直様難安次第二候間、此度は十分戮力同  
心之根源を堅ふいたし候儀急務と存候、其根源ニ於て  
は三藩之内より耆人主宰を立、皆此人之手足と相成、  
十分使はれ候て、其人を助け候処不相立候ては、只面  
々之議論を主張いたし候様の機会ニ成行候ニ付、耆人  
見込通り施させ候て、面を一に定め不申候ては必ず事  
業不挙、紛々之場合ニ相成可申、若又見込相違致し、

大体不相叶候ハ、速ニ引籠候方可然、少々之見込は  
必ず有之事ニ付、右等は推てやり貫き候得は、其弊ヲ  
矯候位は如何様共相成候ニ付、是を以定約いたし、木  
戸耆人を參議ニ据へ、外々は省ニ降り、其任を負ひ、  
勉勵可致と相決し、土州へ相談候処、至極同意にて御  
座候間、兩藩より得と長藩江申述候得共、木戸決して  
不肯、然共兩卿江申立、懇々御説諭相成候得共、少も  
承引は不致候ニ付、不得止此上は都て省々へ降り、互ニ  
手を引合候て参り候外無之と策を替談判いたし候処、  
亦々議論沸騰いたし、既ニ崩立勢ニ成立、頓と御変革  
は不出来次第ニ立至り候処、一昨夕大久保より篤ト相  
談有之、此上は私氣張候ハ、随分御変革之処も受合  
て可相調との事ニ付、左候ハ、相はまり可申、此節不  
相調候ハ、御国元にて隊中と相約候折、切斷ニ相究居  
候間、迎も逃出しは出来不申、山ニ入候義も相塞り、  
いづれ地ニ入候外無之候故、承諾仕候処、木戸も納得  
相成、兩人參議ニ拜命仕候次第ニ御座候、外は皆省々  
ニ降り、一時ニ參議並卿・大少輔を被為廢、其上又々  
御調之上省々へ被相居、何分十全之撰扱不被相行、残  
念之至ニ御座候、乍然此上屹度定則相立候ハ、是を

以責或は罰し候場合ニも可罷成候と奉存候、大少丞以下之処はいまた変撰無之、是も統て相発候賦御座候処、官省之調並人員之定額章程等相極め候て可発とて、只今取調中ニ御座候間、不日ニ相発可申、此度は俗吏も余程落胆いたし、濡鼠の如く相成居申候、御遙察可被下候、定めて衆恨は私恠人ニ留り可申と、最早明らめ申居候、尚追々事情可申上候得共、大略迄如斯御座候、恐々頓首、

七月十日

西郷吉之助

桂 四郎様

二二ノ四  
明治四年

木戸孝允日記

六月

四日 晴

一五字過三條卿へ有約テ出、制度変革等ニ付、余愚按之〔上略カ〕  
趣巨細ニ御答セリ、尚近情ヲモ談話シ九字頃帰家、

全十一日 晴

一六字前退出、直ニ岩卿ニ出、余過日来此度薩・長・土三藩ノ兵殆一萬ヲ親兵ニ召サセラレ、

朝廷ヲ保護シ、御基礎ノ確立ヲ助ケラレントス、故ニ三藩モ亦屹度此 御主意ヲ奉戴シ、天下速ニ一途ニ帰シ、諸藩ノ方向弥一定スルノ尽力アラシコトヲ望ム、則版籍返上ヲ以第一段トシ、此度聊其实ヲ挙ケ、方向ヲシテ一定セシムルヲ、第二段トスルノ尽力ナクンハアルヘカラス、依テ余愚按ノ件々ヲ陳述シ、制度一定後已ニ三年、未天下一般ノ  
朝命ヲ不聞、此機ヲ以諸藩へ同一ノ命ヲ下シ、帰一ノ実ヲ挙ントス、故ニ再三其大旨ヲ論議セリ〔以下略カ〕

全十三日

一今夕山縣素狂来話、其主意ハ、今日西郷吉之助山縣ヲ訪フ、此際 朝廷上議論紛紜ヲ憂フ、依テ余ヲシテ独諸參議ノ上ニ立タシメ、以テ天下ノ重キヲ荷ワシメント欲ス、余平生所誓元ヨリ当難不知避、雖然今日ノ事、余諸參議ノ上ニ不可立ハ自ラ条理アリ、故ニ心中元ヨリ決着、然シテ容易又不相答也、

全十四日 晴

一七字參 朝、宮中ニテ井上世外ニ逢フ、昨日西郷・井上ニモ至リ所論与山縣一轍、依テ余之主意ヲ陳述シ、今日速ニ 朝廷上一決ニ帰シ、西郷等ノ自任スルコト

ヲ欲ス〔以下略カ〕

全十五日 晴

一井上世外・山縣素狂來訪、井上へ昨日數度書翰ヲ投シ、西郷へ及返答、余ノ主意ノ徹底スルコトヲ欲ス、今朝來訪スルモ其主意ナリ、余昨日岩卿ト話シ、益前途ノ事今日遠函スル所以ヲ察ス〔以下略カ〕

全十七日 晴

一一字過退出、宮中ニオキテ黒田了助ニ面会ス、條・岩二卿余ヲ別席ニ被呼、余一人參議ノ上ニ立、以テ上下ヲ勸導スル云々ヲ御教諭アリ、其元因ハ今日西郷吉之助・板垣退助相共ニ二卿ニ謁シ、懇迫此事ヲ言上セリ、余已ニ過日山縣・井上ヲ以答、西郷ノ外無他意、故ニ又余ノ心事ヲ逐一陳述セリ、退出掛ケ後藤雲濤ヲ訪ヒ、制度ノ一条等ヲ論シ、又今日二卿へ陳述シ、且西郷へ答ヘシ処ノ主意ヲ語り、板垣ニモ了解アランコトヲ欲ス〔以下略カ〕

全十九日 晴

〔上略カ〕  
一今朝條公來駕、過日岩卿一同西郷・板垣ヨリ建白ノ主意ヲ以テ、頻ニ出頭センコトヲ御催促ナリ、余固辭如前日、同夕大隈參議來話、昨冬來余ノ默按スル処ノ件

々ヲ論シ、以テ天下へ一般ノ

朝命アランコトヲ欲ス、同氏亦同意ナリ、六字過相去、

全廿二日 晴

〔上略カ〕  
一條公ヨリ來翰、岩卿ヨリ亦來翰、五字過三條亭ニ至リ、二卿へ拜謁、制度其外時務ニ當リ御尋アリ、依テ平生ノ議論ヲ陳述ス、大久保等ノ議論ト稍齟齬スルモノアリ、欲有為時ハ其苦情不可言〔以下略カ〕

全廿四日 晴

〔上略カ〕  
一大久保來訪、制度等ノ儀ニ付、巨細談論、且西郷進仕ノ一条ニ付、余亦同職尽力ノ辺モ云々預議論、其情衷於余尤苦心ノ境ナリ、故ニ又我意モ陳述セリ、然シテ促余甚切迫、依テ余平生ノ心、議論已ニ三年前ヨリ條・岩二卿へ陳說シ、今日其採用アランコトヲ懇願セリ、其書面ハ岩卿へ當テ、呈ス、

全廿五日 晴

一岩卿來臨、昨日大久保來テ如相談、是非余与西郷同勳參議、且此度制度御改正等ノ事ニ付云々御議論アリ、余大久保ト無異、只管余三年前ノ宿志ヲ述テ、勇退センコトヲ欲ス、九字參朝、于時大久保等制度改正且余身上ノ議論甚切迫、百方固辭、至ニ二字未決、遂ニ大



限等種々議論アリ、一旦余ニ奉命セサル時ハ運転ノ道  
ナク、却テ百事閉塞スト、故ニ制度ノ事ハ他日卿輔大  
ニ公議ヲ尽シ、余ノ主意モ亦達スルノ期アリト、委曲  
岩卿ヘ論シ、岩卿・大久保等皆同意ナリ、依テ不得止  
更ニ又參議ヲ奉 職セリ、尤暫時此際ヲ維持スル而已  
ト、條・岩二卿且大隈等ト約セリ、尚三職列座ノ上ニ  
テモ陳述シ置ケリ、退出掛ケ神田邸ニ至リ  
知事公ニ謁ス、不図熊本知事ニ面会セリ、又暫与杉相  
語ル、四字帰家、西郷吉之助今日參議奉職ノ由ニテ来  
訪(以下略カ)

全廿六日

(上略カ)  
一八字出門、西郷ヲ訪フ、不在、直ニ參

朝、條・岩・嵯峨諸卿・西郷等ト卿輔人撰ノ議事アリ、  
不如意十二八九(以下略カ)

全廿七日 晴

(上略カ)  
一昨夜来此度改革ノ次第ヲ相察シ、余此度当職ヲ奉命セ

シ時、懇々相論セシコト、總テ齟齬、依テ不得止、八  
時參 朝諸卿ヘ論シ、且西郷ヘ相議シ、今日卿輔ノ発  
表ヲ暫御見合アランコトヲ欲シ、尽力セシ処、已ニ大  
隈・福羽等奉命、且西郷モ従来ノ所以ヲ知ラス、余ノ

論更徹貫スルヲ不覚、依テ此俟発表ニ至リ、然ル後一  
所致アランコトヲ思フ、十二字休息処ニ於テ大臣・納  
言・參議列座ノ折、此度御改革ノ次第、余ノ最前論述  
奉 命セシ時ノ約ト、大ニ齟齬ナル所以ヲ論陳シ、然  
ル後西郷ニ及ヒ、去冬已来ノ有様ヲ語り、余ノ其為  
邦家妥善セサル所以ヲ述フ、与西郷相論スル數時、終  
ニ我論ノ忽ニ彼ノ心服ニ入ルヲ覺フ、西郷ノ公心余ノ  
心ニ徹シ、不覺感歎セリ、今日ノ事余亦一至誠ヲ以  
邦家ノ重事ヲ負荷シ、滿腹ノ議論ヲ陳述セリ、此時條  
卿始已ニ退 朝、依テ一書ヲ以此次第ヲ告ケ、明日ヨ  
リ迅速制度ノ一変アランコトヲ欲ス、政府ノ基立確定、  
諸省ノ制限章程不相定トキハ、以何欵  
邦家ヲ治セント、余ノ思至今日尤切迫、然シテ西郷始  
只諸省ノ制限而已ヲ論シ、政府ノ基立ヲ不語、依テ議  
論大ニ混雜セリ、至于爰漸相定為

邦家独欣躍セリ、今朝来過日ノ行カ、リ、今当職奉  
命ニ当リ、諸前參議ト旨趣ヲ論シ、尤大隈于此間ニ周  
旋シ、大ニ余ノ奉 命ヲ促セリ、依テ昨日来ノ事最前  
大隈ノ余ニ告シ処ト甚齟齬セリ、故大隈ヲ責ル數度、  
大隈亦上為

邦家下為余ニ甚尽力セリ、三字過退 朝、直ニ大隈ニ至リ、今日与西郷相語り、西郷ノ公心ヲ賞誉シ、尔後今一尽力制度一定ノ事ニ涉リ、諸同志ト其約ヲ終ンコトヲ論ス、大隈同意也、井上世外亦来ル、余去テ條公ニ至ル、不凶西郷ニ会シ、又彼モ過日来ノ齟齬混雜ヲ今日初テ承知、大ニ前途ヲ案シ、條公ニ論セシ由、此人ノ主意甚篤実也以下略カ

全廿九日 晴

一八字前參 朝、過日来ノ議、実ニ遷延スルヲ患ヒ、大ヒニ岩卿ト大論シ、又條公ニ機ヲ誤ランコトヲ責メ、又西郷ヘ重テ制度ノ主意ヲ論シ、今日二字ニ至リ漸御決定ナリ、其調ヘ被命候モノハ、大久保・大隈・佐々木・井上世外民部少輔・山縣素狂兵部少輔・福羽神祇・寺島外務大輔・後藤・江藤最前ヨリ制等ナリ中略カ

昨日制度ノ大主意ヲ論セシ二冊ヲ、西郷ヘ相示セリ、又同氏ノ見込モ可有之、

二二ノ五

辛未六月伊集院直右衛門或人へ贈リタル書牘兼覽

前文略ス当地モ諸藩追々出揃相成、御変革モ相始リ、西郷氏モ參議拜命尽力中ニ御座候、其外大久保氏ハ大

藏卿、吉井氏ハ宮内大丞、寺島ハ是迄通外務大輔ニ御座候、又諸藩ヨリ拜命ハ別紙通御座候、西郷氏ハ初之見込通ニハ至リ兼候半ト被察申候、実ニ天下之英才群集致シ居候ニ付テハ、却テ実事ニ施設之処六ヶ敷候半ト被伺申候、乍併御規則御伺濟之上ハ、諸官省ニモ御改革可相成、租税モ變革可相成ト被察申候、以下略ス、

六月廿八日

一三三 西郷隆盛參議任官ヲ達セララル

明治四年六月二十七日、西郷參議任官ヲ達セララル、二三ノ一  
其藩大參事西郷隆盛儀、昨廿五日、參議正三位宣下相成候条、此旨相達候也、

辛未六月廿七日

弁官

鹿兒島藩

二二三ノ二

大久保利通日記六月

廿七日

一今日大藏卿拜命則出府

大藏大輔

大隈

司法台大弼

ノ御内意

佐々木

神祇小副

福羽

其外不參

段々右大臣殿ヨリ御達ノ趣有之、二字退出、大山子・西郷子・松方子・吉井子入来、今夕訪吉井子、老西郷子入来、吉田子モ入来、

廿八日

一七字出省、小生大隈・佐々木御用有之被召、條公・岩公ヨリ別段御談有之、木戸ノ論、政府ノ基則ヲ定メ、其上諸省ノ変革ニ及ハント寛急ノ異論相立云々、小生見込ハ十分申立候、二字退出、吉田子入来、

廿九日

一早朝條公御出、此度西郷參議御受ノ事等、畢竟至誠ヲ以尽力、全ク其方ノ奔走ニ仍ル、厚ク謝スルトノ御沙汰承知候、八字參省二字退出、

一三三 寺格ニ拘ラス寺院住職繼目等地方官ヲシ

テ進退セシム

明治四年六月二十七日、諸寺院旧格ヲ停メ、地方官ニ管轄シ、其寺格ハ上請スルコトヲ達セリ、

今般諸寺院總テ執奏ヲ被廢、地方官管轄被 仰出候ニ付テハ、寺格ニ不拘、住持職繼目等地方官ニ於テ進退可致、尤住僧官位願出候分ハ、其寺格及勤例等篤ト取調、其時々可伺出候事、

辛未六月

太政官

一二四 藩庁給費諸生病疾アル者ノ申請ヲ達ス

明治四年六月、藩庁給費諸生病疾アル者ハ、療医診断ノ証明ヲ添テ申請スルコトヲ達セリ、

一是迄為諸生被差出置候面々、病氣ニテ一往罷下未寸切と不致全快内ニ致出府、又候病氣再発、存分勉強出来兼候もの不少哉ニ相聞得候付、以来は療医得と致診察、全平愈再発之懸念無之段申出候節、可被差出候条、此旨可承向々江可申渡候事、

辛未六月

知政所

一三五 藩庁森岡清左衛門ニ會計奉行ヲ命ス

明治四年六月、藩庁森岡清左衛門純昌ニ會計奉行ヲ命セリ、

會計奉行

森岡清左衛門

右之通被仰付、是迄之通長崎江相詰候様被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未六月

知政所

一三六 寺師宗道日記

六月十日

上略之東京混雜之説也、長・土二藩出兵シテ、脱刀ノ説ヲ主張スト、中ニ長州ニハ農工商ヲ隊ニ編成シテ、朝議稍脱刀説ニ歸スルノ勢と云々、歎息也、郡県説ノ本ク所詰ル所瓦解ナラン、此事洋人ノ目的にして、今日日本ノ門闕ヲ崩シ、一ツハ皇家ノ至尊ヲ俾シ人心ノ不和ヲナサシム、三ツニハ脱刀ヲ為サシメテ銳氣ヲ挫ク、此三

ツノ事其二ツハ已ニ其策ニ踏入〔編〕レ事成ル、今脱刀ノ一ツ未成、不日自ラ術中ニ踏ルナルヘシ、呼呼、長大息々々、

一二七 舊邦秘録

明治四年六月廿五日

西郷鹿兒島藩大参事

右被任参議候間、此段申渡候也、

明治四年六月廿五日

大久保参議

大隈参議

佐々木参議

齋藤参議

中山神祇伯

有栖川兵部卿

萬里小路宮内卿

九條弾正尹

近衛神祇大副

明治4年(1871)

右通今日免職相成候条、為心得申達候也、

辛未六月廿五日

明治四年六月廿五日

大木民部大輔

鳥丸宮内大輔

福羽神祇少副

山縣兵部少輔

穴戸刑部少輔

明治四年六月廿七日

右今日大藏卿ニ任ス、

辛未六月廿七日

大久保利通

明治四年六月廿五日

右今日麝香之間詰ニ拜ス、

辛未六月廿五日

從二位中山大納言

三條右大臣

岩倉大納言

徳大寺大納言

嵯峨大納言

木戸參議

副島參議

伊達大藏卿

東久世開拓長官

明治四年六月廿八日

僧官被廢、寺祿被召上、

辛未六月廿八日

明治四年六月廿七日

三條神祇伯

辛未六月廿七日被任、

明治四年六月廿七日

右八名、今日各拜命、

辛未六月廿五日

現今洋行中

大隈重信

右今日大藏大輔ニ拜ス、

辛未六月廿七日

二二八 池端拙藏附士ヲ士族ニ被召入度歎願書

別紙不顧微軀重疊恐多儀共獻言仕候、方今天下偏可涉  
突効御世態、殊ニ御一新御秋柄、卑劣之風習ニ固執、  
人爵之高下抔ニ相拘リ、言上可仕儀更ニ毛頭モ有御座  
間敷儀ハ、疾恐察仕居候、然処ニ先般

朝廷ヨリ士族・卒・庶人ト御布告之表ニ相見得候テ、  
御藩内ヨリ

朝廷ヘ士族・卒・庶人何々ヨリ何々マデト、御届書ニ  
ハ附士モ士族之部ニ相見得居候由、内々承合、當時附  
士ト可唱名目ハ、乍恐御藩内迄相見得居候半奉伺候、  
愈其通之御事御座候ハ、尔后何卒公然士族ニ被召入被  
成下候ハ、附士一同安堵平和可罷成、當時ハ別紙獻言  
仕候通、士族ト卒トノ中間ニブライト罷成、一同安堵  
平和不罷成、既ニ此一事ニ付テハ、此内ヨリ附士之中  
有志之者共及愚臣事モ、幾度モ獻言為仕事候ヘ共、下  
情不上通歟、今ニ公然士族ニ被召入候儀無御座候ニ付、

當時一同安堵之心底ヨリ職掌研究可仕儀相少、一同之  
事情得卜傍觀仕、別紙之通奉歎訴候、恐惶頓首百拜謹  
言、

但別紙附士之中、御藩ヨリ 公用其外諸生等ニテ他  
国ヘ被差出候節ハ、鹿兒島藩士族ト御附状ニモ相  
見得申候、此旨モ言上仕候、恐惶伏拜欽言、

授読助

未六月十三日

池端拙藏

愚臣ハ井底之癡蛙、過憂慮悲歎哭泣之事情ヲ以テ建言  
仕候儀、恐惶戰栗鎮謹合掌伏拜泣血淋漓、夫外忼慨義  
烈之士不太尠、愚臣ハ頑懦且奮起悲愴憂念、而未嘗能  
暫忘也、国家有憂案、則如有我家我身、往古、

華山天皇詔曰、至如破家為国面折尸諫ハ是朕之願也ト  
拜見仕、又書曰、木從繩則正后從諫則聖夫人主者以納諫  
為先人、臣者以進讜言為任ト相見得、晉平公問叔向曰、  
国之患孰為大、对曰、大臣重祿不諫、小臣畏罪不言下  
情不上通、此患之大者也ト相見得、愚臣性賦魯鈍愚昧  
之不顧微軀、忼慨悲歎ニ迫リ、過憂慮既已、去亥正月  
廿一日ヨリ今日之至爰建言式拾一通、 太政官ヘ式通、

御前へ上訴旧御側役ヲ以テ三通、御樓門上書籍ヨリ拾

五通、兵器方へ尅通建言仕候、中旧御側役ヨリ差上候

建言ニ、御採用被為在為被成下、似合之義モ御座候ト、

一時如泮憂念内心歎喜罷在、其中尚書弼征ニ相見得候

通、兩御丸鳴子口之間へ奏被掛置被下候ハ、御藩内

数万之人民夜分ニテモ言上可仕、今通御樓門へ上書籍

御下ケ相成候テハ、下情不上通空虚相成候ト多有御

座、政之得失国ノ利害、御藩内偏懼リ候至大至剛之事

実、有欲遂不諱之詞無隱之議ハ、乃先年御廊下辺へ落

散、旧使坊主開封為仕哉ニモ、内々承及候事モ御座候

間、何卒已來諫鼓被召建被下度奉歎願候、今般歎訴之

義、悻然赤面流汗震慄惶懼之意惴々奮訊シテ、以テ左

ニ建議奉歎訴候、

兵器方附士、往古発起旧記家記ヲ以涉探索候処、文禄

元壬辰年、高麗朝鮮国等へ中古

義弘公 久保公御渡海ノ御秋、御側ニ式十人衆ト相唱

へ、武勇勝レ、走廻リ山坂嶮岨達者成者ヲ、鹿兒島士又

ハ外城衆之中ヨリ被召撰奉供被仰付、寸隙モ御側ヲ

不去、御同艦ニテ渡海、其後文禄二年癸巳九月八日、

久保公於彼地御卒去御報知、直ニ御舍弟

忠恒公彼地へ御渡海之御秋モ、御同様鹿兒島士・外城

衆之中ヨリ又被召撰、式十人衆ト相唱、御同艦ニテ

渡海、彼地御陣宮中向敵ヲ狙撃、或ハ突伏切伏、其戦

功余多他人ニ勝レ、其外万御使事等走廻リ達者之働ヲ

キ、別テ被為叶

御思召、又走衆ト改名被仰付、其後御帰陣御道具直ニ

自宅へ御預ケ被仰付、其后關ケ原御合戦等之御秋モ御

供被仰付、諸所之戦功ヲ以士へ御救免被仰付、其子モ

同前候者代々座附士被仰付、御城下平・加治屋町其外

諸方へ被召置、知行高拾ニ石宛被下置、其後御道具衆ト

改名被仰付、又小頭役ト相唱、足輕五人之頭ヲ相勤為

申由、物頭役之儀、慶長四五年ノ比被召建候由、座附

士御切米差上候ハ、表方奉公勝手ニ仕来之由相見得候、

右通諸所之戦功ヲ以被召出候者ハ、右通座附士被仰付、

右同様被召撰候中之式十人衆・走衆戦功無御座者ハ、

夫形ニテ御道具衆被仰付、其後定衆同心ト唱来、

吉貴公御在世ニ至リ、足輕ト名目被仰付、当分ノ足輕

共祖先ニテ御座候、尤モ座附士之儀ハ当分附士之祖先

ニテ、

御目見諸御礼申上候節ハ、当分之士族同様御敷居上ニ

テ申上来候処、

(爲律言責)

総州公御在世座附士之儀ハ、御敷居下ニテ

御目見諸御礼申上候様被仰出候筋旧記ニ相見得、其時

分直ニ一同ヨリ、

御先代様被召使候御同様被仰付被下候様、歎願爲仕由候へ共、

御当君様思召ヲ以、爲被仰付儀ニ候へハ、此涯以前之通難被仰付候間、至後世願申出候様御達シ相成筋、其時分之願書モ披見仕候、左候テ寛永ノ時分御城下へ六組被召建候節、当分之士族同様被入置、其後御兵具方附士・御納戸附士・奥附士抔ト名目被召替相動候処、

天明七年末七月向ニ支配頭支配へ被仰付候、以前六組ニ被入置候節ハ、小与頭次書又ハ依願書直ニ六組触役所へ差出来候へ共、以来向ニ支配被仰付候儀ニ付テハ、支配頭へ付、公私共可申出旨被仰出、其時分迄ハ何篇外城衆中ヨリ一等上ノ御取扱振相見得、其後漸ク無何ト士格被相下、郷士以下ト被仰出候節モ有之、一統抗慨悲歎沸騰仕居者モ段々有之、当御世態ニ至リ、当分ノ士格ニハ爲相成義ニ御座候、先般 御一新尔后、朝廷御布告之表ニモ、士族・卒・庶人ト拜見仕候間、中

古以来右様御人撰御召使士族御格式之者共御座候間、何卒先般旧福昌寺役人町田・鎌田・藤島三家之義、其

先祖代御直士之内ヨリ、

(爲律言責)  
仲翁公福昌寺御任職之御時依願被名附、代々福昌寺役

人相動来、致隠居候節ハ、二男ヨリ役人家致家督、三男以下ノ者共ハ、御奉公方等相動候儀無御座、無頼之身上罷居候ニ付、当御世態柄二男以下迄モ都テ与入被仰付被下候様、積年抗慨悲歎之折柄、歎願書旧組方へ相付、御奉公筋諸士同様被仰付被下候様數度差出申候ニ付、御吟味相成候処、以前諸士同様之御取扱被仰付置候訳モ御座候ニ付、歎願事情難被御黙止御筋合ヲ以テ、二男以下都テ与入并御奉公方、其外何篇士族之御取扱、慶應二年寅十一月被仰付候、右申上候兵器方附士之儀、右様以前諸士同様御取扱被仰付置候訳モ御座候ニ付テハ、右三家同様之事奉存候、既ニ一昨年、積年抗慨悲歎義士之者拾五六人御座候テ、知政所へ相付歎願幾度モ仕候へ共、御吟味不相付、却テ罪過被仰付、一代士族被仰付置候者モ士族被免、御奉公方モ不被仰付候処、其後三句程相立御救免被仰付、当分御軍治奉公仕候、乍併如元士族ハ不被仰付候、愚臣事ハ先般越



後口へ出兵被仰付、去々年三月凱旋難病煩悩治療勉強仕候処、漸ク快氣罷成申候、右義士歎願中ハ病氣中ニテ乍病席号哭涕泣罷成、尤出兵已前兵器方附士之儀、一同被為還復中古被下候様、此一事ニ付テモ御樓門上書籍へ五度程歎願書差上、其上追訴迄モ両度差上申候へ共、御採用不被為在、其後右申上候通、義士ヨリ知政所へ相付歎願書数度差上申候へ共、右通却テ罪過被仰付、実ニ案外罷成、愚臣事、去四月方ヨリ愈全快仕、嘗極知僭踰無所逃罪罷成申候ニ付、何卒合掌百拜、朝廷御布告通公然士族之御取扱被仰付被下度、當時士族ト卒トノ中間ニブライトマタカリ、一同不安堵之形勢、悲歎哭泣罷成申候ニ付、仰願ハ士民之好所ヲ御好被為遊、士民之惡所ヲ御惡被為遊、御思召ヲ以御憐愍被成下、一同旧来ヨリ是迄兵器方へ相付御奉公仕来申候付、御奉公等之儀ハ一往是内之通被仰付被下、一同愚昧之附士共、俄ニ困苦ニ落入申候テハ不便之至、又候御救訴言上仕儀案中奉存候ニ付、歎願仕通被仰付候上ハ、是内之通被仰付被下度奉歎願候、此義ニ付テハ、幾度モ恐惶戰栗一命ヲ抛奉歎願候外無御座候間、何卒格別々々ノ

御仁恵ヲ以愚臣心中

御賢察被成下、旧来無此上

御洪恩之程、生々世々忘却不仕、以来猶亦如何様之儀

ニテモ、

御国家 天下之御利益相成候様、力之及候丈ハ、粉骨

碎身命限り相働候様、一同議論相加申度、屹度改心肝

銘仕、永久

御洪恩ヲ奉報度奉存候、偏公議百方不決、於此一新之

秋則尔后莫成焉、故只管不願恐斯歎願申上候義、嘗全体

不調法之罪ハ難遁、如何様被仰付候テモ、聊奉恨義毛

頭無御座候間、何卒御一新之御秋ニスガリ、以来附士

一同安堵仕、平和之心底ヨリ出精奉職仕候様被仰出被

下度、

天照皇大神宮ヲ奉初、仰天合掌伏拜、日本之御神々様

へ、祈誓歎願申上候、

天神地祇モ御照覽被為遊、万一於此義毛頭モ偽リヲ申

上ニオキテハ、即時神罪ヲ可蒙、愚昧之赤心何卒仰キ

願ハクハ、

御賢察被成下、願意徹底仕候テ御採用被為遊被成下度、

犯万死奉歎訴、誠実深意之程宜御執成被成下度、惴々

恐惶謹言頓首々々、合掌百拜、

但

以前御取扱振被仰出候御書付写壹通相添へ、奉歎  
訴候、外ニモ段々相見得候へ共、事多故差上不申、  
何卒哭泣悲歎差迫り候愚臣ニ御座候ニ付、幾度モ  
奉歎訴候、尤外附士一同誠実同意前之事御座候へ  
共、一昨年知政所へ相付歎願仕候処、忠臣力不忠  
臣ニ相成、却テ罪過被仰付候ニ付、畏罪連名連判  
断然仕、愚臣一人ニテ附士一同之実意ヲ得卜勘考  
斟酌仕、且愚臣事、嘗國家之事実憂患愴々罷成居  
候ニ付、奉歎訴候、頓首々々百拜欽言、

兵器方附士

授読助

明治四年辛未六月十三日

池端拙蔵

佐平太事

平 清宗〔花押〕